Memory of purple

優しい傭兵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これも現実ならそれを受け入れよう。

これも運命ならそれに従おう。

忘れていても…俺はお前を忘れない。

目　次

彼女は・・・。 1
新たなスタート 17
３人組 33
神とつく神社 47
希から見た神とつく神社 57
厄日・・・？ 66
アイドル研究部 80
努力 92
会議 110
焼肉・・・美味い 126
記憶の片鱗 137
懐かしい 150
お気に入り１００記念ストーリー（前編） 168
お気に入り１００記念ストーリー（後編） 178
初めてで初めてじゃないデート 192

彼女は・・・。

「なんで君は……こんなに私に話しかけてくるの？なんで私に関わろうとするの？」

小学校時代、いつも1人でいた女の子がいた。親の転勤で各地をずっと転々としていた彼女は、転校するたびに作った友達とは別れを繰り返してきた。

辛い想いになるのはもう沢山。そのお陰で一体どれくらいの友達を失ったか。

だからなのか。彼女の中である結論が出来た。

『辛い事になるくらいなら最初から友達なんか作らない』

彼女はいつも1人でいた。誰かに接することなく、親からまた転勤の話が来るまでの学校生活を静かに過ごしている。

そんな時、1人だけ回りの同級生とは違い、彼女に何度も喋りかけていた男の子がいた。

何度も避け続けた。彼女にとって少し苦手なタイプだった。けど彼は諦めなかった。何度も、何度も喋りかけた。

疑問に思った。なんでこんな暗い私を…また時間が経てばここから居なくなるのに。記憶にも残らなくなるのに、どうしてここまでして私と仲良くなりたくなるのかが。謎だった。

だから聞いた。なぜ私にここまでするのか。

「俺さ…君と友達になりたいんだ！」

ストレート。時速２００キロを軽く凌駕するほどまっすぐな言葉

が心に突き刺さった。
今まで仲良くしてきた女の子達ですらこれほど真っ直ぐに言葉を飛ばしてくれたことは無かった。
「で、でも私…地味だし、ほかの皆より髪の色も少し違うし……それに…」
結局ここから居なくなるから。と言おうとした瞬間、彼の言葉が重なった。
「そう？君の髪の色、紫色の綺麗な髪じゃん！俺…君の髪の色大好きだよ！」
嬉しかった。こんなに私に真っ直ぐぶつかってくれた事が凄く嬉しかった。お母さんに褒められた髪の色を彼も褒めてくれた。心が凄く温かくなった。同級生に対してなんとも思っていなかった感情が少しずつ溶けていった。
「俺の名前…柴垣大和（しばがきやまと）って言うんだ！」
「しばがき…やまと…くん？」
「ねぇ。君の名前さ、もう一度教えてよ！」
これが彼と彼女のファーストコンタクト。

「わ、私…希…。東條希（とうじょうのぞみ）！」

私の…初めて出来た本当の友達。

＋＋＋

桜満開の時期である４月。俺、柴垣大和はある高校の校門に辿りついた。

【音ノ木坂学院】

いつ出来た学校かはしらないがかなり長い歴史を持つ女子高と聞いている。だが年々に新入学生の人数が著しく減ってきていると言う事も耳にしている。今はなんとか現状を保っている状況。そこで共学化にしなければいけない可能性として俺が『共学前の男子試験生』としてこの学校に編入。普通ならこんな事許可される訳ないのだがこの学院の理事長が俺の親とかなりの仲とのこと。所謂コネってやつだ。

「まぁ、前の学校だと居辛くなったしな…丁度よかった」

校門をくぐると目の前に赤いリボンが付いている音ノ木坂の制服を着ている、綺麗な金髪をポニーテールにし、輝いているように見え

る蒼眼のスタイルのいい女性が立っていた。

（あ、この人が行っていた迎えの人か？）

「君が理事長の言っていた試験生でいいのかしら？」
「あ、そう…です。えっと……貴方は？」
「自己紹介するわ。私は音ノ木坂学院2年生で生徒会長の絢瀬絵里です」
「ご親切にどうも。自分、本日この学校に編入しました柴垣大和です。同じく2年生です」
「あら、同い年なのね。なら敬語じゃなくていいわ。よろしく大和」
「よろしく…っていうか初対面なのに早速名前呼びかよ」
「男のくせに細かい事を気にするのね。これから卒業まで一緒に過ごす同級生なんだから仲良くしましょ？」
「超フレンドリーだな絢瀬って」
「本当は私だって反対よ。イキナリ女子高に男を呼ぶなんて。襲われそう…」
「おい」
「って言うのは冗談で。不安が少しあるくらいね。…でも理事長が決めた事なら仕方ないかしらね」
「受け入れ早っ」
「高校生にもなってうじうじするのはかっこ悪いでしょ？」
（女の子なのに男前）
「コロスわよ？」
「こっわ!?」
「失礼なこと考えてるの丸分かりよ」
「エスパー絢瀬」
「変な異名着けないで！今から理事長室案内するから付いてきて！」
「わ、悪かったから置いてくな！」

絢瀬絵里の大和への第一印象。

『失礼な男』

＋＋＋

「ところで聞きたい事があるんだけど…」
「ん？」
「どうやったらそんなに大きくなれるの？正直言うと首が痛いわ…」
「初対面からしたらそりゃそうだろうな」

何を隠そう。いや隠してるつもりは無いんだが俺の身長は通常の男子高校生よりもずっと高い。数字で表すと１９２センチ。別に遺伝だとかカルシウムの過剰摂取だとかホルモンがどうたらとかそういう類のモノじゃない。飯食って体動かしてよく寝てを繰り返してたらこんな姿になった。他の人を上から見下ろす形になるのはご了承願いたい。男として背がでかくなるのは嬉しいがこれもこれで困る時がある。天井が低いところだと頭当たるし、体に合う服が無いしで。良いこともあるが悪い事もある。『吉凶は糾える縄の如し』って奴だ。

「貴方が……ぞみの言っていた…」
「ん？何か言ったか？」
「っ…。いいえ何も無いわ。気にしないで」
「？…おう」

「…さて到着。ここが理事長室よ」
絢瀬が扉を二回ノックすると中から「どうぞ」という言葉が返ってきた。絢瀬の跡に続いて中に入ると沢山の優勝旗やトロフィーが飾ってある棚が沢山ある部屋とご対面。そしてその奥の大きな椅子に座っている女性…『南日和子』。俺の両親、どちらかというと俺の母親の親友で同期だったとか。顔を見るのは初めてだ。

「来たわね。私がこの学院の理事長です」
「編入してきました柴垣…「大和くんよね。知ってるわ」さいですか…」
「どう?奏は元気にしてる?」
「俺の親父をぶん投げるくらい元気です」
「ふふっ。やっぱりね。あの人は色々とぶっ飛んだ事してるからね」
奏とは俺の母親の名前。そして親父をぶん投げるっていうのは家で実権を握っているのはうちの母親なのだ。別に親父がふがいない訳ではないが親父はお母さんに頭が上がらないのだ。一体過去に何があったのか親父に聞いてみたのだがこの世の終わりかってぐらいの顔で『やめてくれ挽肉にされる』って震えてたな。
マジで何があった……?

「理事長。柴垣大和さんの編入は本当に大丈夫なのでしょうか?他の生徒たちも不安の声を上げているのですが…」
「大和くんは問題を起こすような子じゃないわ。しかも女の子に手を出すような最低な男の子でもないわ。私が保証します…」
「ですが…」
絢瀬の言いたい事はよく分かる。いきなり『はい男子高校生が来ることになりましたよろしく!』って訳にもいかないからな。しかも女子高だぞ?中には男嫌いな奴だって居るわけだ。そんな子達の衛生面でも色々と大変な気がする。

「なんとかして我が校を存続させるためでもあるの。わかってくれるかしら？」
「……はい。私もこの学院が廃校になったりしたら嫌ですから」
「ありがとう。さて大和くん」
「はい？」
「君は絢瀬さんと同じクラスになるわ。分からない事があったら彼女に聞いてください。それとこの学院の法則や注意事項などはこの冊子を読んでね」
「わかりました」
『音ノ木坂学院必須項目・特記事項』と書かれた冊子を鞄に押し込んだ。

「今はこれで以上よ。この学院は奏も私も卒業した学院だから卒業まで有意義に過ごしてください」
「過ごせれば…ですけどね」
「奏に詳しい話は聞いてるわ。貴方が悪くないって事も…」
「ははっ…」

そう。俺がこの学院に転校する事にそこまで抵抗が無かったのはそこにある。あの事件のせいで俺は元いた高校からこの女子高にやってきたんだ。思い出したくも無い…あんな思い出…。いや…悪夢と言うべきか。

「さて、軽い説明は終了。絢瀬さんは自分のクラスへ。大和くんは一度職員室に行って自分のクラスの担任の先生に挨拶してきて。何か不都合があったらここにくればいいから」
「わかりました」
「了解っす」
「では…楽しい学院生活を過ごしてね」

軽く会釈し、理事長を後にした俺は、こちらを見つめてくる絢瀬に

問いかける。

「聞かないんだな」
「……聞いてほしいのかしら？」
「いや…聞いたら俺の気分もお前の気分も悪くなるぞ？」
「なら聞かないわ…。けど生徒会長は全学院生の味方なの。だからもし踏ん切りがついたら私にもはなしてくれないかしら…？」
「……生徒会長として立派だよ絢瀬は・・・。そうだな……少し時間が過ぎたら話す。そのときはよろしく頼む」

優しく微笑んだ絢瀬が俺に手を差し伸べてきた。

「えぇ……。改めて生徒を代表して。ようこそ音ノ木坂学院へ」
「あぁ。これからよろしく頼む」

絢瀬と握手した俺は職員室へ向かった。

＋＋＋

「デカイ縮め」
「無茶言いますね!?」
職員室について名前を出すと、ジャージに身を包んだ女性が手招きしたのでそちらに向かった直後、縮めとの命令。ひどすぎる。

「お前が柴垣大和か。私がお前のクラスの担任の山田だ。一年間よろしく頼む」
「よろしくお願いします」
「早速言うがたった一人の男だからって容赦はしない。他の女子生徒と同等の扱いを…いや、お前が想像している以上の事をするからそのつもりで」
（こえぇぇ…）
「色々と苦労すると思うぞ柴垣。大きな声で言えないがこの学院の教員の半数は試験生の事については猛反対している。日頃のお前の動きに眼を光らせているから気をつけろよ」
　当然といえば当然だな…。女子高にいきなりどこの馬の骨とも分からない男が来たんだ。神聖な女子高が汚れるとか清き伝統がとか言われてそうだ。
「山田先生はどうなんですか？」
「私は賛成派になる。成るべくして成った事でもあるしな……。考えたとしても良い案が浮ばないからな。それなら今出来る事をするために試験生としてのお前の意見を大切にしようと思っている」
「男前…」
「私だからいいが他の人に言うなよ？物理的にも精神的にも殺されるぞ」
「今までの１００倍くらい気をつけます!!」
　こりゃ当分精神磨り減りそうだ…。
「ま…不安だろうが頑張れ。何かあったら相談に乗ってやるからな」
（前言撤回。いい先生だ）
「はい。ありがとうございます。先生」

・　・

「お前のクラスはこの2年Ⅲ組だ。生徒会長の絢瀬…はもう会ったか。それと生徒副会長のやつもいるから学校生活ではそうそう困る事ないかもしれない」
「まさかのすげえ面子が揃ってる…」
「先に私が入って簡単な説明をするから、呼ばれたら入って来い」
「了解です」
「では……」

ガラッと教室の扉を開け山田先生が入っていった。まあ呼ばれるまで少し時間があるから外でも眺めるか…。

「……あいつがこの学校に居てくれればなぁ…」

あいつの顔が頭に浮んでくる。綺麗な紫色の髪。大きくそしてキラキラと光っている瞳。小学生の頃から中学1年生の頃という時間の間ずっと一緒に居た女の子。2年生になる前にその女の子は親の転勤で中学校を転校。転校した時もそれはそれはありえないくらい俺に抱きついて大泣きしていたのが今でも脳裏に焼きついている。転校してからそれ以降会うことが無くなったが、俺は一度もあいつを忘れたことはない。

忘れられないくらいに・・・あいつが好きだった。

「今頃、あいつどこで何してんだろうな?まさか本当に嫌われたのかもな……」

深い溜息を吐いた。

「おい柴垣。入って来い」

「あ、はい」

今だけさっきまで考えてた事を頭の隅っこに追いやった。クラスの女の子達に小さな男だと思われないように気合を入れる。身長はでかいですが……。

「来たよ…」

「うわぁ…おっきい…」

「凄い男らしい体・・・」

「顔は普通だけど…かっこいい…」

(うわぁ…やべぇ…)

クラスに入ると、緊張の波が一気に来た。本当にクラス全員女の子だ。しかもどいつもこいつも可愛いし…。なにこれはハーレムか?俺高校2年生でハーレム体験できてしまうのですか?汗止まらないのですが…。俺あの子とずっと居たから慣れてるつもりではいたがそんな比じゃない。女子高正直舐めてた…。

クラスの女の子達全員がこっちを見て次々と言葉を漏らす。

しかも視線動かしてると絢瀬がニヤニヤしながらこっちに小さく手を振ってやがる！あの野郎覚えとけよ…。超すっぱい梅干食わしてやる。

「えー…こいつが試験生の男だ。見ての通り背がデカくて強暴だから気をつけるように」
『キャーー!!』
「うおいっ!?」
「手出すなよ…？」
「誰が出すか!?」
「さ、自己紹介しろ」
「話聞けよ!!」

少し先生に言ってやりたいがやめておこう。今は自己紹介が優先だと言い聞かせ黒板に自分の名前を書いた。

「えー…編入してきた柴垣大和です。いきなり女子高に男が来た事で焦ったりすると思いますがどうか仲良くしてください。身長１９２で得意なのはバスケットボール。好きな事は映画鑑賞と体を動かすことなど。嫌いなのは激辛の食べ物ですね。どうぞ、よろしくお願いします」

クラス全員から祝いの拍手を貰う。それで少しだけ気が楽になったので軽く深呼吸をする。

そんな時、クラスを見渡すと、見覚えのある顔があった。
絢瀬の後ろの席に座っている女の子。見間違いじゃない。女性として立派に成長しているが昔の面影がある。
綺麗な紫色の髪。俺は彼女の髪が好きだった。忘れたりしない…。
このクラスに俺が良く知っている女の子が居た。

やっと会えた。

「希!!」

「!?」

名前を呼ぶとびくっと体が跳ねていたが今はそんな事どうでもいい。俺はすぐに希の席に近付き手を握った。

「久しぶりだな希!元気にしてたか?あれ以来会ってないから見間違えたぞ」
「え・・・えっと…」
「や、大和……。今、希は…」

絢瀬の声が聞こえるが気にしない。今俺は凄く興奮している。仲が良かった希が居た事だからでもあるが今は彼女が元気だったことが凄く嬉しい。

「どうした希？そんなにあたふたして・・・」
「……そ、その…」

俺は次に彼女が出した言葉を一切予想していなかった。

その言葉はありえないくらいの破壊力があった。

こんな事があっていいのか。なんでこうなった…。なぜなんだ……。

この時、俺は自分にずっと自問自答を繰り返した。だがそれも儚くなんの意味も持たなかった。

なんで・・・?なんでだ・・・?

俺の中で何かがガラガラと崩れ落ち、砕けた。

「君は…誰なんかな?ウチの事を……知っているの?」

「え……？」

彼女は…東條希は…記憶を失っていたのだ。

新たなスタート

「……なんだって…こんな事に…」

あの後、希の発した言葉は俺の心に突き刺さった。まさか希が会わない間に俺との記憶が無かった。記憶喪失という言葉は何度も聞いたことがある。実際に俺の回りでなった奴は居なかったから本当にあるとは信じては居なかった。

まさかそれが……しかも東條希本人がそれになっていたとは考えすらなかった。予想すら出来なかった。

信じられなかった。こんな事が、こんな現実が…しかも今俺の目の前で起こるとは思いもよらなかった。

山田先生が、

『久しぶりの再会なのは分かるが今はＨＲだ。いきなり女子に手を出す気かお前は?』

その言葉ですぐ我に返った。本当は色々と聞きたい事があるがそれは後にしようと考えた。

俺の席は窓側の１番後ろの席だとの事。今だけは落ち着こうと思ったとき、絢瀬が小さな声で。

『後で生徒会室に来て……話すから…』

と耳打ちしてくれた。

ＨＲで山田先生が注意事項や俺に関する情報など色々と喋っていたが、俺はそんな事に耳を傾けれなかった。頭の中が希の記憶喪失の事で一杯だった。

『これでＨＲ終わりだ。授業も無いから今日はすぐに帰るように。解散!』

・・・

という事で勝手ながら先に生徒会室に入らせてもらった。
絢瀬が言った言葉は多分希も連れてくるという意味も含まれてるはずだ。すぐに来ると思うから今は出来る限り落ち着くことに専念しよう。

今から話される事を思うと……どんどん悪い方向に考えそうだ。

「はぁ……記憶喪失…か」

記憶喪失。意識障害によって、過去にある時の経験を思い出せないこと。主な原因は頭に強い外的衝撃が加えられた事によってなる外傷性の症状。記憶が失うといっても、別に言語が分からなくなったり日常生活を送れなくなったりはしない。
忘れるものとしたら、なにかしらな物体や『これがどういったモノなのか』を記憶する『意味記憶』。個人が体験した出来事に関する『エピソード記憶』を失うケースが多い。希が俺の事を忘れていた……となれば失ったのは俺との思い出を記憶する『エピソード記憶』が頭からなくなったと予想できる。

だが記憶喪失になった本人にしか分からないから、本当に記憶が失ったのかは判断できない。単なる一時的な物忘れなのかもしれない。

更に言うと記憶喪失で失った記憶を取り戻すには、【自分の記憶に関するキッカケ】を思い出す事である。希が一体どういった事で記憶を取り戻せるのか分からない。

何がキーワードになるか。そこを理解するのが先だろう。

とは言っても俺は中学2年生以降から今に至るまでの希を知らない。前と一緒で転校を続けて今まで過ごしてきたのか、それか絢瀬と出会い一緒に今までを過ごしてきたのか。

分からない事だらけだ。頭が完全に追いついていない…。

「これが全部夢だったら楽なんだがな」

「夢な訳ないでしょ。現実を見なさい」

扉が開いて絢瀬と希が入ってきた。うわ、嫌な時に入ってきたな…。

「どこから聞いてた？」

「はぁ…記憶喪失かってところから」

「最悪な時に聞いてたなお前！」

聞き耳立てるって趣味悪いな。

こんなくだらないこと喋っていると、絢瀬の後ろからひょっこりと顔を出して、ちょっと怯え気味に俺を見つめてきている希の姿があった。

「あ…希」
「えっと…やっぱりウチの事知ってる人やんね？」
「っ…あ、あぁ……」
「…ごめんなさい。ウチ君の事全然『知らない』んよ」

（知らない…か）

心がズキッと痛くなったのを感じた。
「知らない……んだな。俺の事…」

いや、仕方ないのかもしれない。そうだ記憶喪失だから仕方ない。そうだ…『仕方ないんだ』。
そう、自分に思い込ませた。

「えっと、柴垣大和君やんな？」
「……あぁ、そうだ」
「ウチ、東條希って言うんよ。さっきは怖がってごめんな？…出来れば仲良くしてな！」
「……あぁ、東條…希…だな。分かった、よろしくな…希」

まるで初対面の女の人と自己紹介しているみたいだった。希が俺に対して喋る言葉が全部馴れ初めの男に対する言葉に聞こえた。神様は最低だ。なんでこんな辛い事を希に与えてしまったんだ…。

「希…かぁ。いきなりやけどなんか初めて聞く感じじゃないねんな」
ボソッ

「え？」
「やっぱり……君の事なんかなぁ……」ボソッ
「希…？何か言った？」
「ん？なんでもないよ？」
「そう？」

俺も絢瀬も希の言葉を聞き逃してしまい、一瞬シンッとした空気になったが絢瀬がすぐに話を薦めてくれた。

「さてと…悪いけど大和。そこに座ってもらえるかしら…？」
「おう」
絢瀬の横に希が座り、その目の前にある椅子に俺が座り込んだ。

「……じゃ、話させてもらうわね。なんで希が記憶喪失になったか……」
「……おう」
「希もいいかしら…？」
「うんっ…。この人もウチの過去の事を知っている人だから大丈夫やで」

希が俺に対して言う他人行儀が凄く胸が痛くなるが今はそれを考える場合じゃないと判断し、胸の奥にそっとしまいこんだ。

「いくつか質問してもいいか？」
「うん…大丈夫やで」
「記憶喪失で記憶が消えているんだよな？」
「うん…」
「どの記憶がなくなったんだ？」
「そうやね……。色々な作法ややり方なんかの記憶はあるから、多分【エピソード記憶】かな？」

「……そうか」
「エリチや今までこの学校で出会った人達の事は覚えてるんやけど、高校に入るまでの記憶が全然思い出せなくて……」
　まさかのビンゴかよ…。くそったれが…。

「じゃあ次の質問。その似非関西弁はなんだ？記憶がなくなったと同時にそうなったのか？」
「あ、これはちゃうんよ。中学生の頃転校が多くて一時期関西にも行ってたからこうなっただけなんよ」
「……建前わね」
「もうエリチ！それは言わんといてよ！」
「あはは。ごめんごめん」
　という事は希が記憶喪失になったのはつい最近の話しになるのか。中学時代に別れてきりどうなったかは分からないが、一緒に過ごした時間の記憶を思い返していると、希が関西に行ったという話しは聞いた事が無い。

「単刀直入に聞くが、俺の事はおぼえてないんだな？」
「そう…やね。全然分から……うっ！」
　希が頭を抑えて呻きだす。
「希！」
「大丈夫!?」
「だ…大丈夫……ちょっと頭が痛くなっただけやから・・・・・・」
「無理に思い出そうとすると痛くなるのか。無理はしなくていい」
「そうよ希。無理はしないで・・・」
「ありがと2人とも…」
　少ししたら落ち着いたのか、希も椅子に座りリラックスする。

「大和。少し私からも質問いいかしら・・・？」
「あぁ」

「希とは本当はどれくらいの付き合いなの？」
「希は記憶にないと思うが俺と希は小学生から中学一年生の最後までの時間の仲だ」
「・・・じゃあ、希が言っていた男の人って大和のことなのね」
絢瀬が意味深な発言をした。
「・・・その言い方だと、まるで前から俺の事を知っているみたいな言い方だな」
「ええ。希と出会って記憶を失う前から貴方の話は聞いていたわ。1番大切な人だったって」
「ウチ・・・そんな事言ってたんやね」
「初対面の時にすぐに分かったわ。体付きがよくて綺麗に整えられた短い髪。写真も見せてもらったわ」
「なるほどな。どうりで俺に対してフレンドリーなわけだ」
「希を良く知ってる貴方なら大丈夫かなって思ったのよ」
「・・・・・・買いかぶりすぎだ」

俺は別に良い人なんかじゃないのだから。

「じゃ、そろそろ聞かせてくれ。なんで希が記憶を失ったのか。・・・・・・なんでこうなってしまったのか」
「そうね。これは私より希自身から聞いたほうが良いわね。希」
「う、うん。ウチが話すよ」
「別に無理して全部を喋らなくて良い。そうしたらまた頭痛を起こすかもしれないからな」
「そうよ。覚えている事だけでいいから」
「分かった・・・・・・じゃあ話すで」

深く深呼吸した後、希がポツリと呟いた。

「ウチが記憶喪失になったんは・・・・・・高校に入って事故にあったからなんよ」

・　・　・

ウチ・・・いや、私がこの音の木坂に入学して４ヶ月ほど経った頃に事故にあった。だがその事故と言うのは交通事故とかそういうものではない。故意に起こった事故だったと思う。

私は今、この学校から少し離れた場所にある神田明神という神社で巫女のバイトとして働いている。その時期は日差しが強い日だったのは覚えている。朝から夜までバイトをしていて、そろそろ帰る時間になったとき、何かが起こった。

エリチに聞いた話だと私は神田明神に入るまでにある階段で倒れていたのだ。幸いに怪我は無かったが、どうやら頭を強く打ったとの事らしい。

だが、気になるのはここじゃない。階段に落ちていた私の状態だ。普通自分の足を踏み外して階段から落ちる場合はうつ伏せで落ちるはずだ。なのに私はうつ伏せの状態ではなく仰向けの状態で階段から落ちたのだ。

【あの階段はいつも行き来している場所なのにも関わらずそのような形で落ちるものだろうか？】

そこから私の過去の記憶は消えてしまった。
エリチの事は覚えている。音ノ木坂で出会った人達と『繋がっていた』事は覚えていた。けど・・・なぜか分からないが高校に入るまでに覚えていた記憶がごっそり私の頭からなくなっていた。小学校、中学校・・・そこらで起こった出来事。今、私の目の前にいるこの男の人・・・柴垣大和という人の事も覚えていない。

思い出せない。

私の音ノ来坂に来るまでの記憶は、綺麗さっぱり消えてしまったのだ。

ワタシの記オクは一体・・・どこニいっテしまっタのだろウか・・・。

・・・

「これが・・・全部や」

張り詰めていた空気から開放されたからか、体の緊張が一瞬で途切れ、椅子に深く座り込み・・・・・・脱力した。

俺は、自分が今一体何が起こったのか認識するのが凄く遅かったと感じた。まるで誰かが作った小説を読んだような気分だ。ライトノベルを読んでいても、想像するにつれてこんな事が起こるわけ無いと認識しているのにも関わらず、こんな事が起こるものなのかと考えている自分がいた。

こんな話は作り話だ！と言い飛ばす者もいるだろう。だが俺は作り話には聞こえなかった。

これが現実なのだ。現実逃避しているのではない。俺は今しっかりと現実を認識した。

今ここで起こっているのがすでに現実。希の言葉を信じずにはいられなかった。

今まで疑っていたが、今確信した。東條希は本当に記憶喪失なのだ。

「絢瀬。希は本当にその神田明神で倒れていたのか？」

「ええ。ＬＩＮＥの返信が中々来なかったから神社に様子を見に行っ

たら、その神社の周りに住んでいる人達が群がっていたの。何事かって思って見て見たら・・・・・・ということよ」
「希。事故の直前も直後の記憶もやっぱりないのか？」
「そうやね・・・。自分でも思うくらい強く頭強く打ったと思うから・・・」
「重症だな。仕方ない事だが・・・」
「急いでも仕方ないからゆっくり記憶を戻すようにしているわ」
「この記憶喪失を知っているのは？」
「エリチと・・同じ2年生の1人と後は1年生の仲良しな3人組み・・・かな」
「先生には・・・流石に言っても仕方ないか」
「私も先生に話したほうがいいとは考えたけど、多分現状は変わらないと思うわ」

まさに八方塞だ。けど今無理に記憶を戻そうとしたら希の頭になにかの異常が起こるからそれだけは避けたい。医者でも記憶を戻す事は出来ないだろうし。やっぱり今は様子みとしてゆっくり思い出すしかないか・・・。

「ねえ大和。貴方生徒会に入らない？」

突如、絢瀬が提案してきた。

「生徒会？」
「元は貴方は学校を存続させるための手段である共学化前の試験生と

して入ってきたでしょ？男子校生の意見として学校や生徒会に手を貸してほしいのよ」
「それと今の話に何か関係あるのか？」
「建前は生徒会に力を貸してほしいだけど他にもあるわ。希の過去を知っている唯一の人物として希の側に居て欲しいのよ。もしかしたら過去の希と面識のある大和がいれば記憶を取り戻すキッカケを得れるかもしれないわ」
「なるほど。一理あるな」
「でしょ？生徒会や希の為に力を貸してくれないかしら？」
「けど、いきなり俺なんかが入っていいのか？他の生徒や先生が黙っちゃいないと思うが・・・・・・」
「そこは理事長にお願いしてみるわ。かなりの確立・・・いや、絶対ＯＫはもらえるわ」
「自信満々だな」
「これでも私は賢い可愛いエリーチカって言われてるぐらいよ！」
「うわ今の歳で痛い発言・・・・・・ドン引きだ」
「これがエリチの可愛いところなんよ。ちょっとポンコツだけど」
「間違いなくポンコツだ」
「大和も希も私の扱い悪くないかしら!?」
「いや全然」
「もー!!」

生徒会・・・な。確かにアリだな。別に記憶を戻すのを急いでるわけでもないが、あの時から好きだった女の子のためなら何か力になってあげたい。それに・・・俺に対して初対面みたいな希を見てると心が痛くなって仕方ない。ちょっと辛いしな・・・・・・。

「希はいいのか？」
「ウチは賛成かな。君が居てくれたらウチも楽しいし安心するんよ。

多分・・・迷惑掛けると思んやけど・・・」
「迷惑だなんて思ってない。困っている奴を放っておけないんだ。力になるぞ」
「いいの？ウチは記憶が無いから君の事全然知らんよ？ウチからしたら他人みたいな存在やのにそこまでしなくていいんやで？」
「俺がしたいからするだけだ。それにさ・・・・・・」
「それに・・・・・？」

椅子から立ち上がり希の目を見つめる。

「希は小学校時代からの友達だ。友達として出来る事をさせてくれ」

そうだ。過去に起こった事はどうしようも出来ない。戻る事なんてできないんだ。なら今を進むしかないんだ。

「なら・・・・・・これを言うのもおかしいけど、またよろしゅうな！柴垣君！」

（柴垣君・・・か）

「あぁ。またよろしくな希」

窓から強い風が吹き込んで髪が靡く。そう・・・これが新しいスタートなんだ。

ここで俺は・・・はじめて東條希に出会った。

＋＋＋

「柴垣大和君・・・かぁ」

その日の夜、家で紅茶を飲みながらポツリと呟く。今日だけで色々な事が起こった気がする。

学校に男子が入り、そしてそれは私を知っている男子。私の無くした過去を知っている男子。私を・・・知っている男子。

生徒会室で話しをしていて思った。私は記憶を失ってからある夢を見る。

そこは白い世界。なにもなくそこに私がポツンッといた。その白い世界を見渡していると目の前に人が立っている事に気がつく。男の人だ。
顔も分からない。声も聞こえない。けど、私に何かを言っていた。私に手を差し伸べてくれていた。
あの人は誰なんだろうか。ずっと私を呼んでいる気がした。
柴垣大和君に会ってもしかしたらと考えた。もしかしたら夢に出てくる男の人は彼なんじゃないのかって・・・・・・。
けどそれを証明する事は出来ない。今からもゆっくりと・・・・・・答えを見つけてこうと・・・私は思った。

「彼と出会って・・・なんか懐かしい気がするのは気のせいなんかなぁ・・・」

紅茶を飲み干し洗面台に置く。明日も朝から神田明神のバイトだから早めに寝ないといけないためベットに潜り込んだ。

「柴垣君に名前呼ばれると・・・心が凄く暖かいなぁ・・・」

そんな時、私の中で1つの疑問が浮んできた。

私は何か忘れてはいけない事を・・・忘れてはいけないヒトがいるのではないかと・・・。

答えが分かるのは・・・まだ先なのかもしれない・・・・・・。

3人組

ピピピピッ　　ピピピピッ

ベットの中でもぞもぞしながらなんとかして目覚ましの音を聞かないように努力していたが全く効果は無し。

うるさい・・・超絶うるさい。なんで平日にこんな時間に起こされなきゃいかんのだ。まだ朝の6時だぞ・・・。学校に行くとしても8時に起きれば余裕なくらいだぞ。そもそも俺は昨日寝たの3時だぞ。遅くまで色々してた俺の責任でもあるがどういうことだ。しかもこの目覚ましを設定したのは俺じゃない『あいつ』だ。そろそろしたらあいつが目覚ましで起きない俺を起こしに来るはずだ。その時が勝負だ。だれが6時なんかに起きてたまるか！このまま寝腐ってやる・・・。何人たりとも俺の眠りを妨げるのは許さん！

ガチャ・・・バタンッ

（来た・・・）

「起きてください兄さん。もう6時ですよ？早くしないとランニングの時間が減りますよ？」

ユサユサと俺を揺さぶってくるがそうはいかん。今日は寝腐ってやると決めたんだ。

ランニングと言っていたが、俺は一週間に数回は早起きして近所をランニングしている。流石に食っちゃ寝を繰り返してたら脂肪が付くからな。デブ駄目絶対。別に早起きしなくても俺は時間があるときに公園でバスケをしているから大丈夫なのだが・・・体が覚えてしまったご様子。だが！今その話は別だ！こんな時間に起きて動いたら音ノ木坂での授業で寝てしまう。そんなことしたら先生たちや絢瀬、希にも格好が付かない。

結論：寝る

「・・・・・・・・・・・・」
「兄さん。起きないのですか？」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・そうですか」

よし！諦めたな・・・。

だがこの考えがすでにフラグとなっていた。

「よろしい・・・ならば戦争です」

刹那、仰向けで寝ている俺の体に鈍い音が響いた。

「ふんっ！」
「ぐふぅっ!?」

振り下ろされた拳が俺の鳩尾にクリーンヒット。その衝撃でとてつもない嗚咽感が喉を走り出し、息を詰まらせる。更にその攻撃があまりにも強すぎてベットから転がり落ちてしまった。
「げほっ！ごほっ！」
「やっぱり起きてましたね。惰眠を貪るほど時間を潰す事はないですよ」
「こっ・・・この野郎！もっとマシな起こし方は出来なかったのか!!」

「夜遅くまで起きていて且つ時間ギリギリまで寝ていた人に言われたくないです。もう高校生なのですから規則正しい生活を送ってください」
「たまには休んでもいいだろ！」
「私は運動してるカッコイイ兄さんを見るのが好きなのですが・・・・・ダメですか？」
「よしおはよう。今日も良い朝だからランニングすると気持ちいいかもな」
　素早い手の平返し。だってそんな可愛く言われたら従うしかないだろ。目までうるうるさせてまったく。大丈夫・・・可愛い妹を持っているのは俺だけじゃないはずだ。男は単純だから可愛くとか綺麗にとかそんな単語が付く行動をされるとコロッと落ちてしまう。俺もその内の1人だ・・・・・・。

「おはようございます兄さん。朝ごはんもありますが、ランニングとご飯どちらを先にしますか？」

　そしてさっきから俺と喋っているこいつ。黒いサラサラとした髪をポニーテールに纏めており、若いのにも関わらずスタイルもそこそこ。成績優秀運動抜群容姿端麗の中学生。

「少し腹空かしてからの方が良いだろうから先に走ってくるよ。朝ごはんはまた後で」
「分かりました。では気をつけて行って下さいね」
　微笑んだ顔でこちらを見てくる。これだけで癒される。決して病気ではない。

「おはよう。桜」
「おはようございます兄さん」

俺の自慢の妹・・・・・・柴垣桜である。

＋＋＋

「どうですか？新しい学校は」
ランニングを終えて席に着くと桜が軽い朝食を作ってくれていた。
「いただきます。そうだな・・・・・・周り女ばっかりだから精神的にやばい」
「そこは仕方ないです。お母さんがしたことですから」
「感謝はしてるけど・・・何だか腑に落ちない」
「同意です」
まあ慣れるしかないんだろうけどな。これから約2年間・・・・。
精神的にイカれそうなんだけどなぁ・・・。

「希さんとは・・・・・・どうでした？」
「・・・・・・ん？」
「元気・・・でしたか？」
桜の顔が少し曇る。まあ無理も無い。こいつもこいつで希とは仲が良かったんだ。昨日家に帰ってきたときに言ったら泣きそうな顔になってたしな。希に可愛がってもらってたし、希のことを姉のように慕っていたしな。
箸を器に置き桜の頭を優しく撫でてやる。
「心配すんな。なんとかしてあいつの記憶は取り戻すから」
「はい・・・・・」
「お前はいつも通り俺の事で叱ってくれたり褒めてくれたりしてくれればいいんだよ。お前のためにも頑張るから」

「わかりました・・・。頑張ってください兄さん」
「おう」
ここで頑張らないと兄貴としてカッコ付かないからな。
「ごちそうさま。美味かったよ」
「お粗末さまです。食器はシンクにおいていてください」
「了解」
シンクに食器を置いて音ノ木坂の制服を身に付ける。
「兄さん」
「ん？」

「今は女子高に居ますが・・・・・・もうバスケ部などには入らないんですか？」
「・・・・・・・・・・・・」
「少し・・・気になって・・・」
「バスケ部には入らないよ。一人でするのも意外と悪くないしな」
「そう・・・・・・ですか」
「それに・・・・・・」
「はい・・・？」

バスケ部などには入らない・・・・・もうそれはあの時に決めたんだ。バスケは好きだが・・・その意思を曲げるつもりは無い。
「俺には新しい居場所があるからな」

＋＋＋

転校して初めて行われた授業。まぁこれぞといって問題があるわけでもない。一時間目から六時間目まで難なくクリア。授業の内容も難しいわけでもなく簡単でもなく・・・。

別に俺は勉強が出来ないわけでもない。人並みにはできているつもりだ。得て不得手は勿論あるがな。

授業中に絢瀬や希を横目で確認したりもしている。さすが生徒会長と副会長・・真面目に授業を受けてらっしゃる。おっと、こうやって見ていたら他の女の子達から変態扱いされてしまう。これぐらいにしておこう。

そして下校前のＨＲま終わり、絢瀬と希に声を掛けられた。

「大和。生徒会室に行くわよ」
「今日から柴垣君も生徒会の一員やからな」
「けど俺は前の高校でも生徒会なんてやった事無いぞ?」
「大丈夫。初めての人も大歓迎よ」
「バイトの勧誘かよ」
「まあ最初は慣れへんやろうけど大丈夫や思うで」
「まあやれることはやるよ」
「それじゃ行きましょう!」

２人の後ろに付いていく。見た目が凄いシュールだ・・・。２人の女の子の後ろを１９０超えの男が歩いてるんだからな。

「・・・・・なんでこの学校に男がいるのよ・・・」
「しかも会長副会長の後ろについていって・・・・・早速媚びてるじゃない・・・」

そんな陰口が聞こえたが、俺は敢て無視をしておいた。

その陰口を叩いている女子の方を睨みつけながら・・・。

・　・　・

「ここが生徒会室よ」

「ほう・・」

扉を開けるとそこにはコの字に並ばれてある机とキャスター付きの椅子。そしてホワイトボードが1つ。ホワイトボードにはＡ３サイズの年間スケジュール表。部屋の角にはデスクトップ方のパソコン。その近くには伝票が張られてあるダンボール。まさにザ・生徒会室って感じだな。

「他の教室よりかはちょっと小さいけど3人やったら丁度いいサイズやろ？」

「そうだな。初めて生徒会室に入ったがちょっとドキドキするな」

「何言ってるのよ。面接をするわけじゃないんだから」

「そうだが・・・」

ワクワクするというかドキドキすると言うか。なんだが気分が高揚する。

２人とも何時もの定位置の椅子に座ったので俺も席に着く。

「じゃ、改めて、生徒会へようこそ大和」
「歓迎するで。ウチとエリチしかおらんけど」
「あぁ。大丈夫だ・・・よろしくな」
「簡単に説明するわね。今生徒会は私と希で活動してるの。そこで大和には生徒会書記の役職についてもらうわ」
「おう」
「この時期は特に学校行事が無いから、今の生徒会の仕事は各部活の予算や学校の設備、生徒の要望に応えるとかの小さな作業とかかしらね」
「地味だな」
「そんなもんよ。けどこれが意外と重要なのよ。生徒会宛に届いた生徒からのお願い事も多いのよ？」
「例えば？」
「教室内に冷房暖房などの電化製品を入れて欲しいとかね」
「あー・・・分かる気がする」
「地球温暖化がどうとかって言ってるけど、本音は夏は暑いからクーラーが欲しいとか冬はヒーターとかが欲しいって要望があるのよ」
「分かる気がするが多少は耐えれば良いのにな」
「私も思ったけど、人には限界があるから」
「限界を超えてこそ意味がある」
「諦めが肝心って言葉があるで？」
「日本語難しい・・・・・・」
「ああ言えばこう言うってやつよ」
「それが人間ってモノやからね」
「高校生が考えて良い論議じゃねえぞ」
「まあそういうのもあるって事よ」
「ふーん。後は？」
「後は・・・・・・そうね」

そんな時、教室の外から叫び声が聞こえた。

「――ちゃん怖い・・・ちゃん・・・・・・なん・・・・！」
「待ちな・・・・・・！・・・・こそは許し・・・・・・！」

「え？何事？」
「あー・・・またあの子たちね」
「え？あの子達？え？」
「えぇーっと・・・この前話したやん？1つ年下でウチの記憶喪失を知ってるって子達」
「おう」
「それが今外で叫んでる子達なんよ・・・」
「どんな奴らだまったく・・・」

元気があってよろしいとは思うがここはあくまで学校だ。少し静かにしてもらおう。
生徒会室の扉をゆっくり開いた。

瞬間。

「絵里ちゃん！助けむぎゅうっ!?」
「うおっ!?」
女の子が勢いよく俺にぶつかってきた。

「んん～～！痛いよぉ・・・」
「お、おい。大丈夫か？」
蹲った女の子の脇に手を入れて持ち上げる。所謂高いたかーい状態。この学校の女子はこんな子ばっかりか？うるさいし軽いし。

もっと慎みを持つべきだ。

「んん・・・。あ、あれ？なんで私こんな高い位置にいるの？」

「穂乃果！やっと見つけましたよ！今日と言う今日は・・・・って、え!?」

「穂乃果ちゃん。廊下は走っちゃダメだよ・・・・・・・・え？」

扉の奥から綺麗な青色のロングの女の子と、ちょっとグレー寄りの髪で、頭で輪っか作っている女の子が入ってきた。そして顔を上げると、俺が持ち上げた女の子はオレンジ色の髪でサイドテールに纏めている。

（これ見た目やばいんじゃね？）

１９０超えの男が女の子を持ち上げ、それを目撃した女子２人。犯罪臭しかしねぇ・・・。

「うわわわ!?何だか凄い事になってるけどまず私を下ろしてくださ～い！」

「ちょっとそこの人！早く穂乃果をおろしなさいこの巨人！」

「おい誰が巨人だ」

「捕食されちゃうよ穂乃果ちゃん！」

「いやしねえよ。俺は巨人じゃねえよ」

「良いからまず下ろしてあげて巨人さん」

「いやだから誰が巨人だ」

「食べたらあかんで巨人さん」

「だから誰か巨人だ」

入ってきた女の子3人から見た大和の第一印象。

『巨人』

＋＋＋

「えっと、この人が噂になってた試験生の男の人？」
「そうよ。柴垣大和君よ」
「不法侵入者かと思いました」
「それだったら生徒会室にいる時点でアウトだろ」
「お母さんが言ってた人ってこの人なんだ」
「え？お母さん？」
「あぁ、柴垣君知らんかったね。その子の母親がこの学校の理事長さんやねんよ」
「あぁ・・・把握」
（どうりであの人の面影があるわけだ）

先ほどのゴタゴタから数分後。絢瀬、希、俺の順番で椅子に座り、3人の女の子達は俺たちの真正面に座らせた。ごめんねオレンジの子。流石にいきなり男に持ち上げられたらびっくりするよな？ちょっと涙目だったし・・・。また今度お菓子あげるから」

「あ！もしかして希ちゃんと絵里ちゃんが言ってた男の人でもあったりする？」
「そのもしかしてよ穂乃果」
「じゃあ、希先輩の記憶喪失の事も」

「勿論やで海未ちゃん」
「だから生徒会に入ってるんだ」
「大正解やねことりちゃん」
　なるほど。穂乃果ちゃんに海未ちゃんにことりちゃんか。この子たちが希の言っていた1年生の女の子達か。
　ふむふむ・・・。皆、優しくて良い子だな。

「えっと、自己紹介が遅れました！さっき貴方が持ち上げたのが、私、高坂穂乃果です！1年生です！」
「先ほどは巨人と言ってしまい申し訳ありません。私も同じく1年生、園田海未です」
「私も同じく1年生。南ことりです！」
「先日転校&編入してきた男子試験生の柴垣大和だ。よろしくな」
　意外とビビらないものだな。こんな体がデカイ男がいたら普通驚くぞ。

「予想してた人と違う気がします」
「違う？」
「はい。希ちゃんや絵里ちゃんから聞いた感じからだともっと美形男子ってイメージがあったんです」
「それは俺がブサイクだと？」
「あ！いえそうじゃなくて！こんなに逞しい人だとは思ってもいなくて・・・」
「まあそうなるわな」
「女子高に男が編入してきたのは納得できませんでしたが・・・害がありそうな人じゃなくて良かったです」
「おれはゴキブリかよ・・・」
「お母さん。良い人連れてきたよね～」
（全くの偶然の産物なんだけどな）
「ところで穂乃果？どうして海未に追いかけられてたの？」

「それがね絵里ちゃん！この前のテストがダメだから今日は私の家で徹夜です！って言ってきたの！」
「当たり前です！高校生にもなっておいてテストで４０点は恥ずかしいでしょう！」
（それは流石にだめだろ・・・）
「だってだって！頑張って勉強したのに時間が経ってたら全部頭から飛んでたんだもん！」
「マジか・・・」
「だから今日は私の家で猛勉強です！他の人達に遅れをとってしまいますよ」
「穂乃果ちゃん。私も手伝うから頑張ろう？」
「うぅ～・・・鬼ぃ・・・」
　それは君の自業自得じゃないかな穂乃果ちゃん。
　確かに勉強が苦手って言う人はそこらにゴロゴロいる。けど勉強が苦手だからってそれに手を抜いて良い理由にはならないぞ。

「そういえば、大和先輩は希ちゃんとはどういった関係なんですか？」
「俺？」
「確かに気になりますね。絵里先輩や希先輩から話しは聞いていましたが、詳しく知りたいですね」
「どういった経緯でこの学校に来たのかも私達知りたいです」
「俺の・・・経緯か」
　希との過去と、俺の経緯・・・か。
「あ、でもウチもう少ししたらバイトがあるんよ・・・」
「そっか。今日は希のシフトだったわね」
「希って今でもバイトしてるのか？」
「うん。あの件から変わらず神田明神でバイトは続けてるんよ」
「大丈夫・・・なのか？変わらずバイトしてて」
「心配しすぎやで柴垣君。あれからエリチや穂乃果ちゃん達が神田明神にまで来てくれて一緒に帰ってるから」

あの件。俺もそれに付いてよく知っておかないといけないのかも知れない。記憶を失った現場に行ったら記憶の手掛かりは掴めるはずだ。

神田明神・・・。希の記憶が消えた場所・・・。

「じゃあさ！皆で行きましょうよ！」

穂乃果ちゃんの一言で全員驚愕の表情。

「え？行くって何処に？まさか・・・？」

「そうです!!」

行き先は・・・。

「神田明神に!!」

神とつく神社

長い階段を登り、前門をくぐると目の前には大きな正殿。
俺たち人間よりも何倍も大きい建物。この建物は昔から現代までずっと護られながら存在していたのだろう。

俺、いや・・・俺たちが今居るのは東京都の千代田区にある神社。

『神田明神』

神聖な場所にして、俺の古くからの友である、東條希が記憶を失った場所である。

なぜこの場に足を踏み入れたのか。
それは1時間ほど前まで遡る。

＋＋＋

「神田明神に？」
「はい！そこならの希ちゃんの事も見守りながら大和先輩の話も聞けます！」
「ちょっと穂乃果！大和先輩たちの都合もあるのですよ！しかも希先輩が働いているその場なんて思ってのほかです！」
「いや俺は特に用事はないけど・・・」
「うっ・・・そ、それに！絵里先輩たちの生徒会のお仕事などもあるのですよ!?」
「今日は大和への生徒会の説明ぐらいだったからこれからの仕事はな

いわよ？」
　海未ちゃんの言葉すべて玉砕。
「ことりぃ・・・」
「はい海未ちゃんよしよし」
　海未ちゃんがことりちゃんに抱きついておーいおいおいと泣き始めた・・・。

「今は海未ちゃんは放っておいて！一緒に行きましょう？神田明神！」
　容赦ないね・・・穂乃果ちゃん。
「俺は別に構わないけど、絢瀬や希は？」
「私も特に用事が無いから大丈夫よ」
「ウチは・・・皆とはたまにしか一緒におれへんけど大丈夫かな」
「じゃあ行きましょう！」
「中々強引な子だな」
「そこが穂乃果の良い処でもあるんだけどね」

　各自、学校を出る準備を整え神田明神に向かった。

・　・　・

　というわけだ。
　希はバイトの姿、巫女服を着るために一度席を外した。
　俺、柴垣大和と絢瀬、穂乃果ちゃん、ことりちゃん、海未ちゃんは神社の縁側に座り空を見上げていた。
「ここが神田明神・・・か」

「大和先輩は初めてですね。ご感想は？」
「静かで落ち着く。多分ここに布団があれば確実に寝れる」
「日差しでポカポカしますもんね～。ことりちゃん眠くなってきたぁ～・・・」
「穂乃果ちゃん。希先輩が来るまで我慢だよ？」
「コラッ。希が来てもダメよ。行儀が悪いから」
　でも確かに気持ちが良い。今は４月の下旬前に入ろうとしたところだから日差しが心地良い。日差しに当たりすぎると特に女の子にとって天敵かも知れないが今は少しぐらいいいだろう・・・。あ～・・・眠い。
「そういえば穂乃果ちゃん達は・・・」
「穂乃果で良いですよ。男の人にちゃん付けで呼ばれると何だか変な感じなので」
「そ、そうか。なら穂乃果達は絢瀬ととても仲が良いみたいだが新しく入ってきた1年生なのになんでそんなに親しいんだ？」
「穂乃果やことりと私たちは絵里先輩は小学校時代からの幼馴染なんです。私達が小学校1年生の時に絵里先輩が転校してきて仲良くなったんです」
「ほぉ・・・。だから海未ちゃんたちは絢瀬と仲が良いんだな」
「はい。あ、私も海未でいいですよ。大和先輩は優しそうな方なので」
「私もことりでいいですよ」
「お褒めの言葉、恐縮の鋳まい。なら、海未とことりと呼ばせてもらうよ」
「「はい」」
「穂乃果達は日本に来てからの私に凄く親切にしてくれて、日本語も彼女たちから教わったのよ」
「え？日本？」
「あぁ、言って無かったわね。私の祖母がロシア人でね。私はロシアのクォーターなのよ」
「なるほど。だから綺麗な金髪に蒼眼なんだな」
「も・・・もうっ・・・。綺麗なんて言って褒めても何も出ないわよ・・・

?」
「率直な感想を言っただけなんだが・・・」
絢瀬が顔を真っ赤にして俯いた。なんでだ?普通に褒めただけなんだが・・・。
「大和先輩ってあれだよね・・・」
「天然って奴ですね」
「多分そこに鈍感も含まれてると思うよ?」
おいコラ君たち何を話している。聞こえてるぞ!
「何を話してるん?」
そこに巫女服に身を包んだ希が現れた。白色の袖振りに赤色の袴。そして2つに分けて結っていた髪を1つに纏めている。
「・・・・・・綺麗だ・・・」
『え!?』
「え・・・?」
「あ!す、すまんつい口にだしてしまった!」
「あ、いや別に大丈夫やで!?そ・・・そっか・・・、ウチ綺麗・・・なんやね・・・?」
「お、おう。その綺麗な髪もあの時と全然変わってないな・・・。綺麗なままだ」
「そう・・・なんやね・・・あ、ありがとう・・・」
いかん。顔が凄く熱い・・・。そして希の顔も湯気が出るくらい真っ赤だ。だって仕方ないじゃないか。最後に見た希の姿は中学校時代なのだ。あの時よりもぐっと大人に近付いた希の姿はとても美しい。しかもスタイルがかなりいい。そこらの男なら簡単に悩殺できるん

じゃないのか？

「大和。褒めるのはいいけどそのへんで。希の顔が凄い事になってるから」

「す、すまん・・・」

「べ、別にええんやで？じゃ、じゃあ！ウチこの辺掃除しながら話聞いてるからみんなで何かお話しててて!!」

そういい残し、希は箒を持ってパタパタと走っていった。

『大和先輩セクハラ～』

「は!?アレの何処がセクハラだ！」

「だって・・・ねぇ？」

「ですね・・・」

「ポイントは高いけどちょっとストレート過ぎます」

「はい？どういうこと？」

「大和は分からなくて良いのよ」

「？」

この４人が一体何の事を言っているのか全く理解が追いつかない。なに？これは俺が悪いのか？ただ褒めただけなのに？最近ちょっと男性が女性に対するラインが凄く厳しくありません？

「では、改めて。大和先輩と希先輩との事話してくれませんか？」

「とは言っても俺にも言いたくない事とかもあるんだが・・・」

「それは無理に話さなくて大丈夫です！」

「言いたくない事は無理に話さなくていいですよ」

「おぉ・・・。絢瀬は？」

「私も聞きたいわね。１年生の頃に希からよく聞いたけど大和の口から直接詳しい事を聞きたいわ」

「・・・まぁ、出来る範囲だけだからな？」

そう言うと４人とも頷いてくれた。

なら、少しだけ過去を振り返りますか。

「希と出会ったのは小学2年生の頃だったかな・・・」

＋＋＋

季節はよく覚えていないが、突然転校してきた事だけ覚えてる。凄く暗い顔してずっと俯いてたのはよく覚えている。自己紹介の時は名前をちゃんと言っていたのか聞こえてないくらい小さかった。

クラスの女の子達が希によく話しかけていたが、全然喋ってはいなかった。なぜか自ら人と関わる事を避けていた。日々が過ぎていく事に女の子達は喋りかける回数がずっと減って行き、最後には誰も喋り掛けてなかった。

俺はそれを傍でずっと見ていた。ずっと希が気になっていた。なぜか分からないが転校してきた当初から友達になりたいと思っていた。髪が好きだった。綺麗な紫色の髪でずっと見ていたかった。希の事をもっと知りたかった。

だから、俺は彼女にずっと話しかけた。

勿論最初は避けられ続けた。けど俺は諦めなかった。何度も話し

続けて希もどんどん俺に心を許していってくれた。

彼女と色々な事をして過ごした。俺の家に連れてきてゲームをしたり、公園で遊んだり、水族館や動物園にいったりなど。遊ぶ時は彼女と一緒に時間を過ごした。

小学校6年生になると俺の家によく泊まりにも来ていた。

第3者からみたら完全なるラブラブカップルに見えただろうが、それは全く違う。

『俺の片思い』だった。

そのとき希が俺の事をどう思っていたのか知らないが俺は希に恋をしていた。

彼女の髪好きだった。彼女の綺麗な瞳が好きだった。彼女の笑った顔が好きだった。彼女の優しいところが好きだった。

告白・・・はしなかった。いや、出来なかった。

中学校2年生に上がる前に希の親が転勤となり一緒に進学した中学校を転校する事になった。突然の出来事のお陰で俺も戸惑いを隠せないでした。

転校と知った希は俺の家に来てずっと泣いていた。

俺に抱きつきながら離れたくないとずっと懇願していた。俺はその時は希の頭を撫でてやる事しか出来なかった。

別れが訪れた時、俺は希にこう伝えた。

『また絶対・・・会いに行くから!』

それから希がどうなったかは分からない。俺は味気ない中学校生活を送り、小学校時代から続けていたバスケットに時間を費やして、全国大会に何度も出ている強豪校にスカウトされ入学。

そしてまあ、色々とあって俺は今この音ノ木坂学院に転入してきたわけだ。

俺は、絢瀬、穂乃果、ことり、海未に大まかないきさつを伝えた。

＋＋＋

「・・・とまあ、こんな感じだな」

ちょっと一息ついて、自動販売機で買ったお茶を飲もうと視線を移した瞬間、４人が涙目になっていた。

「は？なんで泣きそうになってるの？」

「その・・・大和の今の立場を考えると・・・・・・」

「希ちゃんの事・・・好きだったんですね」

「あ、希が近くに居るのにも関わらず俺とんでもない事言ったかも・・・」

「いえ、今希先輩はちかくに居ないので大丈夫かと思います」

「ほっ・・・よかった」

「けど、今の希先輩は記憶を失ってるから・・・・大和先輩との過去の思いでも・・・」

そうだ。俺はそれが悲しい。希の記憶から消えた俺との日常は何一つ残って居ないのだ。伊達にも5年は一緒に過ごしたのにも希の記憶には一切残らなかった。俺との思い出は幻想だったのではないかと思ってしまう。

けど・・・。

「けど・・・俺は諦めたくない。希と過ごしたあの時間は幻でもなんでもなかったんだ。それを無にしたくない」

これが今の俺の答えだ。希と過ごした時間は本物だ。俺はあの時のように希と楽しく喋りたい。もっと希と遊びたい。希と一緒にいたい。そして今度こそ・・・『希に告白』がしたい。

中学校の頃からこの気持ちは絶対に揺るがない。

あの出来事があったが・・・、俺は希が好きなんだ。

まあこんな話をしているとその場の空気も変な雰囲気になってきていた。
４人とも俺の顔みて呆然としている。ふむ・・・・・・どうやら色々と余計な事を言い過ぎたのかもしれないな。

「悪い。ちょっと今だけ席外す」

お茶を一飲みし、座っていた縁側から離れる。

「大和・・・」
「なんだか・・・思っていたより重い話だったね・・・」
「希先輩が記憶を失って一番つらいのはもしかしたら大和先輩かもしれないね・・・」
「長い間一緒に居たからこそ・・胸が苦しくなるのかもしれませんね」

しんみりとした空間がその場を包み込んだ。

・
・　・
・

「ちょっと感傷的になりすぎたかな・・・・・」
自分らしくない事したかもしれない。今まで過去の事を他人に喋った事はそうそうなかったのだからな。まあ彼女たちなら別に誰かに言いふらしたりなどはしないはずだ。

「1番良かったのは希が聞いてなかった事なんだがな・・・・・」
過去の記憶を失っていても初恋相手の前では恥ずかしいからな。
「やれやれだぜ・・・・・・ん？」
気晴らしに神社の中を練り歩いていたら吊り下げられてあった絵馬があった。数は軽く１００を超えており１番最初に吊り下げてあるだろう人の絵馬は全く見えていない。神様に滅茶苦茶頼ってるな。
見ていくと皆似たようなお願い事が書かれてあった。
『彼女が出来ますように』『大学に合格しますように！』『〇〇が元気になりますように』などなど。
「神様がいい人ならこのお願い事叶えてくれないかね・・・」
色々と絵馬を覗いていると数多く吊るされている場所かな少し離れた場所に１つだけ絵馬が吊り下げられてあった。
「？」
絵馬に書かれてあった文を読み上げてみた。

『神様。私のお願い事を聞いて下さい・・・・・・。私から大事なものを奪わないで下さい。一生のお願いです・・・。【私の記憶を返してください】　東條希』

力強く書かれたそれを見た俺は俯いてしまった。
そうだよ神様・・・居るなら叶えてくれよこの願い・・・・。

湧き出てきた感情を抑えるように俺は、その絵馬を見つめながら力強く拳を握った。

希から見た神とつく神社

今日は柴垣君に生徒会の事についての説明をする日・・・だったんやけど、穂乃果ちゃんの提案で神田明神に行く事になった。

まあ、ウチも神田明神でのバイトがあるから別にいやではない。

神田明神に付いたらウチは早速着替えに向かった。神社で働くから巫女服に身を包ませる。けど毎回思うのはこの巫女服に着替えると胸が苦しくなるんよねぇ・・・。お腹と腰の部分を帯で結ぶんやけど・・・なんだか苦しい。特に胸が・・・。

今度神主さんに言ってサイズ変えてもらおう。しかも巫女服って下着を着たままだから色が透けないか心配・・・。あ、別に自分の胸が他の子よりほんの少し大きいからって自惚れてる訳やないよ?!本当やで!?

着替えも終わってみんなの場所に戻ると、柴垣君が皆に何か言われて凄い焦っている姿が見えた。近付く時になんか鈍感・・・?とか金髪がどうとかって聞こえたけど・・・。

やっぱり柴垣君エリチの髪色とかに疑問は抱かなかったんやね。分からなくも無いけどね。音ノ木坂って髪色の校則については凄くルーズやから。皆個性豊かな髪やからええと思うけど。

「何を話してるん?」

話に混ざろうと会話の話に入ると、柴垣君が凄いウチの事を見つめてきた。

(なんやろ・・・ウチの巫女服に違和感でもあるんかな・・・?)

けど、柴垣君はウチの思っていた言葉とは全く的違いの言葉を発した。

「・・・・・・綺麗だ・・・・」
『え!?』
「え・・・?」
　柴垣君がウチの事を綺麗だと言ってくれた瞬間、顔が熱くなるのを感じた。ちょっとだけ・・・ちょっとだけやけどドキッとしてしまった。もう・・・不意打ちは反則やよ?
「あ!す、すまんつい口にだしてしまった!」
「あ、いや別に大丈夫やで!?そ・・・そっか・・・、ウチ綺麗・・・なんやね・・・?」
「お、おう。その綺麗な髪もあの時と全然変わってないな・・・。綺麗なままだ」
「そう・・・なんやね・・・あ、ありがとう・・・」

　そ、そっか・・・。ウチは昔にも髪の色を褒めてくれた時があったんだ・・・。けど、いくらなんでも面と向かって言ってくるのは卑怯だ。さっきよりも顔が熱くなってきてる。ウチは中学時代どんな子だったんだろ?記憶が無いから思い出したくても思い出せない・・・。
　ん?柴垣君もなんだか顔が熱くなってるようだけどちょっとだけニヤニヤしてる。変な事考えてるんやないやろうね・・・。
「大和。褒めるのはいいけどそのへんで。希の顔が凄い事になってるから」
「す、すまん・・・」
「べ、別にええんやで?じゃ、じゃあ!ウチこの辺掃除しながら話聞いてるからみんなで何かお話しして!!」

　そういい残してその場から離れた。あれ以上あの場所にいたら顔がどんどん赤くなってしまう・・・。

　今日のお仕事は境内の掃き掃除とお守りなどの補充。あとは本殿の拭き掃除。

彼らとの会話も聞きたいので今日は少し気合を入れて仕事をこなそう。

＋＋＋

本殿での拭き掃除、お守りの補充を粗方終え、最後の仕事である境内の掃き掃除をしよう。

箒を手にし、落ち葉などが溜まっている場所を掃除しているとき、柴垣君たちの会話が少しだけ聞こえた。

私と柴垣君の出会いは小学校2年生の時代。ウチの両親、特に父親は転勤族。全国の至るところの職を転々としていた。父親が転勤するたびにウチと母親は暮らしていたその場所を離れ、慣れない土地、慣れない近所関係を何度も体験している。

父親はずっと私に謝ってきた。

『ごめんな希。俺の転勤のせいでずっと迷惑をかけて・・・』

記憶を失う前からずっとこの言葉を言っているそうだ。けど、今の私の状態ではなんとも言えない。私にはそんな記憶が一切ないのだから。

記憶を失った私に両親は一生懸命に今までの私の生活を教えてくれた。高校に入るまではこんな事をしていた。中学校時代は部活は入らずに勉強を頑張っていた。けど転勤が続いたおかげで毎回勉強についていくのが大変だった、など色々と話してくれた。

そして高校は毎度転勤で迷惑をかけるわけにも行かないので、私は親と別れて東京で一人暮らしをする事になった。東京は私の小学校時代から暮らしていた場所だから、暮らすのには不都合は無いだろうとの事だ。

別に1人暮らしに困る事は無かった。

何かをする時に使う『手続き記憶』と料理、洗濯、掃除の使い方を

覚えている『意味記憶』は頭に残っていたお陰か、家事に支障はなかった。

「ウチと柴垣君は・・・そんな昔から・・・」

しかも私と別れた時に約束までしてくれていた。

私に絶対会いにくるって約束をしてくれているのに私の頭にはその記憶・・・いや、思い出さえ消えてしまっている。

なんだか、罪悪感が沸いてくる。その頃の私も、それを言われて嬉しかったはずなのに・・かなり印象的な思い出なのになくしてしまっている。

神様はいつになったら私の記憶を返してくれるのだろう。

＋＋＋

大方の掃除が終わり、掃除用棚に箒を返そうとしていた時、絵馬の前に柴垣君がいた。

盗み見でちょっと趣味が悪いが今は許してもらいたい。

1つ1つ見ながら歩いていた柴垣君だったが途中で足を止めた。

なんで？と考え少し近付くと、1つの絵馬を眺めていた。それは何を隠そう私が神田明神で始めて書いた絵馬が飾られている場所だった。

私は神様にお願いした。無くなった記憶を返してくださいと。それを見られてしまった。なんだか恥ずかしい気持ちもあるが、悲しい感情の方が勝っていた。過去の私を大事にしてくれた柴垣君は一体どんな気持ちで絵馬を見ているのだろうか。傍から見ると、拳を強く

握り締めているのが見える。

「柴垣君」
「あ、希・・・。悪い、見ちまった」
「ううん、気にせんといて。いずれ見られるとは思っていたから」
嘘。できるなら誰にも、特に柴垣君には見られたくなかった。
こんな事しても帰ってこないことくらい自分が一番よくわかっている。けどこうでもしなきゃ他に記憶が蘇る手掛かりが無い。最終的に神頼みになってしまったのが情けない。

「記憶が戻る傾向はあるか？」
「ううん。今は全然かな・・・」
「そっか。まあ焦っても何にもならないから地道に思い出していくしかないな」
「そう・・・やね」

今でもよく分かっていない。このまま探し続けたら見つかるのだろうか。それ以前に私は記憶を取り戻したいと思っているのか、分かっていない。エリチに出会って、穂乃果ちゃん、ことりちゃん、海未ちゃんにも出会って一緒に過ごしている今が大好き。そして柴垣君と出会った・・・いや、再会したと言った方が正しいかもしれない。
まだそんなに時間は過ぎていない。けどこのほんの少しの時間でも私は大好き。

（今まで・・・・・・ちゃんとした友達なんて殆どいなか・・・・・・あれ？）

「どうした希？」
「あ、え、その・・・さっき、覚えていないのに・・・今までちゃんとした友達なんて殆どいなかったって事を覚えてて・・・」

「っ!?」
「え・・・なんで?高校に入学して思い出す事なんて全然なかったのに・・どうして今いきなり・・・」
「それって・・・ちょっとずつだけど記憶が戻ってきてるんじゃ・・」
「多分・・・。心のどこかで、過去は忘れたくないって思ってるのかもしれへん」
「今の希はどうなんだ?過去の事思い出したいのか・・・?」
「ウチは・・・」

今・・・か。私は・・。

「ウチは知りたい。自分が一体過去でどんな出来事を体験してきたのか。柴垣君と一緒に過ごした事を知りたい。・・・ウチは・・・自分の記憶を取り戻したい・・・。そして確かめたい・・・」

あの頃の私はどんな人だったのか。自分が自分の事を確かめたいって言うのはなんだか奇妙な話だが、それでもだ。自分の事は自分でもよく分からない。

『だから知りたい』

風が神社を吹き付け、落ちている枯葉を舞い上がり、私達を包み込んだ。

「ウチは・・・いや、私は一体誰なのか」

「それが、今の希の気持ちなんだな」
「うん」
「そっか。なら、俺はそれに着いて行くぜ」
「柴垣君がウチに？」
「俺はお前の友達だ。友達としてできることをしてやりたい。だから、その自分を探し出す事に、俺も協力させて欲しい」
「本当にいいの？今のウチは柴垣君が知ってるウチじゃないんやよ？それでもいいの？」

私は彼をまだよく知らない。彼も今の私を知らない。言い方を変えたらこれは他人同士の会話、他人を手伝うって言ってくれている。

どうして？

「だって俺たち、あの頃からずっと友達だろ？」

友達・・・。友達か・・・。

そっか。ウチは柴垣君と友達だったんだ・・・。

「え!?」
「ふぇ・・・？」
「お、おい希どうした!?」

「なに・・・が?」
「俺なにか悪い事したか!?ごめんな!?」
「?」
柴垣君が何を言っているのかが分からなかった。けどそれがどういうのか分かった。
私の頬を涙が流れていた。別に悲しかったわけじゃない。記憶を無くしたのにずっと私の事をずっと友達と言ってくれた事が嬉しかった。優しい・・・。いや、彼は優しすぎる。

「うえぇ・・・ごめんねぇ・・」
「な、なんで謝るんだよ!謝るの俺だろ!?」
「ありがとぅ・・・じばがぎぐん」
「あぁ、ほら涙拭けって、な?俺ありがとうって言われるような事してないんだけど・・・」

ありがとう柴垣君。そしてごめんね。出来る限り待っててて欲しいな。私も頑張るから。
また、ちゃんと柴垣君に会いに行くから・・。

『それまで・・・まっててね』

神様、どうか私の記憶が近々帰ってきますように・・・。

その後、柴垣君の目の前でウチが泣いている姿をみたエリチが、後ろに般若がいるんじゃないかってぐらいの形相で柴垣君を殴り飛ばしていました。

厄日・・・？

ダムッ・・・ダムッ・・・

ボールを手のひらで体育館のフロアに叩き付けると、弾む音が大きく響く。

今は誰も居ないから音がいつもよりもよく聞こえる。

この音が凄く好きだ。長い間聞いていた音だからか、それとも単純に理由無くこの音が好きなのか。心に響くと言ったらいいのか、心地よくて気持ちいい。

弾んでいるボールをキャッチしクルクルと回す。

「・・・よし」

ボールを持ち直す。自分から見て。右手でボールの正面を掴み左手は添えるだけ。腰を落とし、軽く膝を曲げる。下から上に向かって体中のバネを使って飛び跳ねる。

飛び跳ねた瞬間、ボールを額の前まで持っていき、右腕を伸ばして軽くスナップをかけボールを投げる。

ボールは綺麗な弧を描いて飛んでいき、空中に位置しているリングの真ん中を捉えた。

シュパッ・・・。

ボールはリングの真ん中を通過し、リングに括り付けてあるロープの筒を通りすぎ重力に逆らわず綺麗な音を立ててフロアに落ちた。

「この音が、1番大好きだな」

もう少しリングから離れた場所から打つかと意気込むと、体育館の正面扉が大きな音を立てながら開いた。

「やっぱり、貴方だったのね」

「絢瀬に希・・・？」

「こーらっ。バスケ部も使ってないときに体育館使ったらあかんねん

で。ちゃんと生徒会を通しよ」
「俺も生徒会だけど？」
「屁理屈言わない」
「あっはい」
「けど、やっぱり上手いわね大和。綺麗な音立ててシュート入ってたじゃない」
「これでも元バスケ部だからな。経験者も伊達じゃないんだよ」
「けど、なんで続けんかったん？そんなに上手いのに勿体無いよ？」
「あ・・・いや、まぁ・・・色々とな」
「希」
「あ、ごめん。ウチ無神経やったね」
「いや良いんだ。俺も続けたいとは思っていたんだ。けど、そうもいかなくてな」
「・・・・・・そっか」
「人間は誰しも伝えたくない事もあるってことよ。これ以上の詮索はダメッ」
「そやね」
「悪い・・・ありがとう」
　ちょっとしんみりとした空気だったが、すぐさま絢瀬がその空気を変えた。

「ねえ大和。ダンクできないの？」
「ダンク？」
「それだけ背が高かったら流石に届くんじゃない？」
「まぁ、届くぞ？一応。自慢じゃないが俺ジャンプ力も高いぞ」
「ならやって見せてくれないかしら？生で見たいのよ」
「ウチもウチもー！柴垣君のかっこいいところ見てみたいー！」
「別に構わないぜ」

　ボールを掴み、こんどはバスケで言うフリースローラインに立つ。手首と足首を回し膝を軽く曲げて屈伸する。少しずつ体は動かして

るからどこも痛くない。最後に首を左右に振りゴキゴキと骨を鳴らす。その場で軽くジャンプし体をほぐす。

「んじゃ、行くか」
「ちょっとドキドキしてきた・・・」
「ウチも・・・」
足に力を入れフロアを蹴る。ドリブルを突きながらリングに向かって一直線に向かってダッシュ。ある程度リングに近付いた瞬間、右足で踏み込み左足で地面を強く踏み全身のバネを使ってジャンプ。ボールを右手で持ち、飛んでいる最中に頭の高さまで持っていく。
（このまま・・・）

リングを捉えて右腕を振り下ろす。狙うは中心。

「でぁっ!!」

ドガァンッ！

リングの真ん中にボールを叩きつけた。
「「おぉ!!」」
ダンクを決めたところを見た2人は歓喜の声を上げる。少し照れるが自分も満足だ。
後は、綺麗に着地すればオーケー。

だと良かったのだが・・・。

俺は2人の前で着地に失敗し、盛大にずっこけたのだった。

そのこけっぷりを見た2人は腹を抱えて、口元に手を当てて笑いを本気で堪えていた。

くそダサいじゃねえか・・・。

＋＋＋

朝での珍場面があったが、あの2人以外に見られてないのでよしとしよう。2人にはおもいっきり笑われたのが腹立たしい限りだけどな!!

あ！なんで体育館にいたのか説明するとたまたま朝早く学校に来た俺は特にやることも無いので学校中を散歩していた。そんな時に音ノ木坂の事務の人が重い荷物を運んでいるのを発見。朝の軽い運動だと思いその荷物運びを手伝っていた。荷物は3つありその1つが体育館の備品だったようなので俺がそれを担当。残りの2つが事務の人が持っていった。

渡り廊下を通り体育館に到着した俺は、渡された体育館の鍵を使い中に入った。備品を体育館倉庫に入れた後、ちょっとだけ体育館を見て回ろうかと思った時に、フロアの中央にバスケットボールが1つ転がっていたのだ。恐らくバスケ部が昨日の練習の時に仕舞い忘れたのだろうと推測。入れるついでに少しだけシュートでも打とうかと思ったわけ。

閑話休題。現在は数学の授業。まあ言っても1年生の時の復習だからどうって事ない。勉強は好きじゃないのでこの時間は本当に退

屈だ。首を鳴らして回りを見渡すと絢瀬と希が目に入った。流石に2人も生徒会の仕事で忙しいのか軽くあくびをしていた。けど流石だ、疲れているのにも関わらず真面目に受けるところは生徒の鏡だな。

ふと希と目が合った。希は恥ずかしいのか教科書で顔を隠して横目でチラリと俺を見て軽く手を振ってきた。なにそれ可愛い。

俺も手を振り返すと希がニコッと笑みを零す。あ、なんだろう・・・凄い癒されるのだが気のせいか？

「柴垣。余所見をする前に黒板見とけバカモン」

「ぬべぁ!?」

先生の振り下ろした分厚い教科書が頭に直撃。それと同時に変な声が出てしまった。

その瞬間クラス中が笑いに包まれ俺をバカを見る眼で見てくる。いや、確かに俺が悪いけどそこまで笑わなくてもいいだ・・・って希たちも笑ってやがる。絢瀬はまた口元を押さえて笑いを堪えており、希は声を出しながら笑っていた。しかもその眼には笑いすぎて涙がうっすら。やめて俺を見ないで。皆さん今授業中だよ。授業に集中しなさい。あ、それ俺か・・・。

「ブツブツ言っとらんと返事ぃ！」

「ほぶっ!?」

教科書、2回目のクリーンヒット。またもや笑いが起こる。

あれか？今日は俺は笑われる日なのか？

・

・　・

・

「いやー柴垣君には笑わされたわ。笑い止まらんかったよ！」

「バカにも程があるわよあれは。先生に丸見えだったじゃない」
「ズズー・・・」
昼休みになったら、俺たちは生徒会室に籠もり昼食を取っている。絢瀬と希は自分が作った女の子らしい弁当。俺はこのデカイ図体に合った大きめの弁当箱。それと学校の購買でかった紙パックの牛乳。勿論、桜が作ってくれた特製である。桜が『兄さんお腹が空いたらゾンビみたいになるのでお昼の時に一杯食べてください』と心配しているのかそれかこの食いしん坊めと呆れているのか分からない理由をつけていたのを覚えている。けど桜が作ってくれてるお陰で大助かりなんだけどなこっちは。あんな出来すぎた妹がいていいのだろうか。はやく良い彼氏でも見つけて来い桜。あ、でも彼氏できたら悲しくなりそう・・・。
お母さんや親父がいないのに頑張りすぎてるからなあいつ。今度大好物のクレープでも買って帰ってあげよう。
んで、今はその昼飯の時に希と絢瀬に数学の時間の事で笑われている。確かにあれは余所見をしていた俺が悪いんだけどここまで笑われるものだろうか・・・。というか希、お前も俺に手振ってたじゃねえか。同罪だ同罪。
牛乳を飲み干し両手を合わせる。
「ごちそうさまでした。希も俺に手を振ってたのになんで俺だけ怒られるのは理不尽だ」
「編入してきた試験生を見るのは当たりまえでしょ。寧ろ今回みたいな事繰り返してたら教育指導の先生も出てくるわよ」
「あ、それはやだな」
「最悪理事長に報告かもしれへんよ」
「それも絶対嫌だ」
理事長に俺の素行の悪そうな学校生活を見られたりしてみろ。理事長を通して俺のお母さんに知られたら容赦なく捻りミンチにされる。あ、因みに俺のお母さんの５０ｍのタイム６秒らしい。逃げれない。

「因みに柴垣君は前の高校での成績はどうなん？」
「成績？んー、まあ人並みには出来てた」
「最高点数は？」
「歴史での８２点」
「まあまあってところね」
「音ノ木坂生徒会に所属している現生徒会長と現副会長様たちの成績はいかほどで？」
「１年生の時の学年期末テストの結果でいいかしら？」
「おう」
「私は学年１位」
「ウチは学年２位」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」
いまこいつらなんつった？え？１位と２位？しかも学年？クラスじゃなくて？

「すまん。耳が遠くなったみたいだ。もう一度頼む」
「学年１位」
「学年２位」
「ここは地獄か何かか？」
「最低点数は私だと６９点ね」
「ウチは最低点数７５点やね」
「ここだけ希に負けたのよね～」
「最低点数で勝ってもうれしくないもん！」
「あははっ、ごめんごめん怒らないで」
うそだろ俺の目の前に成績優秀者がいるんだが・・・。
「それで柴垣君が取った過去に取った最低点数はなんてんなん？」
「は？」
「あ、それ私も知りたいわ。何点なの？」
「よし、飯も終わったし教室戻るか」

この話はこれで終い。さて教室に戻りますかー！

そんな考えは一瞬にして消えた。

俺の右腕を絢瀬が、俺の左腕を希が掴んだお陰で逃げれない。しかもこの２人力すんごい強い。

「さぁ、白状しなさい」

「逃がさへんよ～」

「・・・・・・・・・・・・・・」

うん。ここは正直に言った方がいいやつだ。

「そんなに聞きたいのか？」

「「うん」」

やれやれ・・・・・。俺の黒歴史の１つが・・・・。

「最低点数は・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・」」

２人がゴクリと生唾を飲み込む。

「１年生の最初のテストで・・・・・・・・・・・・１０点です」

滅茶苦茶笑われた。

＋＋＋

時間は流れて放課後。俺の黒歴史暴露タイムから2人は俺の顔を見るたびにニヤニヤしてくるのを横目で見ながら生徒会室に入った。こいつら本当に・・・マジで笑いすぎだ。今度笑ってみろ・・・梅干とキャラメル食わしてやる。

「ねぇ大和・・・くふっ！」

「おい」

「エリチ笑いすぎやで・・・ぷぷっ！」

「おい！」

「だ、だって・・・くくくっ！」

「ふふっ・・・お、お腹痛い・・・ププッ！」

「・・・・・・・・・・・・」

死刑決定。これ絶対。

・

・

・

「で・・・？どうしたんだよ」

生徒会室で自分の定位置の椅子に座ると、真面目モードに入った絢瀬が話し出した。

「少し先なのだけれど、今度部活動での部活動報告会っものがあるのよ」

「部活動？」

「格部活のいい戦績やいい結果を残してる部活には部費を上げたりできたりするんよ。その報告もかねてね。部費を上げる場合に最後は理事長に話通すけどね」

「へぇ～。気合入れて試合とかに挑んだらいけるじゃないか」

「けど、勿論そう簡単にはいかへんよ？チャンスがあるってだけやからなぁ～」
「そこで私たち生徒会はその部費などの計算を集計したりするのよ。電卓を使った計算だから大変でね」
「難しいんだな」
「そこで今から大和には各部活動に顔を出してもらって、部長の人達に用意してもらってる部費の報告書を回収してもらいたいのよ。私達2人はこれから理事長に報告会の日程を決めに行くから貴方に頼みたいのよ」
「なるほどな。いいぞ」
「ありがとう。けど柴垣君はまだこの学院の教室なんかの場所を把握できてないからそれもついでに覚えるってのも兼ねてね」
「オッケー分かった。報告書を回収したら良いんだな」
「えぇ、よろしく。気をつけてね？」
「迷子にならんようにね？」
「お前らは俺の母ちゃんか」
　席から立ち生徒会室を後にする。

「「いってらっしゃーい」」
「・・・いってきます」

・
・
・

　と、いうことで今は格部活動で貰う報告書を回収しながら学院内を見て回ってる。やっぱり国立の高校だから綺麗だし色々と設備が整ってるな。格教室にはエアコンが配備されてるしトイレなども綺麗。学院の女の子達は綺麗好きが多いのか廊下などもしっかり掃除されている。
　俺なんだかんだ結構凄いところに編入してきたのかもなぁ・・・。

そして大体の報告書は回収した。バスケ部、陸上部、空手部、美術部、吹奏楽部、バレー部、ダンス部、弓道部、茶道部、剣道部。弓道部に顔を出したら海未が矢を放っていた。あの子弓道部だったんだな・・・しかもド素人の俺が見ても分かるくらいに上手い。ことりは帰宅部で穂乃果は剣道部。穂乃果のが1番以外だった。いや元気だから何かのスポーツはしてるとは思ったけどまさか剣道とはな。剣道部に言ってそれを口にしたら竹刀で叩かれそうになった。女の子怖い。

部活動の活動場所に入ると俺の方が背が高いせいでほぼ全員にビビられた。中には涙目の子もいたんだよな。怖がらせるつもりサラサラないんだけど・・・。

「さてと、後は・・・・・・『アイドル研究部』か」

最後にはこの謎の部活。アイドルってあのアイドルだよな？それともあれか？高校生がアイドルでもしてるのかな。所謂スクールアイドルって奴か。

希に貰った学院の見取り図を見ながら部室を探していると、探し初めて10分後に見つけた。階段の近くにある窓にカーテンがされている扉になっている部室。ドアノブの近くには大きく『アイドル研究部』とでかでかと書かれてる。

「これで最後だな」

ドアノブをコンコンッとノックすると、扉の向こうからハリのある声で「どうぞ」と返ってきた。

「失礼します」

と、一言いれドアノブを回して中に入る。

眼の中に入ってきたのは両端に設置されている棚の中に大量に入っているアイドルグッズと大量の壁に貼られているポスター。その中には勿論チラチラとテレビで見た事あるアイドル達もいた。可愛いな。

けど、そこで1つだけ疑問に思った事がある。

どうぞって言ってきた人物が居ない。え？何？お化けかなにかかと考えたがそんなくだらない想像は一瞬で消去。しかも今3時過ぎだし。
部屋の中をキョロキョロしたが誰も居ない。

「ちょっと」
「え？」
「こっちよ」
声が俺の近くから聞こえてきたがけど居ない。

「下よ下!!」
「え？下？」
見下ろすと、綺麗な黒髪をリボンでツインテールに纏めている女の子が立っていた。リボンの色を見ると彼女は2年生かな？
けど・・・こんなに言われないと存在に全然気付けなかった。

「あんたが噂の編入生の男？」
「あー、そう・・・です？」
「なんで疑問なのよ！そしてなんで敬語？同い年でしょうが！」
「あ、いやすいません」
気が強いなこの子・・・。ちっこいのに・・・。俺の身長とかなり差があるぞ。

「えっと、貴方がアイドル研究部の部長ってことでいいのかな？」
「そうよ！私がこの音ノ木坂学院のアイドル研究部部長にして、音ノ木坂のスクールアイドルの『矢澤にこ』よ！」

足を肩幅ほど開いて片手を俺に指差して片手を自分の腰に手を添えて高々と宣言。

矢澤にこ・・・。それが彼女の名前。

そして、身長がすっごいちっこい・・・。

「すっごいちっこい」
「はぁ!?」
「あ、声に出てた!?」

口を手で押さえても手遅れ。矢澤にこの強く握った拳が俺の鳩尾に炸裂した。

「シャー!」
「ほぶぅぁ!?」

初めてこんなに小さな女の子に殴られた・・・。

矢澤にこの大和の第一印象。

『殺すリストの第1位に登録』

アイドル研究部

「・・・で？何か言う事あるわよね？」
「牛乳とかプレゼントしてやろうか？」
「今度は子供を作れない体にしてやるわ・・・」
「すいませんそれは勘弁してください」
　無意識に防御しちまったぜ・・・。どこをとは言わないが・・・。
　この高校生らしからぬ体型の持ち主、矢澤にこ。彼女はこのアイドル研究部の唯一１人の部員で、そしてこの部活の部長を受け持っているらしい。
　けど確か部活を作るには５人はいるんじゃなかったか？
　あとで希に聞いてみるか。
「で？報告書だっけ？」
「ああ。生徒会から言われてるはずだが」
「それなら出来てるわ」
　矢澤からＷｏｒｄで作成されている１枚の報告書を受け取る。
　上から部活名、部員の名前、部費、その他。などと色々と記入がされてある。
「はい。渡したからすぐに出て行って」
「あ、いや・・・少し聞きたい事があるんだが・・・」
「何よ。貴方に話す事なんかないわよ。早く出て行って！」
　グイグイと俺をドアの方まで押す矢澤。まあ元バスケ部で動いてた俺からしたら全然押せてはいないんだが。
「待て待て！ちょっとだけだから！」
「何よ！貴方も私の事笑いに来たの!?私から話を聞いて何かなるの!?」
「ちょ、ちょっと待てよ何言ってるんだお前!?」
　本当に何を言っているのか分からない。笑う!?一体何の事で笑わなければいけないんだ!?

「邪魔だから出て行って!!」

あんな小柄な体からあるとは思えない力で、部室から追い出された。

＋＋＋

「・・・・・・・・という事があった」
「予想はしていなかったわけではないんだけどね」
「やっぱりにこっちと一悶着あってんね」
「お前ら分かってたのか」
「私達に罪はないわ」
「右に同じく」
「同罪だこの野郎」

先刻での出来事を話すとまあこの2人は思ったとおりだって顔しやがった。多分あれだ。俺に行かせたのは4割仕事優先で3割は学校の各教室の場所を覚えさせるためで、残りの3割は何かが起こるかもって感じの予想をしていたに違いない。悪気が無かったのかはあえて聞かない。

「しかもその表情だと色々と理由があるのを知ってるみたいだな」
「そうやね。まず順を追って説明するわ」

椅子に座って2人と向き合う。

「まず、彼女は2年生の矢澤にこ。私達とは別のクラスで、大切な友達なの」
「今は数人いたアイドル研究部の部長をやってるんよ」
「だから報告書にあいつの名前しか書いてなかったんだな。部活を作るには最低5人は必要らしいからな」
「殆どの部員は辞めちゃったんよ。それと、彼女もウチの記憶喪失を

知ってる一人でもある」
「なら、記憶を失う前の希のことも？」
「勿論」
「なるほど」
「柴垣君とは初対面だからキツく当たったんや思うけど本当は凄く良い子なんよ。優しくて強くて、人を裏切れない心の持ち主」
「裏切れない・・・ねえ」
　人を裏切った人間はクズも同然だ。あらゆる関係を断ち切る行為でもあるからな。

「じゃあ次の質問だ。矢澤のあの態度はなんだ？笑いに来たとか言ってたが・・・」
「それはね、まずこれを見てもらいたいの」
　絢瀬から一枚のプリントを差し出された。
「これは？」
「アイドル研究部、いや、正確にはにこっちの戦績・・・かな？」
「戦績？」
「読んだら分かるよ」
　と言われて上から読んでみる。
　何なに？個人演技順位第５位。アマチュアアイドルグランプリ第３位。アイドルミュージック第２位。ダンス演技第２位などなど・・・。ん？
「見た感じにはかなり良い戦績だと思うが・・・？」
「じゃあ、柴垣君がとてつもなく不良な男やったとして、色々と人や行動をバカにする人って設定やったら、この戦績を見てなんて言う？」
「そりゃー、人を馬鹿にする奴が言う事なんていったらアイドルなんてくだらないって・・・・・・あ」
「理解した？」
「にこっちが笑いに来たんでしょって言ってた理由が」

　どんな学校でも、とあるなにかしらの行動を取ったら、褒める奴も

いれば、それを貶したり馬鹿にしたりする奴も出てくる。どの時代になっても一緒だ。相手が1人、今回は矢澤が1人だ。1人相手ならと考えてあいつを馬鹿にする奴が居たってことか。恐らくアイドルがどうとか、スクールアイドルって何?とか、自分たちが正当であると思い込んで、矢澤のやっている事を不当化している。

やったことが無い奴がやったことがある奴を馬鹿にするのは筋が通って無さ過ぎる。

それが凄く腹が立つ。

そいつがやってきた努力を踏みにじる事をするのは人間としてやっちゃいけない事だ。

「スクールアイドルって簡単に言うと学生がしてるアマチュアアイドルの事だよな?」

「えぇ。今、スクールアイドルをしてる学校は少なくないわ。ブームってやつね」

「にこっちはさ、本物のアイドルになるんが夢なんよ」

「アイドル・・か」

「あのキラキラとしたステージで輝いてみたい。あの世界に私も行ってみたいって言ってたわ」

「だからスクールアイドルになってんね」

「いい夢じゃないか」

「恐らくにこっちを馬鹿にしてきたのはプロなんかなれる訳無いって言ったのかもしれへんな」

夢は叶うときもあるが叶わない事もある。努力は実らないときもある。だが実らないとも限らない。

その『何か』になるのは一握りの人だけだと呟く人もいるだろう。無駄な努力だと嘲笑う人もいるだろう。

けど、諦めたらそこで終わりだ。

夢があるからこそ頑張れる。夢があるからこそやり遂げる事がで

きる。
夢には無限の可能性が秘められているのかもしれない。夢は言わば線路のようなものだ。その線路の先には終点が存在する。才能やセンスを持ち合わせていても到達は出来るかは分からない。
可能性を信じれば、おのずと道は拓くのではないだろうか。
夢にたどり着く者はその小さな可能性を信じるものではないだろうか。

「すまん。ちょっと席を外す」
「柴垣君、どちらまで？」

希がニヤニヤしながら尋ねてくる。

「ちょっと小さなアイドルさんの所まで」

＋＋＋

再びアイドル研究部の部室前に足を運んだ。先ほどのように追い

返されないかと額にほんのりと汗を浮ばせている。
軽く深呼吸をして扉を二回ノックする。
すると扉の向こうから聞くからに不機嫌な声で「どうぞ」と帰ってくる。つい先ほどの事だから機嫌が悪いのは当たり前か・・・。
扉を開いて中にはいると矢澤はパソコンに向かってキーボードを叩いていた。
画面を見るからに動画サイトにコメントを入力しているようだ。
「・・・ねえ。なんでまたあんたがここにいるのよ」
「ちょっと言いたい事があってな」
「何よ。改めて馬鹿にしに来たの？それとも笑いにきたのかしら？」
凄い俺を睨んでくる。敵意丸出し。
俺は軽く息を吐いて、小さく折り曲げていた、さっき貰ったプリントをポケットから飛び出した。

「凄いじゃねえか」
「・・・え？」

俺の言葉を聞いた瞬間、矢澤の目が点になっていた。

「テレビでよくみるアイドルって数人か大人数って感じだけど、たった一人でここまでするって中々出来ない事だと思うぞ」
「な、なによ！いきなり褒めてきてもお世辞にしか聞こえないわよ！」
「どう受け取るかは好きにしてくれ。けど俺は2人にこれを見せてもらった時は度肝を抜かれた。凄えよこれは。俺じゃあ到底出来ない」
「いきなり気持ち悪いわね・・・。褒めたって何も出ないわよ」
「出なくていいわ。人って人前で踊ったりとか歌ったりとか恥ずかしくてそうそうできないと思う。羞恥心が強い奴は特にな」
「そ、そりゃそうよ。私は本当のアイドルを目指してるんだから」
やっぱりそうだ。彼女の想いはかなり強いものだ。長年夢を追いかけてきた者がもつ眼をしている。

「馬鹿に・・・されたんだってな？」
「っ・・・」
「その気持ち痛いほど分かる。自分の自信を踏みにじられたと同等だからな」
「・・・・・・」
　暗い顔をして俯いてしまった。今のは禁句だったのか・・・。
「あー・・・まあそんなに気を落とすなよ。初めて会った俺が言うのも筋違いかもしれないが、俺からしたらお前が馬鹿にされるような事をしていないのに馬鹿にされるのが許せなくてな。ちょっとでしゃばっちまった事言って悪かった」
「いいわよ・・・別に・・・」

「俺の偏見かもしれないけど、アイドルの仕事ってさ、ライブやコンサートに出たりして演技をしたり歌を歌うのが仕事かもしれないが、俺は少し違うかなって思う。『アイドルって、人を笑顔にするのが仕事』なんじゃないのかな」
「!!」
　ガバっと矢澤が顔を上げて俺を凝視してくる。
「ライブでアイドルが歌っていたり踊っていたりするところを見てるとファンの皆凄い楽しくなって笑顔になるだろ？握手会やサイン会も然り。アイドルがする事って色々と『笑顔』って単語に結びついている。笑顔はストレスの軽減や健康の促進にも効果を出したりして

る。その他色々と凄い事してるんだよな。アイドルの歌って聞いている人を元気付けたり悲しい気持ちになってる人間の励ましになったりもする」
ネットで良く見る。『〇〇さんの歌を聴いてると凄い元気になる！』とか見た事がある。アイドルの他に声優さんや声優アーティストさんとか。あの人たちって素晴らしい力を持ってるってよく思うな。声や言葉の及ぼす効果は絶大だ。一種の薬かもしれない。落ち込んだり気分が萎えていたりしている時にアイドル、声優、女優の歌や声を聞くと凄く力になったりすると良く聞く。
声は人の心にとてつもなく影響力がある。良くも悪くも、心に届く。
所謂『言霊』だな。

この部類の人達がしているのは笑顔の他に一種の人助けをしているような気がする。

「それになりたいと思ってるお前は立派だと思うよ」
「・・・・・・っ」

矢澤はさっきとは違い、ちょっとソワソワとしながらあちらこちらをチラチラしてる。
少しの間だけ待ってると口を開いた。

「私、小さな頃からアイドルのテレビなんかをよく見てたのよ」
「おう」
「テレビに映る人たちってキラキラ輝いててかっこよく見えてた・・・。私もあんな人たちみたいにステージにたってあの世界に飛び込みたいと思っていたわ」

野球選手になりたい、サッカー選手になりたいと思う人間は少なくないと一緒で矢澤の心境はそれと変わらないものだ。この人になって見たいと思ったのがキッカケかもな。
「高校に入る前にテレビであるアイドルさんが言ってたのよ。『私は私を見てくれている人達を笑顔にしてあげたいです！それが私に出来る唯一のお仕事ですから！私の歌や行動で皆さんに元気をあげたい！』て言ってたのよ。それが凄く心に響いて・・・私もそんな人間になりたいと感じてアイドルを目指したのよ。人を笑顔に出来る素晴らしい仕事に就くのが私の今の目標なのよ」
「そうか」
「けど・・・高校でアイドル研究部を立ち上げて集まってくれた他の子たちと一緒にアイドルを目指そうと団結したのに・・・みんなは私には付いていけない。アイドルなんてなれないんだって言って辞めて部活から去っていった。そこは別に無茶苦茶傷ついたわけでもないのよ・・・けど」
「けど？」

「それからよ。私を馬鹿にしてくる連中が増えたのが。多分2年生か3年生のどちらかね。今ってこの学校の生徒数が減少してるでしょ？なんとかして生徒を増やそうとほかの部活もがんばってるわ。けど、アイドル研究部はどう？私一人の戦跡じゃなにもならない。アイドル研究部なんかいらない。部費がもったいない。くだらない。なんの役に立つの。そんなことする時間があるならもっと別のことに時間を費やしたら？ってありとあらゆる罵詈雑言を並べられた」
「・・・・・・」
「私は・・・・・・それが凄く悔しかった・・・」
「・・・そうだったのか」
「だから・・・私がこの音ノ木坂のスクールアイドルになってそれを証明する。私のやってきた事は無駄じゃなかったってことを・・・私も・・・プロのアイドルのように・・・人を寄せ付け・・・人を笑顔

にできるんだって。誰かの役に立つ事ができるんだって、証明してやりたいのよ」

矢澤の拳が強く握られていた。それは悔しいさからでたのか、はたまた信念が形となってでているのか。

どうだろうと結論は変わらない。矢澤の信念や本物だ。想いの強さは誰にも負けない・・。それが彼女の強さだと思う。

「・・・初めて会った男に私は何をマジになってんだか」
「失礼だなオイ」
「貴方の言葉で火が付いちゃったのよ。アイドル魂が」
「・・・・・・へえ」
「顔からして腹立つわね。スパナかレンチかトンカチのどれがいいかしら?」
「どれも鈍器には変わらないじゃねえか。俺が記憶喪失になるわ」
「全ては貴方が悪い」
「摂理を超越してんじゃねえよ」

はあと軽く溜息をつきアイドル研究部の扉を開く。

「じゃ、言いたかったのはこれだけだ。邪魔したな」
「ふんっ・・・。せいぜい私のアイドル活動を応援しときなさい」
「はいはい」

「お前は何も間違った事はしてねえぞ。じゃあな、音ノ木坂のスクールアイドル」

・・・

1人になったアイドル研究部は静かだった。あの男が来て火がついちゃったからか、その反動で椅子にドカリと座り込んだ。

「なんなのよ・・・あいつは」

アイドルの動画を見ながら呟く。いきなり現れて・・・アイドルのいろはも分かっていないのに力説しちゃって・・・。

『凄いじゃねえか』

『俺じゃ到底出来ない』

あいつの放った言葉が未だに心に残っていた。初めてかもしれない。絵里や希からは応援の言葉は聞いたが、初対面であそこまで言われた事は一切無かった。理解できない。他人がなぜそこまで私に声を掛けてきたのか。

けど・・・あいつの言葉が凄く嬉しかった。

『アイドルって、人を笑顔にするのが仕事なんじゃないのかな』

あいつは・・・分かってくれているんだ。アイドルの仕事を・・・アイドルの凄さを。

「間違った事はしてない・・・か」

心が温かくなった。嬉しかった。自分を認めてくれている人が現れたことが・・・。

「柴垣・・・大和・・・ねえ」

その言葉は静かな部室に消えていった。

努力

「・・・と言うわけで部費での部活動報告会の日程はこの日に決定でいいかしら？」

　あの矢澤にことの一件があり、数日が経った。各部活からの部費報告書も回収できたので後はこれからの各部活に譲渡する部費の計算と理事長への報告くらいだ。

　まあそこらへんは絢瀬がするんだろうけど。

「ええんちゃう？部活の部長さんらもその日程に合わせるだろうだろうし」

「またその事についても書類作らないといけないしな」

「ついでに大和の生徒会に入ったっていう報告もできるしね」

「あー、俺まだ正式に入ったって全生徒に言われてないしな」

「強くて力持ち。掃除雑用なんでもござれ！柴垣大和を貸し出しますよ！って張り紙だしたら売れるかも！」

「生徒会も活動費を稼がんとやな！」

「お前らは？」

「「しないよ？」」

「俺に渡すバイト代勿論だすよな？」

「「ボランティアで～す!!」」

「本ッ当に良い性格してるなお前ら」

「そんなに褒めてもなんもでえへんよ～」

「褒めてねえよ」

　確かに力はあると思うし重いものは良く持つがそれなりのものは貰うぞ。働くものには報酬を。社会の基本だ。ブラック企業嫌い。ホワイト企業大好き。

「そういえば部費の計算てどうするんだ？」

「それは学校の経理部の人と一緒にする感じなんよ」

「この学校にあったんだ経理部・・・」

「国立やしね」
「それなりの入学費や授業料だし」
「中には奨学金を借りてる生徒も多いよ」
「２人は？」
「私は借りてないわ」
「ウチも」
「なるほど」
「柴垣君は？」
「俺は特例らしいから授業料の半分は免除だって」
「まあ試験生やしな」

確かこういう計算って簿記とかの資格がいるとか無いとか。まあそこは詳しくないんだけど。

「じゃあ今から書類を作って部活に配りましょう」
「配るなら俺がするぞ。まだ学校内を完全に覚えきれてないし」
「ウチも一緒に行くで」
「了解。じゃあ私は書類を作った後、部活の顧問の先生と理事長に会議の日程を伝えてくるわ」

さて、お仕事お仕事。

＋＋＋

「はい。これ今回の会議の日程や概要についての書類です」
「ありがとうございます」
陸上部、空手部、美術部、吹奏楽部、弓道部、茶道部。と一通り書

類を渡していき最後にバスケ部、バレー部、ダンス部、アイドル研究部となった。
今はバスケ部にいるんだが、少しおかしい雰囲気・・・いや、完全におかしい感じだった。
俺が今書類を渡したのはこのバスケ部の2年生。本当ならいるはずの部長が居ない。部員の女の子に聞けば用事がどうとか。
更に言えば昨日今日始まった話ではなかったとのことだ。顧問の先生も承諾しており、特に部員の全員からしたらおかしくない話となっている。

少しおかしいな・・・。

「はーい。みんなちゃんと練習してる～？」

そんな時に、部費の書類を受け取りに来た時に出会ったバスケ部の部長が練習着を着て体育館に入ってきた。しかも、かなりの遅い時間に。
今は午後の5時半。音ノ木坂の部活の練習最終時間は6時10分。今更来ても遅すぎる。
「あ、生徒会さん。こんちわ～」
「どうも」
「お疲れ様です部長さん。今日はどないして練習に遅れたんですか？」
「何？別に用事よ用事。先生にも伝えてるからいいでしょ？」
「まぁ・・・確かに」
「・・・・・・じゃ、みんな練習再開するよ～」

『はーい』

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・柴垣君？」
「なあ希。あの部長はずっとあんな感じだったりするか？」
「え？んーウチはそんなに他の部活に顔を出したりしないからわからんけど、噂では柴垣君が音ノ木坂に入る２週間前からあんなんやったって聞くよ」
「・・・・・・サボりとか？」
「それは考えられへんかな。まあまあな戦績は残してるし」
「ほぉ・・・」

少しの疑問を抱きながら体育館を後にしようとしたとき。

「はぁっ・・・はぁっ・・・」

体育館に向かって急いで走ってきているバスケ部の練習着を来ている女の子が走ってきた。
体育館のドアを開け『遅れてすいません！』と謝罪の言葉を口にする。

「ちょっとあんた！遅れすぎよ！」
「す、すいません・・・。ちょっと用事がありまして・・・」
「ったく、だらしないわね」
「・・・・・・」
部長の３年生がそれをしかると回りはクスクスと笑い出す。
見ていて惨めだ。

その一部始終を見て。

「希」

「ん？」

「あの遅れてきた子は？」

「えっと、確か1年生の子で、名門の中学校バスケ部出身の子やったけな。ポジションはＳＦ。シュートのホームが綺麗って聞くよ」

「・・・・・・・・・・」

「どうしたん柴垣君。さっきから」

「いや・・・」

「・・・・・・・・・・ちょっとな」

黒いモヤモヤとした感情が心の中で蠢いている。

これは所謂・・・・・『不信感』というやつかもしれない。

「希。あの子の名前調べてくれ」

「え？どうして？」

「ちょっとしたお話だ」

・・・

時刻は6時15分。バスケ部での疑心暗鬼を胸に抱えたまま俺は希と一緒に生徒会室に一度戻る。残りの2つの部活には明日書類を提出する。

今俺がやるべき事はこの心のモヤモヤを晴らす事だ。

「ねえ大和。どうしてバスケ部のその女の子を生徒会に呼び出したの？」

「これ別の見方したら少し危ないで」

「大丈夫。そのためのお前らだ」

「え？」

「証人ってこと？」

「正解」

「どういうこと？」と絢瀬は聞きたそうな顔をしてきたが今だけそれをスルーする。

少し時間が立ったとき、生徒会室の扉がゆっくりと開いた。

「あの・・・呼ばれてきたんですけど・・・」

「あぁ。悪いけどそこの席に座ってくれるかな？」

呼び出された女の子は差された椅子に腰を下ろした。

「いきなり呼んで申し訳ない。俺は今期に編入した柴垣大和だ」

「生徒会長の絢瀬絵里です」

「副会長の東條希や。よろしゅうな」

「あ、1年生の二階堂真里です！」

「どうも二階堂さん。単刀直入に聞きますがよろしいでしょうか？」
「は・・・はい」

少しオドオドした二階堂さんを見ながら1つ疑問を投げかけた。

「アレは一体どうしたんですか？」
「っ!?」
（（え？））
俺の一言で二階堂さんはビクッと体を跳ねらせ、絢瀬と希はなにを言っているんだと顔を見て分かるほどの疑問の目を俺に向ける。今の2人の頭の中には『？』の文字がういているはずだ。俺は二階堂さんにに見えないように2人に手で『静かに』と伝える。
さすがに肝が据わっているのか2人とも黙る。

「えっと・・・あの・・・」
「流石にあれを見て黙ってる事はできないので、聞かせてもらいました」
「どう・・・・・・してそれを・・・？」
「たまたまですよ。たまたま」
「・・・・・・・・・」
二階堂さんは俯いて暗い顔を。絢瀬と希は『???』と疑問符を浮かべる。

「自分たちは生徒会です。生徒を助けるのが我々の仕事なんです。お願いです。喋っていただけますか？」
普段の俺が喋らない口調で二階堂さんの緊張をなんとかほぐそうとする。
それを聞いて二階堂さんは肩で大きくしていた呼吸を、ゆっくりと

深呼吸をして自分を落ち着かせていた。

「・・・・・・っ」

「「!?」」

瞬間、二階堂さんがポロポロと涙を流し始めた。

これには流石の俺も驚いた。

「よ・・・よかったぁ・・・。やっと、誰かにっ・・・話す事ができてぇ・・・」

「だ、大丈夫二階堂さん？」

「これで涙拭き？」

「はっ・・・はい」

２人が二階堂さんのフォローに入る。だが、その目は俺を向いていた。

目線での会話。

『大和？』

『柴垣君？』

『はい』

『何女の子泣かしてるの？』

『男とどうしてどうなんかな？』

『待ってください。ちゃんとした理由なんです』

『問答無用』

『今すぐ最寄駅地下で売ってるカステラ買ってき』

『大至急』

『え、あ・・・その・・・』

『『ダッシュ』』

『おっす』

二階堂さんを泣き止ませる間に、俺は財布を持って大至急、これまでに無い速度で駅に向かって走った。

女性の無言の圧力って怖いな。

・　・　・

「ごめんなさい・・・お騒がせしまして・・・」
「いいのよ。この『馬鹿』のせいだから」
「そうやで。この『阿呆』のせいやから」
「はぁーっ!はぁーっ!ぜーっ!ぜーっ!」
多分今までにない新記録を出した気がする。後、心に刻みつけよう。
【女性を怒らせるな】
あ、カステラは【3人】が美味しく責任を持って頂かれました。
おれ?食えると思うか?

「じゃあ、聞かせてくれるかしら?」
「何があったん?」
「はい・・・・」
2人とも意図を読んだのか二階堂さんに俺と同等の質問を出す。

「皆さんが良く知ってる言葉です・・・・・所謂、喝上げってやつです」

・　・　・

人間は自分より優れた人間が居ると、尊敬の念を抱いたり、憧れの念を抱く者もいるだろう。それとは逆に恨みを持つ者も現れる。自分のプライドが高ければ高いほど然り。そいつらの考える事なんか手に取るように分かる。嫌がらせ、いじめ、喝上げ、暴力、出せばキリがない。

しかもそれは数を増やしての攻撃だ。数の暴力というものである。

至って醜い行為だ。それをするということは自分たちがそれをするほど性根の腐った人間だと肯定しているのと大差がない。器が小さいやクズだのと言葉が山ほど出てくる。

この彼女もその犠牲者の1人だろう。彼女は名門中学校の出身のバスケッ子だ。多分実力的には現音ノ木坂バスケ部で1番上手いのは彼女だ。それを喜ぶものは数人。1年生の癖に生意気だと罵る者数多。

バスケ部の部長はその1人で彼女から喝上げしている張本人だ。

見た目から真面目オーラを出している彼女が部活に遅れるなんて持っての他だ。しかも1年生の身として学年のなにかしらの用事で遅れたりなどの可能性は低い。

彼女が話してくれたのは俺の予想を的中していたことだ。部長に馬鹿にされ、気の弱いところにつけこまれ肉体的暴力と精神的暴力の2つを浴びせられ、自分はお金を渡すしか助かる手段がなかったといった処だ。

始まったのは2週間前から。希が言っていた噂されてると言っていた話と一致する。

くだらない手を使いやがる。

「よく、今まで耐えてたわね」

話終わった時に絢瀬が二階堂さんに慰めの言葉を送る。その言葉に秘められた安堵感からかまた涙をポロポロと涙を流す。

「誰にも・・・頼れる人がいなくて・・・ぐすっ・・・」
「頑張ったな。偉いで」
希が正面から抱きしめる。背中を摩ってやり頭を優しく撫でる。それにつられて耐えていた感情が激流のようにあふれ出し、今まで防いでいた砦が崩壊した。希の胸に顔を押し当てて声を上げて泣き出す。希の胸で防ぎきれなかった涙は膝へと落ちる。
俺はそれを見ながら今まで幾度と無く考えた疑問を反芻する。

なぜ努力しているものがここまでされなきゃいけないんだ。やっている奴らはそいつらを越える努力をしたのか。体になにかしらの重しとなるモノがあるなら話は別だ。だがバスケ部の部長を見た感じだとそんな要素は一切無い。自分より強いものがいるのが気に食わない。ならそれを超える努力をしてから物申せと俺がいってやりたい。

『何もしてない奴が頑張ってきた奴に文句を言うのは筋違いだ』

どうにか助けてやりたい。

こう思うのはおかしいことなのだろうか？

＋＋＋

少し時間が経ち、二階堂さんはこれ以上生徒会にいる必要はないと絵里が考え、今は家に返した。
また3人になった生徒会室で希が俺に問い掛ける。

「ねえ柴垣君。なんで彼女が喝上げされてるってわかったん？そんなとこウチら見てないで？」
「私もそれは思ったわ」
「あー、あれ？ブラフだよ」
「「ブラフ？」」
「簡単に言うとはったりってやつだ。あの数秒で色々とおかしいと思ったんでな」
「よくあれだけの要素でわかってんね」
「まあな」
俺にこれだけの観察眼が無いとなにも出来なかっただろうがな。

「俺から聞きたいが」
「ん？」
「どうしたの？」
「２人はあの話を聞いてどう思った？」
俺の言葉に２人とも顔を歪ませる。あの話を聞いて２人はどんな感情を抱いたのか。

「ウチは・・・」

「ウチは、助けてあげたいかな。ウチらに話してくれたけど彼女への仕打ちは止まるわけじゃない。柴垣君が言ったとおりウチらは生徒会。生徒の味方。今まで頑張ってきた子があんな目にあうのは間違ってると思う」
「希・・・」
「そうか」
希も俺と一緒の答えだった。一言一句は違えど想いは一緒だ。
「絢瀬は？」
「私も似た感じよ。私も似たような事でいじめられた事があったか

ら。気持ちが凄く分かる。確かにその人達の努力は実らなかったかも知れないけど、それでよしやってしまおうと思うのはおかしいわ」
「エリチ・・・」
「・・・・・・答えは決まったな・・・」

3人の意思が一致した時だった。

～♪～♪

「ん？」
「あ、始まったね」
「え？何が？」
窓の外、屋上から曲が聞こえてくる。しかもアイドルの曲だ。

「行ってみたら分かるよ」
「行きましょう」
絢瀬と希に連れられて俺は生徒会室を後にした。

＋＋＋

「なんなんだよ。何かあるのか？」
「いいからこっち来て」
「大きな声だしたらあかんよ」
「・・・？」
屋上に続く階段を上がり、扉を少し開ける。傍から隙間を見たら希、絢瀬、俺という感じに上から並んで見える。まるでトーテムポールだ。

扉の隙間を覗くと。

「1っ!2っ!3っ!4っ!5っ!6っ!7っ!8っ!」

動きやすい服装に身を包み音楽にあわせてダンスを踊っている矢澤にこの姿があった。

まだ4月といえど少し肌寒い時期。なのにも関わらず半そでで練習しているその姿は上を目指す挑戦者の姿。何回も反復練習をしているのかその顔には大量な汗水を垂らしている。

「あ・・・・・・・・・・」

そうだよ。こうやって影で努力している奴ほど凄いんだ。どれだけ回りから認められなくても納得がいくまでやりこんで行く。何事も一緒だ。失敗しないために成功させるためにやるんだ。失敗する事は悪い事じゃない。そこから立ち上がる事ができないのがかっこ悪いのだ。

それなのに回りはそれを分かっていない。『こんな事続けても出来るわけが無い』や『こんな恥ずかしい事できない』と言っている奴ほど恥ずかしいんだ。それを全くともって理解していない。

結論、いやがらせをするって事しか手段を選べない。

矢澤だってここまでやっているんだ。誰にも認められることなく、ただ自分の夢に向かって突っ走る。これをカッコイイと言わずなんと言う。

「あいつは強い人間だ」

「知ってるわよ」
「ウチも」
「それなのに矢澤や二階堂さんのような頑張ってきた人間が批判されなきゃいけないんだ」
「人は自分より優れた人間が生まれて欲しくないって思ってるのかもな」
「それは傲慢ってものよ。誰も最初から出来ちゃいない。それが出来る事をする人が優れた人間なのよ」
「けど人間ってのは自分勝手だ」
「自分が良いと思っていた事を達成すればそれで終わり。回りの事は考えない人もおる」
「自分がよければそれでいいと思っている」
「バスケ部の部長もそのうちの1人だ。二階堂さんの今までの苦労をしらないからそんな事ができる」
「嫉妬も含まれてるのかもな」
「タチの悪い嫉妬よ」
「悪意が丸出しだ」

偽善者ぶっていると言われるかもしれない。けど俺はこれが気に喰わない。

『ここまでする奴がなぜ認められないんだ』

「絢瀬、希」
「ん？」
「どうしたん？」
「俺はこうやって頑張っている奴を助けてやりたい」
「そうね」
「やね」

「俺が何を考えてるか分かるか？」
「大体予想はつくわね」
「同じく」
「手伝ってくれるか？」
「乗りかかった船よ」
「手伝うで」
「あの1年生の3人にも手伝ってもらいたいって思ってるんだが、ダメかな？」
「穂乃果達なら分かってくれるわ。けど、私の幼馴染でもあるの。出来る限り無理な事はしてあげないで」
「喧嘩沙汰にならんようにしーよ？」
「生徒会長がこんなのでいいのかしら？」
「許容範囲内だろ。生徒を救ってるんだから」
「面子ってものあるんだけどね・・・」
「ふふっ。エリチのイメージ少しだけ崩れるかもね」
「全責任は俺が持つ。どんな事でもかかってこいだ」
「威勢はいいけど凄くダサい」
「御人好し通り越して大馬鹿や」
「やかましいぞ」
　矢澤の頑張っている姿を目に納め、扉を静かに閉める。

「で？いつはじめるの？」
「明日だ。手段は追々説明する」
「期限は？」
「できるなら会議の2日前にだ。時間が少し無いがな」
「あの3人にも説明せな」
「それは今だ」
　ポケットから出したスマホの画面をスライドさせる。

「悪いな。俺の我侭に付き合ってもらって」
「ウチの今の記憶には無いけど柴垣君とは結構な付き合いらしいから

ね。ウチらは友達やから手伝うよ」
「ここで私は出来るぞって処を証明してやるわ」
「出た自称賢い可愛いエリーチカ」
「本領発揮の時やね」
「自称じゃないわよ！」

スマホの画面をスライドさせ電話を掛ける。

『もしもし？大和先輩？』
「ようことり。今大丈夫か？」
『はい。大丈夫ですよ？』
「近くに穂乃果と海未はいるか？」
『２人は今部活で席を外してるんで今日は私は先に家に帰ったところです』
「そっか。ちょっと話があるんだがいいか？」
『お話し・・・ですか？』
【お】つけるの可愛いなおい。

希と絢瀬に目を向けると同時に頷いてくれた。

「君たち3人に・・・・・・頼みがある」

＋＋＋

「あの3人なにしてるのかしら？」

覗き見している事は完全にばれていました。

会議

「それでは時間になりましたので部活動報告会を始めます。よろしくお願いします」

『お願いしまーす』

絢瀬の言葉が響く。

音ノ木坂学院に集合した各部活の部長、ならびに我ら生徒会。事前に色々と準備を施してついに始まった会議でもある。長机には各々の部長らが腰を下ろしており、その中には矢澤の姿もある。

「初めに軽く自己紹介させていただきます。今年の４月に編入して参りました、男子試験生の柴垣大和です。生徒会では書記を担当しております。２年生の身でまだ力不足でありますが、音ノ木坂の為に頑張りたいと思っておりますのでよろしくお願いします」

前々から言おう言おうと思っていた俺の自己紹介も終わり、本題に入った。

「では、ウチの方から今月までの各部活の戦績報告の書類をお渡しします」

Ｗｏｒｄで作成した部活の戦績報告。中には大会での優勝記録や作品の優秀賞受賞などと言ったあらゆる成績が纏められてある。

俺や絵里の手にそれを渡され軽く目を通しながら横目で部長達を眺める。中には真剣に目を通す人もいるが、どうでもいいと思い目を通さず机に書類を置く部長もいる。

そして最後に言うと、眺めた後に顔つきを変える部長もいた。

（バスケ部にダンス部。・・・・・・やっぱりな）

さて、やりましょうかね。『戦い』を。

「大体情報は集まったな。君たち3人、特にことりには助けられた」
「いえいえ。少し楽しかったと思ったんで大丈夫ですよ」
「全く、ことりを危ない目に遭わせて・・・」
「色々と俺の都合で迷惑をかけたな。それなりの報酬はあるから多めに見てくれ」
「けど、次からこういう事は早めに連絡を下さい大和先輩。いきなりで私達も話に追いついてなかったのですから」
「悪かったな海未。俺達もこの案が出たのはつい先日なんだ。時間は有限と言うからな」
「それで大和先輩！私への報酬のアレは！」
「服の材料だろ？注文済みだ」
「やった！これで海未ちゃんや穂乃果ちゃんに可愛い服を一杯作れる！」
「き、着ませんからね！」
「着せます！絶対に！」
「認められません！」
　少し外が暗くなった時間の時に俺とことりと海未は生徒会室にいる。この3人組なら穂乃果が本当ならいるはずなんだが、実家の和菓子屋の手伝いで今日は早めの帰宅。絢瀬と希は矢澤と帰宅した。

　今回色々と動いてもらったこの3人にはそれなりの報酬を与えた。穂乃果には質のいいタオル一式。海未には弓道で使う弓の消耗品。ことりには自作している服の材料少々。1万以内で収まったから良しとしよう。桜にまら説教されそうだがな・・・。
「でも以外だ」
「なぜですか？」

「君たち3人が俺の提案に乗る事にだ。普通ならこんな事、特に海未なら反対だと思ってたんだがな」
「それは流石に最初は反対でした。けど、貴方や希先輩、なにより・・・幼馴染の絵里の3人に頭を下げられたら断ろうにも断れません」
「穂乃果ちゃんは乗り気でしたからね。なんだかスパイっぽくて楽しそう！ってはしゃいでましたから」
「穂乃果は少々バカですからね」
「少々なのだろうか・・・」
「言い方を変えたらストーカーだけどね」
「上手く事が進んだからよかったものの、面倒な事になったら全部水の泡だったからな」
「やれやれって処です。大和先輩には今度温泉に連れて行ってもらわないとですね」
「ゆっくり浸かりたいね～」
「お・・・俺の全財産で・・・」
「冗談です」
　茶番を繰り返していると、ことりと海未が真面目な顔で尋ねてきた。

「でも、大和先輩。もしこれが上手く進んだら大和先輩の評判や悪くなりますよ」
「貴方は一応試験生なのですから、素行は悪くないようにしないと」
　正論だな。これが上手くすすめば俺に期待を寄せている先生たちからの株はダダ下がり確実。良くて褒められる。悪くて俺は学校からの嫌われ者。比で言うと3：7。
　使った手も手だからな。悪者になる確率の方が圧倒的に高い。

「俺が嫌われるだけで済めば充分だ。そもそも高校生活を過ごしていたらこんな事あるとは思っていたからな」
「そうだとしても、なんで大和先輩は他人同然の人にここまでするんですか？御人好しも良いところですよ」

「それは私も同感です。向こうにはメリットはありますが、貴方にはデメリットしかありません。自分で自分の首を絞めているようなものです」
「まあそうだな」
「そうだなって・・・それでいいんですか!?」
「良いからしてるんだ。もう辞めたって言うのは手遅れだ」
「ですが・・・」
心配そうに俺をみる2人の少女の頭を優しく撫でる。

ただただ気に喰わない。自分の近くでこんな醜い事が起こっている事が。見たくない。こんな醜い事で人が耐えている姿を見るのが。もう見たくない。泣きそうになっている奴をみるのは・・・。

こんなくだらない事を見ると腹が立つ。

「人を馬鹿にしてきた奴らには痛い目にあわせてやる」

・
・　・

「以上が各部活の戦績報告です」
「ねえ生徒会長さん～。そういう面倒なのいいから早く終わらない？ウチの部活もう少しで練習試合あるから練習しなくちゃだから～」
「そうですよ。私達もダンスの練習があるんですから」
「これは音ノ木坂の規則ですので、ご了承ください」
「めんどくさいわね～」
確かにめんどくさくはなるがそこは口に出しちゃだめだろ・・・。

「続きまして、部費の値が大方決まりましたのでそちらの書類をお渡しします」

（来たな・・・・・・）

希が部活毎に分けられた書類を配る。

ここが今回の戦いの重要ポイント。ここで餌に引っかかればそれでこっちに軍配が上がる。

希もこっちをチラッと見て頷いてくる。後はよろしくの合図だろう。

「一部分を覗いて昨年とは値はそこまで変更がありませんのでよろしくお願いします」

この部費の計算は学校の経理課の人達と一緒にしたから心配はなし。俺たちがこれから行う事も理事長には話してる。あの人は良い人だ。『貴方に任せるわ』って全部俺に預けてくれたからな。俺のクラスの担任にも話は勿論通してる。山田先生は生徒指導の先生でもあったからちょっと納得させるのは難しかったけどな。『お前は御人好しじゃなくて大馬鹿野郎だな』って言われた。・・・・・・・・・ごもっともです。

静かになった会議室に納得がいきませんと声が上がった。

「ねえ！なんで私達バスケ部の部費がそこまで上がってないの!?大会でもそれなりの戦績は出してるんだけど!?」

バスケ部の部長が不満の声を上げる。

「これは理事長も承諾していますので私達にはどうにもできません」

「なら生徒会から話を通してよ！こんなの納得がいかないわ！」

「納得してもらうしかありません。部費の計算は学校の経理課の職員さんに任せておりますので」

「部活で学校に貢献しているのにこれはおかしいわよ！」
「他の部活も昨年とそこまで差はありませんが・・・？」
「それはそこまで頑張ってないってだけでしょ!?バスケ部の戦績見たでしょ！関東大会でベスト８には入ってるのにこれが普通ですって言われても納得いくわけないでしょ!?」
（あーあ、言っちゃいけない事言ったぞこの人）

「何より！私はずっと言いたかった事があるのよ。なんでそこまで目立った活動をしてないアイドル研究部が部費なんて貰ってるのよ！」
「っ・・・・・・」
バスケ部部長の言葉に顔を歪める矢澤。その言葉に続いて言葉を発する部長達も出てきた。

「確かにね・・・」
「いつも何してるの・・・？」
「要る意味ある？」

罵詈雑言を並べるその姿はあまりにも醜い。バスケ部に続き、ダンス部、吹奏楽部など不満の声を上げていく。

「アイドル研究部の部費をもっと他の部活に回したほうがもっと役に立つと思うのだけれどそこはどうなのかしら？」
「それは私達生徒会が決める事ではありません。部活の設立を最終決定するのは学院の理事長です」
「なら理事長に話したいから許可を得れないかしら？理事長に会うには生徒会からの許可がいるんでしょ？」
「部活をどうこうするのはバスケ部の貴方が決める権利はありません。許可も勿論出せません！」
「何よ！アイドル部だけ贔屓にしてるんじゃないわよ！私の方が学年は上なんだから１００歩譲っても検討すべきでしょ！」
「私達生徒会は生徒の味方です！１つの部活を贔屓にしたりしていま

せん！」
「なら私の要望を聞くのも生徒の味方である生徒会の仕事よね！何?!人を選ぶの!?」
「そ・・・そんな事は・・・」
バスケ部の部長に釣られて絢瀬もヒートアップしていってる。更にいうと絢瀬のほうが劣勢だ。

「そもそも！アイドル研究部が何の役に立つのよ！今までアイドル研究部がどうとかで学校に生徒が入ってきた事なんかある!?」
「なっ!?」
「やるならプロのアイドルになってから言いなさいよ！」
「だ、黙って聞いてれば・・・っ！」

ッバァアンッ!!!

『っ!?』

「ふぅー・・・・・・」

流石の俺にも我慢の限界ってモンがある。
自分の目の前にある机を思いっきり叩くと会議室にいる全員が

黙った。

「黙って聞いてれば、どの口がそれを言うんですかね？」
「な、何よあんた！3年生に向かって調子のってんじゃないわよ！」
「その言葉、そのままそっくり返してやるよ」

席から立つとびっくりしたのかその場に腰を下ろすバスケ部部長。

「人の事言う前に自分のやってきたことを直したらどうなんですかね？バスケ部長さん」
「な、何が言いたいのよ・・・」

「アイドル研究部の矢澤にこは、部費をもらえるだけの功績は残してるって事だ」

俺の一言でざわざわとざわつきだす。言われた矢澤本人は首を傾げ、俺たちの方に視線を移すと絢瀬と希は優しく微笑み返す。

「確かにアイドル研究部、正確には矢澤は赴きに出せるほどの功績は持ち合わせちゃいない。けど、この個人の活動での戦果は出している」
「・・・どういうこと？」
「希、説明を」
「了解っと」
「これは今年の1月に音ノ木坂近辺にある中学生にとったアンケート

の結果です。もし音ノ木坂に入りたいと考えている中学生はどういった理由で入りたいと考えているのかというアンケートです。中には、バスケ部に入りたいや親が通っていたからと言った理由も多かった。けど、中には矢澤にこ本人の名前も書かれてありました」
「えっ・・・・・・？」
「そんなでたらめ信じると思ってるの？」
「論より証拠。希、渡してやってくれ」
「どうぞ」
　希が持っていた資料をバスケ部長の前に差し出す。それを上から順に見ていくと。

『音ノ木のスクールアイドルに興味が出たから』
『矢澤にこって人と一緒にスクールアイドルをしたい』
『この学院のアイドルを見て見たい！』
　数で言えば少ないがこれはれっきとした証拠だ。

「学院に進むのに対してこの理由はちょっと子供っぽいかも知れないが、こうやって文字で残っている。これはそれなりの戦果として見えるのではないでしょうか？」
「そ、そうね・・・。確かにそう見えるわね。ま、まぁ私は少しはちゃんとやっているんじゃないかなとは思っていたわよ・・・？」
　はいダウト。撤回しようなんて遅すぎる。

「・・・まあいいでしょう。ということで矢澤にこが所属するアイドル研究部を潰すことはまず生徒会は許可しない。お分かりいただけましたでしょうか？」
「え、ええ・・・。けど、ウチの部費の件はどう説明するのよ！」
「あぁ、それですか。それもそれなりの理由はありますよ」
「なら！この場で説明してもらおうじゃない！」

　追い詰められてヒステリックになってやがる。やれやれ・・・。

「では・・・・・・」

絢瀬に目配せで合図を送ると、全員に見やすいようにノートパソコンを用意する。モニターの真ん中には再生ボタンが浮んでいる。

「これを今すぐ皆さんに見ていただきます。これを見れば、部費の事も納得いただけるでしょう。ねえ?バスケ部さんにダンス部さん?」

「っ!?」

「っ・・・」

さっきから何も声を出さなかったダンス部の部長がビクッと体を跳ねらせる。

再生ボタンを押す。

写ったのは体育館の裏側。そこにはバスケ部の部長とその友達らしき人物が数名。

数秒時間が経つとそこにあの少女。二階堂さんが現れた。映像でも分かるようにオドオドしながらその輪の中に入っていく。

この映像を見ると、バスケ部の部長の顔から汗が噴出す。

『やっと来たわね。で?持ってきてくれたわよね?』

『も、もう辞めてください先輩。私・・・もう渡せるものなんか・・・』

『誰もそんな事聞いてない。持ってきたのか聞いたのよ』

『も・・・持ってきていません・・・』

『ふーん』

部長が一歩近付くと。

『舐めてんじゃないわよ!』
と一喝し、二階堂さんに平手打ち。
その映像をみた俺たち生徒会以外の人間は度肝を抜かれた。
ここで映像は一旦終了。

「これが理由です。なぜこんな事をしている人物に部費を渡さなきゃいけないのか、説明していただけますか?」
バスケ部部長の前に立ち見下ろす。長身の男にここまで詰め寄られると流石に誰しもビビる。
「あ・・・な、なんで・・・それを貴方達が・・・」

「質問を質問で返すなぁ!!」

俺の怒号でその場に腰をぬかす。

「往生際が悪いんだよ!!ここまで証拠が残っているのに言い逃れできると思うなよ!」
「あ・・・あぁ・・・」
はぁと息を吐き、全員に視線を移す。
「これが現状です。彼女はそれなりの成績を残して音ノ木坂に転入した期待の星。その彼女が自分より上手いと理由で数人で脅し喝上げをされている。もう生徒だけでの問題じゃなくなってきている」
パソコンのマウスを動かし別の画像を映す。

「続いてこれも同じく先日の画像です。場所はアイドル研究部の部室前。いるのはバスケ部の部長とダンス部の部長。俺は矢澤本人からこの2人が自分に嫌がらせを受けていると話を聞きました。生徒の味方である生徒会がこれを見て見過ごすわけがない!!」

この動画と画像は1年生の3人組に頼んで調達してもらったもの。良い言い方だったら調査。悪い意味で尾行だ。動画の方は二階堂さんがいつもどこで喝上げをされているかを聞き、現場にことりと俺が人足早く張り込んで撮った動画。画像の方は海未と穂乃果にこっそり取って貰った写真。絢瀬と希には理事長達に話を通してもらった。

これが現状だ。自分のした悪行は必ず自分の元に返ってくる。

おおよその見当はつく。矢澤のダンスの凄さをみた怒りによるダンス部からのいやがらせ。それの便乗でのバスケ部。

「自分より凄い奴が現れて悔しがるのは構わない。けど、その怒りの矛先をその本人にぶつけるのはおかしいんだよ！」

バスケ部とダンス部の部長の前にたち、また机を叩く。

「やるより前に自分のやろうとしている事を自覚しろ！努力もしないで汚いやり方で本人達を苦しめてんじゃねえよ！彼女たちは自分のしてきた事に覚悟と誇りを持ってる！それを汚すのは愚の骨頂だ！」

俺の言葉を聞いた2人は涙目になり俯いてしまう。

「くだらねえ価値観で人の心を傷つけるな！そんな事をしているからお前らはいつまでたっても二流なんだ！言い争う前にそれなりの力と技術を身につけろ!!」

＋＋＋

時間は午後7時。日が傾き薄暗くなった時間。場所は生徒会室。

俺の目の前には絢瀬と希、そして矢澤にこ。

「・・・・・なんであんな事をしたのよ」
「まずかったか？」
「大アリよ！あんな事したらあんたの評判落ちちゃうわよ！」
「知るかよ。俺の評判は理事長だけに見てもらえれば良い」
「うっ・・・」
「俺がしたい事をしただけだからな。結論」
「でも、私は頼んでない」
「あぁ、俺が勝手にしたことだ。お前はなんの関係もない」
「・・・・・御人好しを通りこしすぎよ」
「だな。俺も自分をぶん殴りたい」

軽く一息つき、矢澤が一言呟いた。

「なんで・・・私を助けたの？」

矢澤の言葉に俺は軽くこう返した。

「助けるのに理由が必要か？」
「え・・・・・・？」
「俺は俺のやりたい事をしただけだ。絶対なんとかしなきゃいけないとかそういう感情は無い。俺が助けたいと思ったから助けた。それだけだ」

俺の言葉を聞いた矢澤、絢瀬、希はポカンと口をあけて、数秒後に笑い出した。

「ぷっ・・・クサい台詞言っちゃって」
「ふふふっ・・・誰を真似たのよ」
「あかんわ。おなか痛い」
「こいつら・・・・・・」
「どっかの誰かみたいやねエリチ」
「ちょっと希！」

なんだかカッコよく言ったつもりだったのに馬鹿みたいだ。
あとあんたらなに喋ってんだ？

「大和・・・」
「あん？」

矢澤が俺に笑顔を向けて。

「ありがとう」

感謝の言葉を呟いた。

「・・・・・・気にすんな。あ、そうだ！希！」
「ん？」
「まだあの紙あるか？」
「え？あ、あー！あれやね！待ってて！」
希が鞄をガサゴソとあさりだし、ファイリングされた一枚の紙を矢澤の目の前に出した。

「これは？」
「今日言っていた中学生のアンケートの一枚だ。これだけお前に渡したくてな」
「？」
ファイルから取り出し、書いてある文を読み上げる。

『私もアイドルが大好きです。来年は音ノ木坂に入って一緒にスクールアイドルをしてみたいと思っています。頑張ってください！
小泉花陽』

「あ・・・・・・」
「今まで頑張ってやってきたことがやっと形になったんだよ」
「にこががんばったおかげよ」
「継続は力なりやね」

文を読んでいた矢澤の目からポロポロと涙が溢れてきた。

「うっ・・・うぇ・・・」
「にこ」

「にこっち」

絢瀬と希がにこを抱きしめる。

「わ・・・わだじがしてきたことは・・・・・・ぐすっ・・・」

「あぁ。お前のしてきた事は無駄じゃなかったんだ」

大声を出して泣き出した矢澤の声が生徒会室に響いた。

焼肉・・・美味い

耳を澄まして聞けば食欲がそそられる音。匂いを嗅げば腹の虫が治まらなくなる。もうこれは魔術と言っても過言ではない。

「ほら、焼けたぞ希」
「おぉ！やったぁ！」
「ねえ大和。私にも頂戴！」
「あいよ」
「や、大和・・・私もくれないかしら？」
「遠慮しないで一杯食え」
「わ、分かってるわよ！」

俺たちが居るのはチェーン焼肉店ワンカ○ビ。あの生徒会の後の打ち上げという形でこの店にやってきた。今までの努力が無駄にならなかった事を知った矢澤は生徒会で大泣き。形は形でも女の子を泣かせるのはどうなの？と希に怒られ、詫びと絢瀬と希のお疲れ様と言う振る舞いで焼肉屋に来たと言うわけだ。代金は勿論俺持ち。この前入ったバイト代がいつもより多かったからその分での奢りだ。お腹一杯食べれるし、この店はアイスなども充実している。特に希が焼肉大好きだったからな。焼肉が嫌いな女の子っているのだろうか・・・・・・。

「塩タンと上カルビとバラ。後は飲み物でウーロン茶２つとコーラ、後小冷１つ下さい」
「かしこまりましたー！」
「何だか悪いわね大和。ご馳走になっちゃって」
「いいんだよ。元から会議が終わったら奢るつもりだったからよ」
「男前やん柴垣君。どういう風の吹き回し？」
「俺だって迷惑を掛けたって罪悪感があったからさ。ちょっとはお礼をさせてくれよ」
「優しいんやね。柴垣君」

「飯奢るくらい誰でも出来る。優しいくはねえよ」
口の中に肉を放り白ご飯と一緒に飲み込む。焼肉にはやっぱり米だろう。
「ん～～！やっぱりお肉大好き！」
中でも希がダントツに食べてる。肉を焼いては食べ焼いては食べ。米と一緒に口の中に放り込み頬袋一杯にしてもぐもぐしてる。見た目完全にリスだ。
幸せそうに食べやがってこの野郎。
「矢澤、お前もっと食えよ」
「え、ええ」
「遠慮する必要なんてないからな？」
「してないわよ？してないんだけど・・・」
「けど・・・？」
「なんだか、申し訳ないっていうか・・・。私は貴方と初めて会った時、勘違いして酷い事言っちゃったのに、ここまで優しくされたら・・・悪い気がして」
「にこっち。柴垣君はこういう人なんよ。最初がどうだろうが人のために何かをしてあげたいって思う優しい男の子なんよ。悪く思うんじゃなくて、感謝の気持ちを伝えたらええと思うよ」
希の言葉を聞いた矢澤は顔を少しだけ赤くし、もじもじしながら俺と目を合わせてくる。
「あ、あの・・・柴垣・・・さ」
「おん？」
「あ・・・・・その・・・・・あ・・・・・・あり・・」

「ありがとう。私を助けてくれて・・・」

「おうっ」

矢澤の頭を優しく撫でると少しだけ口角が上がっていき笑顔になる。

「ほら、今日は俺からのご褒美だと思っていっぱい食え」

「えぇ、いただくわ」

矢澤の皿に焼けてきた肉をどんどん乗せていき食べろと催促する。すると希のように口いっぱいに肉を頬張り幸せそうに食べる。うん、飯は沢山食うのに限る。

「けど、大和。本当にいいの?ここって食べ放題のお店でしょ?奢ってくれるなんて・・・」

「いいんだよ、俺がしたいことなんだから。絢瀬、お前も食わないと今焼いてる肉希たちに食われるぞ」

「食べてるわよ。ありがたいのだけれど、少し遠慮しちゃいそうなのよね」

まあ普通にこんな事ないからな。焼肉を奢ってもらう事なんて人生に数回ある程度だろうし・・・。この雰囲気のままだと、希はともかく絢瀬と矢澤がなぁ・・・。

「なら、今度なんでも、些細なものでもいいから俺にお返しをくれ。俺はそれだけで充分だからよ」

「お返し?」

「なんでもいい。洗剤を貰うだけでも俺は嬉しいし、お菓子でも大丈夫だ。そういう日常にありふれている物でも俺は大満足だ」

「よくが無いって言われないの?あんた」

「言われる。けど、今の俺はこれぞと言った望むものがないんでな。だからお前等がいいと思ったものでいい。高いものは禁止な」

「なら、今度良い物を探してくるわ」

「ウチもやね」

「日常用品なら私に任せなさい」
「おう。頼んだ」

それと、と絢瀬が続いて問い掛けてきた。
「前々から言いたかった事なのだけれど」
「ん？」
「そろそろ私も名前で呼んでもらえないかしら？」
「は？名前？」
「希や穂乃果たちは名前呼びなのに私とにこだけ苗字だと少し気持ち悪いのよね」
「だからこれを機会に呼べと？」
「そう。にこもいいでしょ？」
「私は別にＯＫよ？」
「なら、そういうことで！」
「どういうことだ。あー・・・でもそう決まると少しだけ恥ずかしくなるな」
「男の癖になに恥ずかしがってるのよ！ほら、せーの！」

「え・・・絵里・・・と・・・・にこ・・・でいいのか？」

『・・・・・・・・・・・・』
「おいお前等何黙ってるんだよ。恥ずかしいだろうが」
「あれね。面と向かって呼ばれると照れちゃうわね」
「今考えたら男に名前で呼ばれるの久しぶり・・・なのよね」
「言い出したの絵里なんだがな」
「いいじゃない！これの方が友達らしいでしょ？」
「まあな」
恐らく今の俺の顔は顔が絶対赤い。赤くなっているのをばれないように白飯が入っているお茶碗を持ち上げて食いながら顔を隠す。
「大和君。顔真っ赤やで」
「なぜばれた!?って・・・希？今俺の名前・・・」

「あ、嫌やったかな?なんか・・・苗字で呼ぶより名前で呼んだ方がウチ的にはええ感じなんよ。前から呼んでいたような・・・」
「希?それって記憶が・・・?」
「ううん・・・わからへん。けど・・・懐かしい感じはする・・・」
　確かに希には昔はずっと大和と呼ばれていた。『柴垣』というフレーズで呼ばれていたのは前からなんだか心がモヤモヤしていたのだが、今やっと心のモヤモヤが晴れた。

「そういえば、大和と希は幼馴染・・・なの?」
「いや、希と俺が出会ったのは小学生時代でな。希が転校してきたんだよ」
「それで仲良くなったの?」
「今の希にその真意は聞けないんだがな・・・」
「ごめんな・・・大和君」
「あ、いや・・・責めてる訳じゃないんだ」
「もう大和。希を悲しませちゃだめでしょ」
「そんなつもりはサラサラないんだが・・・」
「ふぅん。また今度その頃の話を聞きたいものだわ」
「私も。記憶をなくす前の希から少しは話は聞いてるけど、その話聞いてみたいわ」
「ウチ・・・もかな。記憶を取り戻すキッカケになると思うし」
「俺は別に構わん。けど、話をしていて希がまた頭痛を起こすかも知れないから少しずつな」

(なんだかんだ言いながら希の事大切にしてるわよね大和・・・)
(これ事情を知らない奴からしたら付き合ってるって思われかねないわね・・・)

　運ばれてきた肉を網の上に置いて、飲み物のストローを除いて男らしく半分まで飲みきる。
　うん、コーラ最高だ。

「けど、あれよね。大和の処遇がどうなるかよね」
「あれだけ派手にやらかしたからね。見た目はかなり良い事をしたんだけれど・・・」
「やり方が最低やからねぇ」
「そうなった時はそうなったでだ。山田先生にも一応の許可まがいの事は貰ってるから大丈夫だと思うけどな」
「理事長がどう判断するかやね」
「俺はやりたい事はしたから悔いは無い」
「今から死ぬ奴の台詞よねそれ」
「賄賂でも渡したほうがよかったか・・・」
「それが1番ダメやん」
「ダメか」
「良い方向に向かう事を期待するしかないわね」
　流石にやり方がやり方だったしな。ストーカーと言われても拒否することはできない。今は幸運を祈るしかないな。
「ねえ大和」
「どしたにこ」
「私を助けると言って、したかったからしたって言ったじゃない？」
「まあな」
「本当にそれだけなの？」
「・・・・・何が聞きたいんだ？」
「貴方の良心だけで、私を助けたとは思えないって言いたいの」
「御人好し通りこしてるからね」
「・・・・・・・・・・」
「沈黙は肯定と見るけどいいかしら？」
　グラスの中のコーラを飲み干して軽く息を吐く。
「俺も、お前のような時があったからな」
「？」
「自分で言うのもなんだけど、バスケをしていた時は俺はそれなりに

上手かったんだ。推薦も幾つもくるぐらいな」
「凄いわね」
「それがきっかけで俺は色々な奴にいじめられる標的にされていた。男同士だったから殴り合いもよくあった」
「そう・・・だったのね」

「そんな時な、俺にずっと味方になってくれた奴がいたんだ。お前は何も悪い事はしていない。周りが逆恨みで間違った事をしているだけだからお前が悲しむ必要はないってな」

目を瞑れば、あいつの、親友の顔が浮んでくる。

「そいつみたいになりたくてな。誰でも助けるって訳じゃないが、自分の身の回りで悲しんでいる奴を放っておけない。自分の持てる力で助けれる奴になりたいって思ったんだ」

少し、しんみりとした空気の中に希の言葉が入ると、張り詰めていた空間が和らいだ。

「やっぱり、ええ人やね大和君は」
「ふふっ、カッコいいわよ」
「その大和を助けた味方さんに感謝しないとね」
「あぁ、感謝しても・・・しきれないくらいにな」
「良い人なのね」
「良い奴・・・だったんだ」
「だった？」
「今は・・・もう居ないんだ」
「あ・・・ごめんなさい。無神経だったわね」

「いいんだ。俺は聞かれた事を話しただけだから」
「あいつの分まで、俺が出来る事をしないとって思ったわけだ」
「使命感・・・ね」
「まるでその人相棒みたいね」
「相棒でもあり親友だな」
　焼けた肉を全員に分配して食事を再開する。
「ねえエリチ」
「ん？」

「あの人にそっくりやね。大和君」

「んんっ!?」
「あ」
「ん？」
　希の言葉を聞いた絵里が食べていた肉を喉に詰まらせて悶絶している。なんとか肉を胃に送るために目の前にあったウーロン茶を一気飲み。飲み終えると肩で大きく呼吸をし、自分を落ち着かせる。
「の、希!?何言ってるのよ!?」
「え？なんかあかんかった？」
「ここで言う必要ないわよね!?」
「ええやん。大和君やねんから」
「なんだ？何の話だ？」
「あ！いや！大和は気にしなくて良いわよ!?何でもないんだから！」
「えっとな、エリチの・・・」
「希ぃ!!」
　涙目になりながら必死で希を止めようとする絵里。だが効果はいまひとつだ。
「エリチにはカッコイイ彼氏さんがいるんよ」

「え?絵里お前彼氏いたのか!?」
「言っちゃたわね・・・希」
プルプルと震えて涙目の絵里が顔を上げてボソボソと呟いた。
「い・・・・・・います」
「誰だウチの絵里を取った奴は。お父さん許しませんよ」
「大和はお父さんじゃないでしょ!」
「茶番やん」
「希はお母さんってことでいいかしら?」
「にこも茶化さないで!」
「ほらエリチ。話してあげ」
あれだな。希が完璧に小悪魔になってやがる。
「えっと・・・かっこよくて・・・優しくて・・・いつも私の事を大切にしてくれる・・・彼氏が居ます」
顔真っ赤。トマトだ。
「希は知ってるのか?」
「うん。一度会った事があるんよ」
「にこもか?」
「私は数回。そいつ料理が上手いからよくご馳走になったわ」
「凄い大物を彼氏にしたんだな絵里。なあ名前はなんて言うんだ?」
絢瀬絵里の彼氏・・・。少し気になるな・・・。

「・・・・・・・・・・・横山・・・隆也って人・・・です・・・・」

「えっくしゅん！」
「どうした風邪か？隆也」
「いや、なにやた俺の噂をされてるようだ」
「噂？」

「それか翔樹の馬鹿(病気)が移ったか」
「俺をバイ菌みたいに言うのやめてくれませんかね!?」

記憶の片鱗

「ねえ兄さん。６」
「なんだ。７」
「前々から思ってはいましたけど、本当に馬鹿ですよね。８」
「いや、アレしか方法が思いつかなくて・・・。９」
「それをした結果がこれですか。ダメダメですね。１０」
「ほんの少しの期間だから別に苦ではない。１１」
「編入校を探してくれたお母さんからしたら最低ですよ。１２」
「だからあれだけ説教くらったんだろうが。１３」
「久々にお母さんの頭に角が生えてましたよ。１」
「勝てっこねえよ。お父さんでもな。２」
「心強いですが、敵になったら終わりですよ。３」
「２秒でチョンだろ。４」
「とにかく、これからはもっと後先考えて行動してくださいね。５」
「そうだな。もうこれ以上迷惑をかけるわけにはいかなしな。６」
「ダウト」
「くっそぉおおおおお!!!」

持っていたトランプを机にぶちまけた。

今は午後の４時半。桜が家にいるのは別に不思議な事ではないのだが、今の時間帯なら生徒会で仕事をしているはずの俺だが、今日は朝からずっと家に居る。

そう、３日間の謹慎処分だ。

あの事件、にこと二階堂さんを救う為に行った俺の愚行。それの結果が俺への謹慎処分だ。表向きはいじめを成敗したって感じだが、やり方がやり方だったので理事長から建前は謹慎処分、裏向きはほとぼりが冷めるまでという話をされた。

山田先生にも話を通してもらっているから悪い面では見られていないからよし。多分今頃なんで俺が３日間学校に来ないのか噂で持

ちきりだろうな。
良い事したけど少しやりすぎだから自重しろって言うのが理事長と山田先生の本音。
んで今はその謹慎処分の3日目。早めに帰ってきた桜とトランプでダウトをしているんだが一回も勝てない。嘘のカードを出すと絶対にバレる。
こいつの未来の仕事は警察か探偵が向いてるんじゃないか・・・。

「どうします？まだ続けますか？」
「椅子に座って踏ん反り返ってんじゃない。あとそのニヤニヤ顔やめろ」
「口ほどにもないですね」
「冷蔵庫にあるプリン食ってやる」
「駄目です。それだけは許してください」
桜の大好物、プリン。
「では神経衰弱にしますか？」
「ドンピシャでカード当てるから却下」
「ババ抜きは？」
「運ゲーだな」
「ポーカーは」
「よしやろうか」

「コール。フォーカードです」
「ワンペアだよちくしょおお！」

＊＊＊

「これぞ勝利の美酒ですね」
「ただのジュースだよ」
「一緒に飲みます？」
「飲む」
　コップに注がれたオレンジジュースを飲み一息つく。なんだかんだ桜とダウトから始まり、ババ抜き、大富豪、ポーカーなどと遊んだ。勝率？何一つ桜に勝てなかったよ！

「今日の食事当番は兄さんですが、今日のメニューはどういったものですか？」
「あー・・・それを考えるついでに買い物行かないといけないな」
「今からですか？」
「トランプしててすっかり忘れてた」
「おバカ」
「返す言葉もございません」
「私も一緒に行きたいんですがいいですか？」
「断る理由がないな。行こうか」
「財布を忘れてはいけませんよ。後はエコバックを」
「あいよ」
「そして自転車で私を後ろに乗せてください」
「歩く気は？」
「ありません」
「だよな」

・　・　・

ママチャリのサドルに跨り、桜を荷台に座らせる。買い物行く時はよく二人乗りはするけど桜が軽すぎて人が乗っているとは全然感じない。豆腐か?それともチーズでできてるんじゃないか?

「今日の献立はどんなものですか?」

スーパーまでの道のりを進んでいる時に桜が質問を投げかけてきた。

「今日は魚料理だな。チラシ見てて鮭が安かったはずだからそれを買う」

「焼き鮭ですか?それともホイル焼きですか?」

「候補の中に入ってる。楽だしな」

「ホイル焼きを所望します。兄さんのホイル焼きは大好きですので」

「嬉しい事言ってくれるな。なら今日はそれにするか」

「やったっ」

後ろを見なければ若らないが、恐らく桜は小さくガッツポーズをしているはずだ。しかも笑顔で。

桜は肉も好きだが魚も好きな人間だからな。特に焼いた魚料理が。

「それに俺の学校での弁当のおかずになるからな」

「兄さんだったらどんなモノでも白ご飯のおかずになると思いますが」

「美味いものは何度も味わいたいんだよ」

「反芻ですか?」

「コラやめなさい」

信号が赤に光ってるので横断歩道の手前で停車。

「兄さん」

「ん?」

「学校は楽しいですか?」

「楽しいぞ。仲の良い奴らと友達になったしな」

「女子高だから男の方からしたら耐え難いものだと思いますが・・・」

「許容範囲内・・・て訳にはならないが、ある程度ならな。それに」

「それに?」

「希もいるしな」
　信号が青に変わったので自転車のペダルを踏む。
「希ねえさんに・・・会いたいです」
「そうだな・・・。お前はあいつに可愛がられてたしな」
「記憶喪失・・・。苦しい限りです」
「忘れたものは仕方ない。これからゆっくりとだ。焦る必要は無い」
「そうですけど、心は早く早くと思ってしまいます」
「おれもだ。早く思い出して欲しいってよく思うよ」

　傲慢なんだろうなこの想いは。今の希がどう想っているのか知らないが俺は一刻も早く希に記憶を戻して欲しい。頭ではゆっくりと考えてしまっているが心では急かしてしまっている。・・・なんて本人の事を全く考えないでいるのだから。記憶喪失がどれだけ辛いのかもしらないのに。
　自分がよくても希本人がどうなのか・・・。
　こんなこと絵里などに言ったら百発百中ぶん殴られる。こんな考えはさっさと消してしまわなければ・・・。

「兄さん」
「お!?ど、どうした?」
「ボーッとしすぎです。どうせ最低な事考えてるなーとか思っていたのでしょ?」
「・・・・・・エスパー桜」
「ドヤ顔はしませんよ。まったく・・・怠惰なんですから」
「・・・すまん」
「自分で言いましたよね?焦ってはいけません。そしてちゃんと希ねえさんを護ってあげてください。もう二度とこんな記憶喪失などにならないためにも」
「・・・おう」
　自分の言葉がそのままブーメランで帰ってきてしまった。恥ずかしい・・・。

「好きなんですよね。希ねえさんの事」
「・・・あの時から告白も出来てないからな・・・。この気持ちはずっと変わらない」
「なら、その願いを叶えるためにも、希ねえさんの力になってあげて下さい」
「・・・そうだな」
「やれやれ・・・。本当にダメダメな兄さんです」
「ぐうの音も出ない」

「それと兄さん」
「ん？」

「スーパーを通り越しました」

「・・・・・・・・・・・・・・」

無言のまま方向転回してスーパーに向かった。

「兄さん顔真っ赤です」
「うるせ」

・　・　・

スーパーに入り籠に必要な材料をどんどん入れていく。メインの鮭、しめじにタマネギ、にんじんとバター。後は飲み物で牛乳、炭酸飲料、お茶。最後に桜のデザートのプリン。
インスタントコーヒーの豆。ココアの元。後は調味料少々。
「桜、その隠しているプリンを直してきなさい」
「なんでバレたのですか・・・」
身長差で分かるのです。仕方ないからプリンはもう一個追加だ。

「兄さんの好きなイチゴヨーグルトはいいんですか?」
「まだ家に少しあるから大丈夫」
「兄さんのペースなら今日か明日で食べきってしまいそうな気がします」
「好物は別腹だから仕方ないんだよ。お前のプリンと一緒だ」
「プリンなら10個なんて余裕です!」
「だから横腹が少し出てきてるんだな」
「・・・・・・・・なんで知っているんですか」
「前にお前洗面器の前でブツブツなんか言ってただろ。お腹が・・・とか。食事が・・・とか」
「なんでそこまで見たり聞いたりしているんですか!デリカシーがなさすぎですよ!」
「一緒に住んでるんだから無理があるだろ。俺から見たらどこが太ったのか教えて欲しいくらいだ」
「男の人には見えないところにお肉が増えているんです。女の子には色々あるんですよ」
「食事で取った栄養はすべてお腹の脂肪になるのか・・・・・・大変だな」
「失礼な。ちゃんと他のところにも行き渡ってますよ!」
「どこだよ」
「ここととか」
ここととか。と言われても分からないと思っていたら桜が今まで以上に胸を張って強調してくる。あれか?栄養はこの通りちゃんと胸

にも来ているんですよとでも言いたいのか。いや確かに大きくはなってるよ。うん、少しは。けど桜の年齢的には今ぐらいが丁度良いと思うぞ。小さくても・・・うん・・・。妹相手になに考えてんだ俺は。

「兄さん。今思っていた事を1つの単語に表しなさい」
「え」
「早く」

単語・・・・・・。

「貧にゅん”ん”!」

脇腹に水平チョップが炸裂した。
結果、変な声が出た。

・　・　・

「兄さん帰りましょうか」
「・・・・・・ああ」
「反省してください」
「はい・・・」
買った品をエコバックに詰めて前カゴに入れる。

桜を後ろに載せてペダルを踏んだ。

「希ねえさん。今でも1人暮らしなんですか？」

「ん？らしいな。大丈夫だと思うけどな」

「心配です・・・」

「何かあったら絵里たちがいち早く気付くと思うけどな。絵里たちが希の保護者みたいになってるから」

「生徒会長さん。頼もしい人ですよね」

「友達の為に動けるやつはそうそういないもんな」

友達の為に動ける奴・・・か。

「ん？」

ポケットでスマホが震えた。取り出して見て見ると画面には『東條希』の名前があった。

「希？」

「希ねえさん？」

トーク画面を開くとそこには。

『今どこにおるん？』と書いてあった。

「何かのお誘いか？」

「デートですか!?」

「んなわけあるか」

「あうっ」

桜の頭に優しくチョップを落とす。

『今は桜と買い物終わったところだよ』既読

『もう少しで家帰ってくるん？』既読

『そうだな。どうしたんだ？』既読

『分かった』既読

そこから希の返信は無くなった。

「どうしたんだ希の奴」

「んー、デートのお誘いではなかったら謹慎中の兄さんの心配をして

くれたのかもしれませんね」
「昨日も絵里とにことか含めてグループ電話したんだけどな」
「急用の用事？」
「だったら何か言ってくるだろ」
「生徒会でのお題がどうとか」
「それなら生徒会長である絵里から連絡が来るだろ」
「・・・・・・なんなんでしょうか」
「俺にもわからん」
『何かあったら連絡しろよ』
と、だけをトークに書き込んで俺と桜は家に戻った。

＊＊＊

「はい、到着」
「お疲れ様です」
「悪いな買い物につき合わせて」
「私がしたいからしたので気にしないでください。プリンも買っていただいたので」
「体重にはお気をつけて」
「次はグーで行きますよ」
「やめてくれ」
俺の家はそこらの家より少しだけ大きめの一軒家。お父さんとお母さんも今は別の場所で暮らしているから俺たち兄妹でこの立派な家に住んでいる。家がでかいだけあって２人で住むには少し広いくらいだ。部屋もそれなりの数。俺の部屋、桜の部屋、父母の部屋、物置とその他色々。リビングもそこそこ。お風呂も洗面台は一緒の部屋になっている。後は・・・猫がいるくらい。名前はミィ。種類で言うとペルシャ猫。毛が多いモフモフ感がたまらない抱き心地最高の猫。今頃俺の布団の中で丸くなっているころだろう。

「ミィにも餌をあげないとですね」
「だからさりげなく猫缶入れてたのか」
「油断大敵です」
「別にいいけどな」

そんな時、ちょっとした違和感に気付いた。ママチャリを門の中に入れようとした時、門の鍵が開いてしまっている。いつもウチは門の鍵は内側のレバーを扉に引っ掛けて出かけているんだがなんでかそれが解かれてあり門が半開きになっていた。
「桜、俺から離れるなよ」
「え?は・・・はい」
強盗か?それか下着ドロか?とにかく気をつけながら門を開けて敷地に足を踏み入れた。
視線を先に向けると、家の玄関の扉の前に体育座りで座って顔を膝に埋めている人間がいた。
「え?」

近付くとその正体が分かった。

俺に連絡をしてきた張本人、希だった。

「希?」
「え!?希ねえさん!?」
近付いて希の肩をトントンと叩くと、ゆっくりと顔をあげてくれた・・・が、その目は真っ赤になっていた。
「おいどうした希」
「大和・・・・・・くん・・・・」
「おう俺だ。どうし・・・・・・」

「うぁ・・ふぇ・・・・うぇぇぇぇぇ!よかったよぉぉぉぉ!!」

俺の首に両腕を回して、大泣きしながら抱きついてきた。

「の、希!?どうしたんだよ!」

「お願い!私の中から消えないで!私から取らないで!大事なものは絶対に渡さない!誰にも!貴方にも!」

「何を言ってるんだ希!?落ちつけ!」

「希・・・ねえさん?」

希が一体何を言っているのか分からない。消えないで?取らないで?渡さない?誰にも?誰の事を、一体何を言っているんだ。

半分荒れながら俺に泣き付いて来る希に俺は何をしたらいいのか分からなかった。出来ることは希を落ち着かせる為に背中と頭を撫でてあげることしか出来ない。

桜も呆気に取られてどうしたらいいのか分からないくらい混乱していた。

「やだよぉ・・・もう・・・・・・やだよぉ・・・。エリチ・・・にこっち・・・穂乃果ちゃん・・・海未ちゃん・・・ことりちゃん・・・大和くん・・・・・・どこにも行かんといて・・・ウチを・・・私を1人にしないで・・・」

泣き疲れたのか希が俺の胸の中で静かになった。その右手は俺の服を強く握り締めながら・・・。

なんだこれは。希の身に一体何があったんだ・・・。

「絵里たちにも聞くしかないな」

「どうします？」

「リビングで寝かせるしかない。桜は毛布を持ってきてあげてくれ」

「分かりました」

エコバックを桜に持たせて俺は希をお姫様抱っこする。玄関をゆっくりと開けて中に入り靴を脱ぐ。希の靴も脱がしてリビングまで運ぶ。

「希・・・」

「んぅ・・・・・・」

今は落ち着いたのか静かに眠っている。力が抜けているはずなのにさっきから俺の服を離そうとしない。

ソファに横にしてあげ、少し悪いが握られている手を解く。

希の頭を優しく撫でてあげる。今俺が出来るのはこれだけだった・・・。

希が言っていた言葉はなんだ？気の動転によるものか？また昔の記憶に触れて起きた頭痛によるものか？

それか・・・俺が希の横にいなかった間に起こった出来事の片鱗なのかもしれない。

「俺が付いてるぞ。離さないからな」

今は無事に目を覚まして欲しい事を願い、眠っている希の手を両手で包んだ。

懐かしい

「んぅ・・・・・・あれ？」

ウチが目を覚まして視界に入ってきたのは全てが真っ白の世界だった。いつも夢に出てくる世界。そうだ、ここは夢の中だと認識できた。右を見ても左を見ても誰もいない。

そして変わらないのは少し遠くに立っている男の人。誰か分からない。顔には靄が掛かっていてるから知り合いなのか赤の他人なのかも理解できない。

何かを男の人が喋っている。ゆっくりとこっちに近付いてきてウチに手を伸ばしてくる。

その手をウチは掴もうとした。

だが、その瞬間。見ていた世界が一瞬で真っ黒になった。

「え!?」

白から黒の世界に変わり、不気味な雰囲気が漂う。ウチに手を伸ばしてくれていた男の人もその場から光の粒になって消えてしまっていた。

「な・・・なんでっ？」

ここにいちゃ行けない。そう思って私は駆け出した。ここにいちゃダメだと自分の中の本能が告げていた。ここがどこだか分からない。だけど走り続ける。

「はぁっ・・・・!はぁっ・・・・!」

かなり走ったのか息が上がってしまいその場に膝を着いて肩で呼吸している状態だ。額から汗が流れて地面にポタポタと零れ落ちる。

手で汗を拭い、また走ろうとした瞬間、目の前に見知った顔がいた。

「あっ!エリチ!」

「・・・・・・・・・・」

「エリ・・・チ？」

だがそこに居た絢瀬絵里はいつもの絢瀬絵里ではなかった。いつもウチに見せてくれていた笑顔を一切浮かべておらず、その輝いてい

た蒼い瞳は冷たく光っていた。
「ねぇ・・・エリチどうしたんよ・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「えっ!?エリチ!?絵里!?」
男の人のように目の前のエリチも光の粒になって消えていく。
「な・・・なんで?なにが・・・」
頭が今の状態に追いついていなかった。いつもあの世界を見ているから夢だと認識していたはずなのに現実にしか感じられなかった。流れる汗も脈打つ鼓動もリアルだ。

「希ちゃん・・・」
「っ?!穂乃果ちゃん!ことりちゃん!海未ちゃん!」
『・・・・・・・・・・・・』

今度は自分の大事な後輩である仲良し3人組。けどその表情は絵里と一緒だった。
「ねぇっ・・・・・・皆どうしたんよ・・・エリチが消えて・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「あっ!?ねえ!待って!」
1人、また1人と自分の目の前から消えてしまう。まるで記憶喪失になって消えていった過去の記憶のように・・・。無くなっていく・・・自分の大事な物が。
すると、次は矢澤にこが目の前に現れた。
「にこっち!」
「希・・・・・・」
「お願い消えないで!ウチの前から消えんといて!」
「・・・・・・・・・」
「にこっちぃ!」
だが願いは叶わず、消えていく。

「やだ・・・ヤダヤダヤダヤダヤダ!!なんで皆消えるの!?お願い消えないで!私から大事なモノを取らないで!!」

黒の世界に怒号を飛ばすが儚く消えていく。

もう顔は涙や鼻水でぐちゃぐちゃだ。もうどうなっているのか分からない。ここはどこだ?夢か?現実か?幻想か?幻か?

私は誰だ?

「そうだよ・・・」

「っ!?」

「ここはいつか貴方がたどり着く場所。誰にも助けてもらえず、救われず、この黒白の世界に溶けていく。貴方の大事なモノも消える。絢瀬絵里、高坂穂乃果、南ことり、園田海未、矢澤にこ、そして・・・柴垣大和も」

「大和君・・・・・・まで?」

「アレは私のもの・・・記憶が無い貴方には勿体無いモノ。彼女達もすべて・・・ワタシノモノダカラ」

「いやっ!皆ウチの大事な宝物!記憶を失ってもウチらはずっと繋がってる!!渡さない!誰にも!大事な物は絶対に!貴方にも!」

ここは自分しか居ない。けどそんな私に話しかけてくる『ダレ』かに言い返す。

「なら・・・・・・こうする」

映像か何か分からない。一瞬で目の前に柴垣大和が現れる。

「大和君！」
「希・・・・・・・」
「ジャアネ」
　刹那、柴垣大和の足元に巨大な穴が口を開き、奈落の底に落ちていく。

「いや・・・・・・・イヤアアアアアアアアアアアア！」

＊＊＊

「希！希ぃ！」
「はっ!?」
「大丈夫か希!?」
「はぁ・・・はぁ・・・・・・・あ・・・あれ？」
「大丈夫か？魘されていたが」
「大和・・・くん・・・？」
　目を開けたら知らない天井だった。当たりを見渡すと自分の家じゃない。誰かの家の中だとすぐに認識できた。そして目の前には自分を心配してくれているさきほど『穴』に落ちていった筈の柴垣大和の姿があった。
　動機が激しい。汗が止まらない・・・。服も汗でべっとりとくっついてしまっていた。

「ここ・・・は?」
「俺の家だ。お前、俺の家の前で蹲ってたんだぞ?」
「ウチ・・・・・・何を・・・・・・」
「大丈夫だ。もうここにはお前を苦しめるものは何も無い。俺が付いている」
「あ・・・・・・」
　握られている大和の手を握り大きく深呼吸する。どうやらちゃんと現実に戻ってきたようだ。
「そっか・・・ウチは・・・」
「悪夢でも見ていたのか?」
「うん・・・ここに来る前に見ていた夢と一緒。皆ウチの目の前から消えてく夢・・・。大事な宝物が消えていって・・・それから・・・」
「希・・・?」
「ご・・・ごめんな?なんだか・・・涙が止まらなくて・・・・」
　安心したからから目から涙が零れる。ポロポロと零れ落ち自分の手と大和の手を涙で濡らしていく。
　そんな自分の目から零れる涙を大和は手で拭ってくれた。
「大丈夫だ・・・。俺はここにいる。絵里も穂乃果も海未もことりもにこも。どこにもいったりしない・・・。皆お前の味方だ・・・『お前は1人じゃない』」
「や・・・大和君・・・・」
「おう」
「うっ・・・・・・っ!」
「うぉっ!?」
　胸の奥から何かがこみ上げてきて押さえ込む事ができなかった。悲しみなのか喜びなのか、色々な物がごちゃごちゃになっている。頭に浮んだのがなぜか彼に甘えることだった。なぜだか分からない・・・。頭がちゃんと整理されていないからか彼の近くにいれば安心感が込み上げてくる。
「こわかった・・・寂しかった・・・」

「あぁ」
「皆・・・消えちゃうんだって・・・・・・」
「消えない。消えてたまるか」
「家で起きた時は夢だって安心はしたんだけど・・・皆が消えていくのがリアルすぎて・・・」
「夢と現実が混濁してるんだな・・・」
「怖くなって・・・誰かに側にいて欲しくなって・・・」
「それで俺の家に来たと・・・」
「頭がどうにかなってて・・・大和君はこの世界にいないんじゃないかって・・・。そんな事ありえるはずないのに・・・バカやね・・・ウチは」
「希・・・」
「ウチは・・・私はダレ・・・・・？」
「お前は東條希だ」
「ここに居ても・・・・・・・いい？」
「勿論だ」
「私は・・・」
「お前は大事な友達だ。大事な友達で・・・・・・俺の・・・」
「俺の・・・・・・・？」
「いや・・・・・・なんでもない」
　彼の大きくてゴツゴツした手が私の頭を撫でてくれる。右手で頭を撫でて左手で背中を摩ってくれる。凄く落ち着くし安心する。
　なんで彼は顔が赤いのだろうか？
「大和君・・・顔赤いで？」
「うるせ」
「照れ屋さんやね・・・」
「俺だって照れることだってある」
「可愛い」
「うるせー」
「えへへっ・・・・・・」
　もう少しだけ、このままと思う自分が居た。このまま彼の胸の中に

居ればなにもかも癒してくれるんじゃないのかと直感し、全てを委ねた。

「希・・・」
「大和君・・・・・・」

見つめ合い・・・・数秒ほど時間が過ぎると。

「そろそろイチャイチャするのも終わってもらってよろしいでしょうか羨ましいとけしからんという思いで心と体と頭が噴火しますよ?」

『うわあああああああああああ!!?』

ポニーテールに髪を纏めている女の子の一声でその場の空気が一変した。

よくそんな長文を噛まずに言えたね・・・。

・・・

「えっと・・・シャワーありがとう」
「気にするな。けど服大丈夫か？俺のＴシャツだけど」
「うん・・・大きいくらいがウチには丁度いいから・・・」
「そうか」
「けしからん胸ですね」
「おい桜ぁ!?」
「はっ・・・つい本音が・・・」
　理性を取り戻したウチは汗で体にへばりついた服が気持ち悪かったので大和君のシャワーを借りる事になった。迷惑をかけたのはウチやのに大和君は優しすぎる。しかも服は洗濯と乾燥までしてくれている。それまで変えの服は大和君のＴシャツと大和君の妹の桜ちゃんの学校の体操ズボン。サイズは少し小さいくらいだが許容範囲内。なんだか・・・落ち着く。大和君の匂い・・・。
（って！ウチ変態みたいやんか！）
「どうした希？頭ブンブン振って」
「な、なんでもないんよ!?気にせんといて！」
「お・・おう」
「希ねえさん。その気持ちよく分かりますよ」
「え？桜何か分かったの？」
「兄さんシャラップ」
「うむ・・・・・・」
　今は大和君の家のリビングにあるソファに座らしてもらって、ウチの横には桜ちゃん。床に大和君が腰を下ろしている。そしてウチの膝の上には大和君の家で飼っている猫のミィちゃんが丸くなってる。人懐っこい猫ちゃんやね。
「少しは落ち着いたか？」
「うん・・・色々ありがとう」

「気にするなよ」
「それに・・・えっと、桜ちゃんも」
「大丈夫です。希ねえさんは私の大事なねえさんなので」
「それは、記憶を無くす前からこういう関係やったんかな・・・」
「そうですよ。希ねえさんは私に凄く優しくしてくれて、新しい姉が出来たような気分でした」
「そっか・・・」
「確かに記憶を無くしたのは残念な事です。けどそれだからって私と希ねえさんの繋がりが切れるわけではありません。私はずっと希ねえさんの味方です。安心してください」
「うんっ・・・ありがとう」
「なんでも力になりますから」
「出来た妹ちゃんやね。大和君」
「どこで道を間違えたらこうなるんだろうな」
「道を誤らなかったらこうなったんじゃないん!?」
「もっとこう、お兄ちゃん大好き!って言いながら抱きついてくるのを期待していたんだが」
「シスコンキモいです」
「おうストレートだな」
「仲が良いのか悪いのか分からんね」
「にゃ～」
　ミィちゃんの頭を優しく撫でながらリビングに掛けられてある時計を見ると午後5時前になっていた。
「そろそろ晩飯作らないとだな」
「そうですね。希ねえさんもご一緒に」
「え!?ええの!?服まで色々してくれたのに晩御飯まで貰うって凄く悪い気がするんやけど・・・」
「このまま帰すのもなんだか後味が悪くてな。折角なら晩飯食っていかないか?」
「いいの・・・?」
「断る理由がないからな」

「なら・・・よろしくお願いします・・・」
「おう」
「決まりですね」
　なんでここまでしてくれるのだろうか。記憶が無いウチがここまで迷惑をかけているのにも関わらずこの人は嫌な顔せず、寧ろ笑顔で答えてくれる。器が大きいとかそういった類のものではない。御人好しも良いところ・・・・・。
　けどなんでかウチはこの人が全くと持った赤の他人とは思えない。確かに大和君からは自分は過去のウチを知っていると言っていたがそれを明らかにする証拠も無い。けどなんでだろうか。ウチはこの男を知っている気がする。まるで、『過去にもこうやって私を助けてくれた』ような覚えがある。気のせいかもしれないが、なぜかそう思ってしまう・・・。なんでだろうか・・・？

「希？」
「あっ・・・何？」
「大丈夫か？頭が痛かったりするか・・・？」
「だ、大丈夫やで？ちょっと考え事してただけだから」
「そっか」
「希ねえさん。料理はできます？」
「料理？」
「何年ぶりになりますが、３人で一緒に料理しませんか？」
「今日は鮭のホイル焼きだ」
「ウチは２人と一緒に料理してたん？」
「おう。俺と桜の両親が仕事でいない時は３人で料理してたんだぞ」
「兄さんはその頃よく指を切って大変でした」
「・・・・・不器用なだけだ」
　３人で・・・料理・・・。懐かしい響き・・・。

「じゃあ、ご一緒させてください」
「勿論」
「喜んで」

＊＊＊

『ご馳走様でした』
「ふぅ・・・美味かった」
「ですね。希ねえさんが作ってくれた野菜スープ凄く美味しかったです」
「そ、そんな大袈裟な。普通のやで」
「いや、確かに美味かった。希は良いお嫁さんになれる」
「お・・・およよお嫁さんって・・・・・・・」
「兄さんセクハラです」
「どこが!?」

3人で台所に立ち、大和君は鮭を担当し、ウチは簡単に作った野菜スープ。桜ちゃんはポテトサラダと副菜を少々。結論から言って凄く楽しかった。今までエリチと一緒に料理をした事は何度か合ったが、こうやって彼らと料理をしたのは『今』の私にとっちゃ初めてのはずなのだが、どうも初めてとは思えない。胸の奥が暖かくなって、ポカポカする。懐かしいし楽しいの感情が溢れ出して来る。

それと気付いた事がある。大和君の手はゴツゴツしているのに綺麗な手をしていた。包丁を持つ手やフライパンを持つ手、全てがなぜかカッコよく感じた。その手も料理をしている姿全てが。

台所に立つ男の子はかっこいいってエリチには聞いていたが本当のようだ。ときめいてしまった。

どうやらエリチの彼氏の隆也君の事を言っていたのだろう。

「色々ごめんね。ご飯までご馳走になっちゃって」
「大人数で飯食ったほうが美味いんだよ」
「そうですよ。2倍美味しくなる方式です」
「お陰で何倍おかわりしたか覚えてない」
「4杯目から数えていません」
「新記録！」
「そのお腹のどこに入っていくのか謎なんやけど・・・」
　美味しいと言ってくれながら食べていた大和君だがこれでもかというくらい白ご飯をおかわりしていた。わんこそばとまでは行かないが入れては消え入れては消え。口いっぱいに頬張る姿が少し可愛く感じた。
　料理をしたら最後の肯定。皿洗いを3人でして今はソファでまったりしている。チラリと横目で時計を見たら午後8時を回っていた。

「そろそろおいとました方がよさそうやね」
「ん？もうそんな時間か」
「希ねえさん。家に泊まって行きませんか？」
「流石にそれは無理だ。希も学校があるんだから」
「ごめんね桜ちゃん」
「うぅ・・・もっとお話ししたかったです」
「また来るから・・・ね？」
「はいっ」

　洗濯と乾燥が終えた服を紙袋に入れてもらって玄関まで向かう。

「服、ちゃんと洗って返すわ」
「別に気にしなくて良いんだぞ？またうちで洗濯回せばいいんだから」
「いいんよ。これはウチがやりたいことやから」
「ならいいが・・・」

「ほら兄さん。希ねえさんを送ってあげてください」
「おう」
「そして帰りにアイス買ってきてください」
「抜かりないんやね」
「プリンも食ったって言うのに・・・」
「アイスは別腹です」
「別腹って言えば済むと思うなよこの野郎」
「とか言いながら兄さんはちゃんと買ってくれるって事を桜は良く知ってますよ」
「・・・・・・ふん」
「あ、大和君顔赤い」
「やかましい。行くぞ」
「あ、うん！桜ちゃん、またね」
「はいっ。また来てください」

玄関で桜ちゃんに手を振って大和君と一緒に柴垣宅を後にした。外はもう完全に真っ暗。今日新月だから月明かりも無い。だから道は外灯だけしか光をもらえるものが無かった。夢の中のような暗さだが何も怖くない・・・。だって、大和君が側に居てくれるから。

「ありがとう、大和君」
「ん？」
「こうやって送ってくれたり・・・ご飯とかも」
「俺や桜がしたかったんだからいいんだよ。友達だろ？俺たち」
「友達・・・・・・」
「希？」
「ウチらは過去も友達やった？」
「え？」
「過去ではウチはどんな人間やったのかな。大和君と仲良くしてた？」
「・・・・・・あぁ。変わらないよ」

「変わらない・・・？」

「あぁ、全然変わらない。お前はお前のままだ。喋り方が違えど希は俺の知っている希だ。友達を大切にしようとしてるお前は、正真正銘東條希だ」

正真正銘・・・東條希・・・。

そっか、記憶は無くしてもウチはあの頃と変わらないんだ・・・。

「ねえ・・・大和君」

「ん？」

「謹慎が終わって学校に来たら、エリチと一緒にもっとウチの事教えてくれへんかな？」

「希のこと？」

「たまに思うことやねんけど・・・ウチは大和君を知っているけど知らない。過去のウチがどんなのだったのか、大和君が知っている事を沢山聞きたいんや」

「けど、無理に思い出そうとしたら頭痛が」

「ううん、これは記憶を蘇らせるための代償の痛みなんや。こうやってずっとウチの事を大事にしてくれる人達が居た過去を、思い出したい。それならこんな痛み・・・なんともないんよ」

「・・・・・・・・・希」

外灯に照らされている場所まで走り、大和君の方を振り返った。

「ウチはもっと・・・もっともっともっと！大和君の事を知りたい！過去の君の事も今の君も。そして知ってもらいたい。今の『自分』を。それが記憶に繋がる唯一の『道』だと思うんや！」

道が無いなら自分で切り開く。楽しかった過去を思い出せば、思い出したくない過去も思い出すだろう。けど、それを全て探し出す。

これは一種の旅だ。ゴールはもっと先にある。止まらず歩き続けるのが今の自分の運命なんだ。

「ウチと一緒に・・・記憶を探してくれませんか？」

「友達のためなら手を貸す。それが『今』のお前と会ったときに約束したことだ。とことん付き合きあうぜ」

「へへっ・・・・ありがとう！」

自分の出せる満面の笑みを大和君に返す。その笑顔を見た大和君の顔が真っ赤になる。なるほど・・・大和君はこういった事は慣れてないんやね。『昔と変わらんね・・・』

「っ」

「希？」

あれ？ウチ・・・また。覚えてない事を覚えてる・・・。

「どうした？」

「っ・・・・・・なんでもないんよ。心配しすぎ」

「むぐっ」

背を伸ばして心配してくれている大和君のほっぺを引っ張る。おお？男の子やのにほっぺぷにぷにや！

「・・・・・・お餅」

「失礼だぞ」

「はっ・・・つい」

「これでも鍛えてるんだから」
「腹筋バキバキ？」
「・・・・・・そこそこ」
「おっ・・・おぉ～」
少し想像した自分が恥ずかしい。しかも思い出した事がある事を隠すのに男の子に軽くボディータッチをしてしまった自分がとても恥ずかしい。

「希顔赤いぞ」
「にやにやせんといて！」

・
・　・

「もうここらでいいよ。もうそろそろ家に着くから」
「そうか・・・ならここまでだな」
「うん・・・」
持っていた紙袋の紐をきゅっと掴む。欲張りなんだろう・・・もっと話たいと思うことが。

「じゃあ、またな」
「うん。また学校で」

お互い背中を向けて歩き出す。けど数歩歩くとすぐに足を止めてしまった。
彼に・・・ちゃんとありがとうを言いたい。

「大和君！」

「ん？」

いつもよりお腹に力を入れて言葉を発した。

「ありがとう！今度・・・・・お返しに・・・どっかでかけへん？」

大和はそれを聞いて、すぐに笑顔になった。

「あぁ。いいぞ！遊びに行こうぜ」

それを言い残して大和君は背を向けて、外灯に照らされていない闇の中に消えていった。

「・・・・・・・・・・・」

胸に手を当てると、鼓動が早い。胸が熱い・・・。顔も熱い。凄くドキドキしてしまっている。

「これって・・・・・デートに・・・なるやんね・・」
思い出してまた顔が赤くなる。だめだ!このままだと爆発しそう!
そう思って家に向かって小走りで移動した。
恥ずかしいはずなのになぜか顔が笑顔になっているのがよく分かる。

「今日は・・・・・・良い夢が見れそうやね・・・」

神様、早く記憶を返してください。そして・・・教えてください。

この嬉しくなる気持ちは、なんなんでしょうか?

お気に入り１００記念ストーリー（前編）

この毎日は変わらないのだろう。いつも通り起きて、いつも通り飯食って、いつも通り学校行って、いつも通り希と絵里と喋って、いつも通り勉強して、いつも通り家に帰って、いつも通り桜と喋って、いつも通り寝る。

こんないつもの日常がつまらないと思う奴もいるだろうが俺はそう思わない。こんななにも無い日常だから好きなんだろうな。こういったいつも通りがあるから『今』があるんだろう。

「今日も平和だな」

生徒会室には誰もいないのでその空間の中ポツリと呟いた。

窓から差し込んでくる日差しが心地良い。教室の中は日の光によって暖められポカポカしてるから眠くなってくる。

（絵里も希も居ないから少しならいいかな・・・）

そんな事を考えてると、さっきまで考えていた『いつも通り』が過ぎ去る。

瞬間、生徒会室の扉が勢い良く開かれた。

「大和！温泉行くわよ!!」

「大和君！温泉行くで!!」

「一瞬で目が覚めたぞどうした」

あ、温泉行く事になりました。

＊＊＊

その日での生徒会はすぐに終わった。まあ話し合う情報や問題なども特にないからだけどな。でも1つだけ言えるのは絵里と希がいつも以上にテンションが高かったってことだな。いや理由は分かるとおり温泉に行く事になったからだろうな。なんかスマホの買い物アプリ?か何かで希が温泉のチケットを当てたんだと。

しかも人数が7人用。

「またこのスピリチュアル女子高生は凄いことしたな」

『まさかウチも当たるとは思わんかったよ』

『でしょうね』

あ、因みに今の時間は夜で温泉の件について話し合うためにグループ電話してる。桜もいれてな。

「温泉ですか?」

「おう。7人でいけるらしいから桜も行くか?」

「いいんでしょうか!?」

『ええよ桜ちゃん』

『一緒に行きましょ』

「だってよ」

「な、なら準備をしないと!」

「落ちつけ。まだ2、3日あるから」

「わ、私とした事が・・・・・・」

「どーどー」

「誰が馬ですか」

「誰だろうな」

7人かぁ・・・。ありがたい事に行かせてもらえる俺と桜。後は希と絵里と・・・。

「後の面子はどうするんだ?」

『にこも連れて行くわよ』

『アイドル活動で疲れてるやろうしな』

「これで5人か。後は・・・?」

『それが迷ってるんよ。穂乃果ちゃん達を連れて行こうとしても誰か1人がはぶられる事になるんよ』
「出来れば全員連れて行きたいもんな」
『どうしましょ』
『エリチ他のアテある？』
『んー・・・・・・』

他2人・・・。悩ましいところだな。しかもそのチケット7人用っていうのが痛い。

他・・・・・・ねぇ・・・。

『エリチ』
『ん？』
『あの2人は？』
『え!?』
「ん？」
『これで丁度7人やで！』
『え・・・でも、いや確かに7人だけど・・・けど・・・うぅ・・・』
なんだろう・・・。電話越しで絵里がしどろもどろになっているのが目に見えて分かる。
「どうしたんだ？」
『ん？えっとなー、エリチのかｒ』
『希言わないで!!』
『えー・・・ぶーぶー！』
『ぶーぶー言わない！』
「???」
「兄さん。追求してはいけません」
「どうしてだ？」
「ぶん殴りますよ」

「やだ怖い俺の妹」
　でも気になるのは仕方ないんじゃないか？
「桜は分かったのか？」
「勿論」
「一体なんなんだ？」
「兄さん。デリカシーをググって下さい。１００回ググって下さい」
「多くね!?」
『どうするエリチ？こういう時にも会っといたら？」
『うー・・・・・・わ、分かったわよ・・・』
『よっし決まりや！』
「何が？」
「色々です」
『大和君！桜ちゃん！行く日程はまた後で連絡するから楽しみにしてて
てや！』
「お、おう」
「わかりました」
『きっと驚くやろな～大和君ら』
「ら？」
『エリチも楽しくなれるで』
『希ぃ！』
『あははっ！ほな、またね～！』
【東條希が電話から離れました】
「・・・消えた」
「ですね」
『はぁ～・・・』
「そして絵里から大きな溜息が・・・」
『もう・・・希ったら』
「一体どういう事なのかおれにはさっぱりなんだが・・・」
『うぅ・・・エリチカお家帰る！』
「今家だろお前!?」
【絢瀬絵里が電話から離れました】

「また消えた」
「ですね」
「・・・・・なにがなにやらさっぱりなんだが」
「兄さんは深く考えなくていいんですよ」
「その心は？」
「唐変朴念仁」
「２つの単語が合わさった!?」
「いいから寝ますよ。明日も学校なのですから」
「腑に落ちないのだが」
「腑に落ちるような事を考えるからです」
「どうしろと？」
「逆に考えるんだ・・・考えなくて・・・いいさと」
「おい」
「柴垣桜はクールに去るぜ」
「寝る前には歯を磨きなさい!!」
桜のなんらかのスイッチが入ったようだ・・・。

ピロリンッ

東條希
『日程は今週の土曜日から日曜日までの２日間！昼１２時○○駅集合で！遅刻厳禁！』

そしてその日の夢は桜にオラオラと無駄無駄された夢を見た。

＊＊＊

「ふわぁ～・・・」

「兄さん。気を抜きすぎです」
「遅くまで学校の課題してたんだから仕方ないだろ」
半分はお前が夢に出てきたお陰で眠れなかったんだけどな・・・。
希の言うとおり、一泊用の荷物を用意して集合場所の駅には到着したのだがまだ希たちが到着していない。
「そろそろかな」
「そうですね。もう集合時間に近付いてきましたし」
「おーい!!」
「噂をすればなんとやらだな」
声のした方に顔を向ければ、少し大きめのリュックを背負った希、絵里、にこが現れた。
「おはようさん」
「おはよう2人とも」
「おはよう」
「よう」
「おはようございます皆さん」
「うんうん!遅刻なしとはいいやん!」
「凄いテンションが高くなってるのが分かる」
「希、温泉に入るの凄く楽しみにしてたから」
「にこも引っ張りまわされて大変だったわよ」
「一体何があったんでしょうか?」
「今回の温泉のためにそれ専用のシャンプーとかを買うために私と絵里は引きずりまわされたわ」
「楽しみだったのがひしひしと伝わってくるな・・・そう聞くと」
「希ねえさんの背中からオーラが見えます・・・」
「奇遇だな俺もだ」
いやそう考えるけど俺も楽しみだった。温泉っていうのもあるけど希たちとこういったプチ旅行みたいなモノを一緒に行けるのが凄く嬉しい。俺と希との関係をしってなお協力してくれる心優しい女の子達だからな。そんな子達との温泉。楽しみにならないわけが無い。

「そういえばさ、残りの2人は誰なんだ？俺も桜に何回も聞いたんだけど応えてくれなくてさ」
「お楽しみにってやつです」
なんだそれは・・・。
「大丈夫よ。もう少ししたらその本人達が来るから」
「因みに聞くがどんなやつらだ？」
「1人はまた後で説明するけどもう1人についてはエリチに聞いたらええよ」
「絵里？」
視線を移すと真っ赤になった顔を両手で隠している絵里が居た。
凄い・・・湯気が出てる・・・。
「えっと・・・・・私の大好きな人・・・ね・・・」

ん？

「あれ？それって・・・・・」
「やっと気付きました？」
「多分・・・あってるよな？」
「はい」
絵里の大好きな人・・・ってことは？

『おーい!!』

「噂をすればなんとやらやね」
声のした方に目を向ければそこには俺と同い年ほどの男が『2人』

歩いてきた。
１人は１８０近くの身長でスポーツマンらしい体格で綺麗に整えられたさっぱりとした黒髪に鋭い目の形をした少年。もう１人はその男よりほんの少し背が低く、スポーツ刈りにした髪型に眼鏡をかけた優しいお兄さん風の男。おそらくこのどちらかが絵里の『彼氏』。

だが、それがどちらかすぐに分かった。

なぜなら、その彼氏さんが俺に向かって・・・。

「お前かァァァァァ!!」
「えぇ!?」

明らかに殺気出してますよと言わんばかりのオーラを放出させながら全力疾走してきたからだ。

「絵里を危ない目に合わせたのかお前かぁぁぁぁぁぁ!!?」
「ぎゃっふん!?」

綺麗なスポーツ刈りのお兄さんのとび蹴りが顔面に直撃した。

「大和くん!?」
「隆也!?」

＊＊＊

横山隆也、俺が通っている音ノ木坂からまあまあな距離の場所にある高校に通っている男子高校生。見た目はかなり厳つい顔面をしているが性格は顔面とはまあ正反対。人が困っていると放っておけない人間。そして絵里の彼氏。

そしてもう1人の男が中上翔樹。横山隆也と同じ高校に通っている男子高校生。柔道部に所属しているザ・武道人間。へらへらしているが直感で想ったのが怒らせたらヤバイタイプ。そして後から聞いたけど、俺の後輩、園田海未の彼氏らしい。マジか。

「いやー楽しみやね温泉」
「この頃生徒会でパソコン作業が多かったから肩が凝ってたのよね〜」
「それだけなのかしら？」
「・・・・・・・・・・・・・」
「えっと・・・にこっちに桜ちゃん？なんでウチらの胸を見てくるん？」
「あれですね・・・けしからん胸ｓですね」
「胸ｓ!?」
「桜奇遇ね。私もそう思っていたところよ」
「ですよね」
「私達何も悪い事してないのに!?」

今は温泉に向かうための電車に乗って移動中。右からにこ、桜、絵里、希という順番に座り、プチ女子会を開いていた。

ちなみに男たちはと言うと・・・・・・。

「いやー、良い武器無いなぁ、あ、８８式見っけ」
「翔樹。そこにリュックあるから拾っとけ」
「大和。ドリンクあるか？ないなら分けるぞ」
「サンキュ。あ、隆也・・・敵来た」
「了解」

電車に乗るまで修羅場を繰り広げていたのにも関わらず、今は3人集まってサバイバルゲームをしている。本当に先ほど出会った者達

なのだろうか・・・。
あ、この前の生徒会部活動会議事件で件には謝罪はした。おもいっきり頭下げた。
２人は事件がおきる前からお互いの彼氏からは話は聞いていたらしく、ある程度の事情は把握していたらしい。今回は絵里たちに彼氏が居る事を知らなかったから仕方ないとして、またこのような時が合った時はちゃんと話をしてくれという事で打ち止めとなった。けど自分の彼女が危ない目に合ったのには変わらないからケジメとして今度飯を奢る事になった。勿論、彼氏彼女含めて。
正直ぶん殴られると思った・・・・・・蹴られたけど。

「いや・・・でもすまない隆也、翔樹」
「もう何回目だよ。事情は絵里達から聞いたからもういいんだよ」
「そうだぞ。確かに隆也には蹴られてたけど気にするなよ」
「いや、多分俺も同じ立場なら同じ事してたと思う」
「まあ、済んだ事言ってもなぁ・・・、あ、２人の横に敵３人」
「「ぶっ殺してやる」」
「凄い意気投合してるやん・・・」
「男の子って不思議よね」
「「間違いない」」

どんな事があっても話し合ったり、ぶつかり合ったりしたら案外仲良くなれる男たち。分かる人にはわかるだろう・・・。

そんなプチごたごた＆プチ雑談・ゲームを交わしながら、俺たちは電車に揺られながら目的地を目指した。

お気に入り１００記念ストーリー（後編）

電車に揺られること1時間少し。ビルだのタワーだのと言っていた景色とは一変して緑が多い地域に入った。

俺たちが温泉に行くのもその緑の多い場所にある温泉。露天風呂に入りながら森林浴も味わえるという一石二鳥が売りな銭湯。

あとは女性に人気。美肌効果など腰痛にだの肩こりにだのなんでもござれな温泉でもあるといわれている。

だからなのか女性陣が目を輝かせているのは…。

ちなみに男性陣はこの一泊二日でのプチ旅行での枕投げが楽しみなのかさっきから肩をブンブン回している。総当たり戦。もちろん俺も容赦はしないつもりだ。

女性陣は女性陣でこの旅行での雑談に花を咲かせているからそっとしておこう。男どもは男らしく馬鹿みたいに騒ぐのがお似合いだ。

「そういえば…」

温泉に向かって歩いているときに絵里が口を開いた。

「部屋割りとか決めているのかしら？」

「それはウチが決めてるよ」

「いつのまに!?」

「とは言っても男性陣と女性陣に別けただけやねんけどね」

「そりゃそうよ。こんな化け物どもと一緒になんか寝たくないわ」

「「誰が化け物だ!!」」

「確かにそうね。一人は身長が１９０を超える大男。一人は運動神経抜群のバスケットマン。そして最後は期待の柔道男。護衛人としては頼りになるけど一緒に寝るのは少しねぇ…」

「なに？俺たちは化け物と思われてるの？」

「心外だ」

「偏見だー！」

「「けど褒められて少し嬉しいです」」

「こいつら単純にもほどがあるわね」
「存外あほですね」
アホのレッテルを張られました。

・
・
・

「お待ちしておりました。ご予約されておりました東條様ですね。お待ちしておりました」
団欒を挟みながら歩いているとお目当ての銭湯に到着。見た目は勿論完全に旅館。ザ・和風。そして仄かに匂う畳の香り。玄関も広く解放感あふれる構造。
「洋風もいいけどやっぱり日本の和風はいいわねぇ」
「あ、そっか。絵里はロシアのクォーターだったな」
「和風こそまさに日本の雰囲気が出るから好きなのよ」
「エリチ紅茶も好きやけど日本のお茶も好きやもんね」
「和菓子も好きよ」
「穂乃果の家の和菓子大好きなのよね絵里って」
「今度買ってきてやるぞ絵里」
「おい彼氏落ち着け」
「二箱…いや、三箱は」
「おさえろ翔輝！」
「はいさ!!」
「てめえらやめろ！俺に和菓子を買いに行かせろぉ！」
「そんなことしたらアレするぞ！」
「アレってなんだぁ!?」
「貴方達静かにしないと木っ端微塵にするわよ」
『すいませんでした…』
なんだろう…金髪ポンコツ最強無敵女帝とてもこわい。
「男性方々はこちらへ、女子の方々はこちらにございます」

「よぉし。大和君ら、絶対ウチらの部屋来たらあかんで」
「なんで？」
「もし着替えてたらどうするんですか兄さん」
「あ……」
「私たちがそっちの部屋に行くのはＯＫ」
「もし私や希、にこや桜ちゃんの着替えを見たら…」
「み…見たら…？」
　あまりの気迫にごくっと生唾を飲み込んでしまうほど今の絵里の顔は般若にそっくりだった。

「隆也は半殺し、大和は希と一週間口を利くのは禁止、翔輝は海未に報告ね」
「すいません絶対しないです！」
「そんなの俺が耐えられない！」
「やめて！海未だけはやめてくれ!!」
「なら気を付けるようにね。少ししたらお風呂行くために呼びに来るから静かにしてるのよ」
「大和君後でね」
「ほかの人たちに迷惑かけるんじゃないわよ」
「兄さん。では後ほど」
　全員そう言い残して自分たちの部屋に入っていった。しかもカチッと鍵も掛けて。
　顔を合わせた俺たちは絵里を怒らせたらどうなるか身をもって分かったので急いで部屋に逃げ込んだ。

「あー…でも温泉なんか久しぶりだな」
「サウナ入りたいなサウナ」
「あと牛乳も飲みたいぜ」
「「違いない」」
　部屋に入るとそこには布団がみっつほど並べられたあった。とい

うことで適当に一番右が隆也。真ん中が俺。一番左が翔輝となった。

「ん？」
「どうした大和」
「海未にはってどういうことなんだ？さっき言ってた」
「あー…それか」
「え？」
「翔輝の彼女なんだよ海未は」
「……まじか」
「まじだ」
　聞いていいような悪いような……。
「あの海未も恋する乙女だったのか」
「おいあのとはなんだあのとは」
「なんかキスだけでうろたえそうな……」
「あの海未だって可愛いんだぞ！甘えたい為に頑張って俺の横に座ったり！一緒に居たい時は服の裾摘まんできたり！膝の上に座ってきたら猫のように甘えてくるような可愛い彼女なんだぞ!!」
「惚気か」
「惚気だな」
「いや待って。なら今回のこの旅行よくお許しが出たな」
「絵里たちがいるから心配はいりません。けど何かあったらねじりミンチです！って言われた…」
「ねじりミンチ…」
　海未の最恐の力の片鱗を見た気がする…。
　そしてそんな時、隆也が口を開いた。
「それよりお前ら…大事なことを忘れてないか…？」
「へ？」
「何が？」
「ふふふ……ぬんっ！」
　着ていた服を脱ぎ捨て浴衣に腕を通す隆也。

「大和。今から俺たちはどこに行く？」
「え？温泉…」
「翔輝。俺たちの性別は？」
「気が狂ったのかよ…。男」
「そうだ。男たちが今から温泉に入る」

何を言い出すんだこいつは…。温泉？男…？何を……。

「……あ」
「ふっ…大和、翔輝気づいたか」
「ほ、本当にやるのか隆也」
「こればれたらまじめな半殺しだぞ！」
「仕方ないだろ……いくら彼女だからって…こういう時しか見れないんだからなぁ……」
（こいつもう彼女に対して末期じゃねえか……）

「大和。お前も本当は見たいだろ…？」
「な、ばれたか……」
「俺の目はごまかせん。そして翔輝。お前はどうする？」
「お、俺はさすがにできるか！彼女がいるのに!!」
「そうは言っているが…その時になったらそんなセリフが言えるのか？」
「ぐっ…」
「大丈夫だ…。ばれなければいいんだ…」

「バレなければな!!」

「隆也！」
「こいつ…男の中の男だ!!」

そうだ。今から始まるのは温泉。だがこの旅館には『アレ』がない。だからこそ俺たちは『コレ』しか方法がない。男なら絶対に夢見たい桃源郷。憧れの聖地。

「いいか！ミスは許されない!!絶対に任務を遂行するんだ!!」
「ボス！」
「兄貴!!」
「準備はいいか野郎ども!!俺たちの任務……それは……」

全員声を合わせて叫んだ。

『覗きだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』（小声）

・・・

「男たち何を叫んでるのかしら？」
「嫌な予感がします…」

「ちょっと釘パンチを打ってくるわ」
「エリチストップ!!まず浴衣着て！まだ下着姿やん！」

＊＊＊

カポーンッ
扉を開ければそこには大量の湯気に囲まれた風呂場が顔を出す。
大きな湯舟。小さな湯舟。水風呂。サウナなど多種多様の温泉設備。
外を出れば森林に囲まれた露天風呂。

そしてその中に現れた美少女達。

「お背中流しますよ～」
「ありがとう桜。気持ちいいわよ」
「エリチ～。ウチの背中も流して～」
「はいはい」
心行くまで温泉を楽しんでいた。

「あれエリチ？またおっきくなってへん？」
「きゃぁっ!?の、希!?んっ、どこ触って!?」
「ふっふっふ～よいではないか～」
「よかないわよ～！」
「……あのでかいの取れないかしら？」
「願うしかないです」

ちなみに男たちは…。

「一体…向こうで何が起こってるんだ…」
「わからん…だが俺たちにとっちゃ最高なことが起こってるんだ」
「おいやめとけよお前ら」
大和、隆也は男湯と女湯の境目になっている塀のところに聞き耳を立てていた。
ちなみに翔輝は冷静になって覗きには参加しなかった。参加したら愛する彼女に何されるかわからないからだ。

「なあエリチ。最近隆也君とはイチャイチャしてるん？」
「ふぇ!?な、なんでそんなこと聞くのよ！」
「だって気になるやん？恋する乙女が今どんな状況なのか」
「私も気になります」
「話してみなさいよ」
「と、とは言っても普通よ？時間あるときに私の家か隆也の家に行ってゴロゴロしたりとかデートしたりとかよ」
「ゴロゴロしたりしながら何してるん？」
「な、なにを…？」
「ほかにあるわよね～？」
「わくわく…」

「その…隆也の胡坐の間に座ってみたりとか…ベットの上で一緒に寝たりとか…」
「「可愛い!!」」
「へっ!?」
「やっぱり隆也大好きなのね」
「可愛いです絵里さん」
「キュンキュンするわ～」
「あうぅう…」
顔も真っ赤にした絵里が湯舟の中で悶える。

「お前らそんなことしてたのかこのリア充」
「い、いやたまになんだが…」
「こいつら爆発すればいいのにな」
「殴りたい」
「俺も」
「おい待て翔輝お前も彼女持ちだろうが！」
「てめえら俺の敵だ死にさらせぇ！」
「「うおおおお!?」」

男たちの大乱闘勃発。

「隆也のことは……大好きです…」
「「おぉ～…」」

絵里の顔が真っ赤になっているのは温泉のせいなのか恥ずかしいからなのかはご想像にお任せいたします。

「がっはぁ!?」
「隆也が血を吐いて死んだ!?」
「この人でなし!!」

「そ、そういう希はどうなのよ！大和とはどうなのよ!?」
「へっ!?」
「この前一緒にごはん食べに行ってるの知ってるのよ！」
「な、なんでそれを!?」
「桜ちゃんから聞いたわ」
「桜ちゃん?!」
「ごめんなさ～い！」
そして次は希が標的となった。

「と、とは言っても普通やで!?ごはん食べに行ってウチの昔の記憶の話をしたりとか、『今』の私がしらない大和君の話をしたりとかやで!?」
「カップルじゃない！」
「兄さん…彼氏になっていたんですか」
「バカップルかもね」

「や～ま～と～く～ん？」
「な、なんだよ…」
「お前も大概じゃねえかー！」
「がぼぼぼぼぼっ!?」

「その…大和君優しいからついテンション上がっちゃってお話するのが…とても楽しかった…かな。えへへ…」

「げぼぁ!?」
「大和も死んだ!?」
「死ぬな大和！まだ覗きすらしてないんだぞ！」←復活
「そこはしなくていいんだよ!!」

「そういえば海未もこの前翔輝のことで惚気てたわね」
「にこその話聞かせて！」
「私の周りカップルが多すぎる気がしてきました…」

「え？この前翔輝が買ってきてくれた髪留めが可愛いすぎて嬉しいって言っていたのと、初めて翔輝から買っていただいたアクセサリーだから宝物なんですって満面な笑顔で言ってきたわよ」

「ぶるぼぁ!?」
「翔輝もやられた！」

「もうやめてくれぇぇぇ！」
完全ノックアウト状態。

「みんな幸せそうね」
「兄さんが幸せそうでなによりです」
「桜からしたらどう？大和は」

「兄さんは自慢の兄さんです。私の兄さんがこんなに大きな存在になっていると知れて私は満足です」
「いいお兄さん持ったね桜ちゃん」
「ほんと、頼もしい兄貴よね」
「兄さんが褒められるのはいい気分ですね」

「桜……」
「いい妹持ったな大和」
「大事にな」
「おうっ…」
「じゃあそろそろ上がりましょうか」
「せやね」
「そろそろ上がらないと逆上せますしね」
「体ポカポカしてるから眠くなりそうね」
「じゃあ俺たちも行くか」
「だな」
「牛乳飲まないと」

「じゃ、行きましょうか。私は早く上がってずっと聞き耳立ててたあの男たちを潰さないといけないから」
「「っ!!?」」
通常の三倍のスピードで俺たちは風呂場から部屋に走り出した。

(((バレてた!?)))

その後、絵里の釘パンチが全員に炸裂しました。

＊＊＊

「うごぉ…まだ腹が痛い」

風呂上がりに自分らの部屋に逃げようと思ったが、見事に絵里に捕まり全員ぶちのめされた俺たち。数十分間ぐらい悶絶した後晩御飯の時間になったから食べたものの全然体力が回復しない。

隆也は絵里にお説教され、翔輝は電話で海未にお説教されている状態。ちなみにこと桜は我関せずでアイドルの話に花を咲かせていた。

「風でも当たるか…ん?」

夜風に当たろうかなと考え外に出ると浴衣に身を包んだ希が立っていた。

「希?」

「あ、大和君」

「希も風当たりに?」

「うん。エリチたちは大変そうやからね」

「……何も言えない」

「まったく大和君らはスケベなんやから。覗きはしなかったとしても女の子らのガールズトークに聞き耳立てて」

「いや…なんというか…すまん」

「ええよ。エリチがいろいろしてくれたから」

「まじであいつ殺す勢いだったからなぁ…」

あいつは怒らせてはならないリストの第一位だな。

「今日、とても楽しかった」
「…そうか」
「昔の私はどうだったかはわからないけど…今の私にとってはとても楽しい一日だった」
「そうか」
「大和君は楽しかった？」
「とてもな。絵里と海未の彼氏に会えたし友達にもなれたしな」
「いい休日やったかな？」
「最高にな」
「よかった。神様がウチにええものくれたな」
「まずこの旅行自体行けると思わなかったしな」
「ウチも楽しかった～。神様に感謝！」
「感謝だな」
　確かにこの休日は充実した日になった。しかも高校で友達になったやつらとその彼氏たちとだ。また友達の輪が広がった気がする。神様、希の記憶は早く戻してくれ。そして今回のこの旅を楽しくしてくれたのは感謝するぜ。『この皆』で旅行を楽しめたことにな。

「希」
「んー？」
「ありがとな」
「いいよ今回の旅行のやつは」
「いや、そっちじゃないんだがな…」
「へ？」
「いや、気にするな。そろそろ入ろう。湯冷めで風邪ひいちまうからな」
「ちょ、ちょっと隆也君!?さっきのどういうことなん？お～い！」

さて、また学校と生徒会頑張るとしましょうか。

『おまけ』

隆也と絵里がいる部屋に戻ると二人がキスしてたので写真を大量に撮ってやった。

「やめろぉぉぉ!!」
「やめてぇぇぇぇ!」

カシャカシャカシャカシャカシャッ!

初めてで初めてじゃないデート

明日は俺にとって大事な戦いの日である。
その為の仕度をする為にリビングで我が家のマスコットの顔をもふりながら作戦を考える。

「なあミィ」
「にゃ～」
「明日希と出かける日なんだが」
「にゃん」
「どうしたらいいのかわからないんだ」
「にゃ～ん」
「しかもだ。こんな俺が希を楽しませることなんてできるんだろうか」
「にゃ」
「確かに俺も一人の男だ。どんな時でも最善を尽くして希の為に頑張ろうとは思うよ」
「にゃ・・・」
「けど自信がねえんだ。最後に希と一緒に遊んだのって昔の話だ。あの時と同じ要領で楽しませれるかって聞かれたら多分無理だって答えると思う」
「にゃん…」
「俺は明日一体どうしたらいいんだろうか。レディーファーストは勿論だし、飯食う時は希に合わせるし、全身全霊を尽くして希を楽しませるけど、俺にそんな力があるんだろうか」
「やれやれ・・・」
「待てお前今喋った？」
「にゃん」

気のせいか…疲れてるのかな・・・。

「兄さん。明日は希ねえさんの為に頑張るんですから早く寝てください」
「・・・桜」
「それとミィは私と寝ますので」
「本当にミィの事好きだよな」
「にゃにゃ」

・
・　・
・

晩御飯と風呂を済ませて、俺、桜、ミィと一緒にソファに座って寛いでいるとき。
「それと兄さん」
「ん？」
「楽しませるではなく、２人で楽しんでください。ねえさんだって兄さんには楽しんでもらってほしいと考えているはずです」
「お、おう…」
「いつでも冷静に、礼節さを保ちつつ、紳士のごとく、希ねえさんと楽しんでください」
「俺は執事か何かか？」
（まぁ…この二人の場合ではどんなことでも楽しめると思うのですが…）
「桜？そんな俺の顔見ても何にも出ないぞ」
「うるさいですよハルク」
「いや誰がハルクだ」
「さっさと明日の服の準備して寝なさいじゃないと木刀でタコ殴りにしますよ」
「わかりましたすぐに準備して寝ますので許して下さい頼むからその木刀を下ろせぇぇぇぇぇ!!」

桜に木刀にフルボッコにされて部屋に戻る俺。そのまま体をベットに倒れさせ天井を向く。

「・・・・・・とりあえず、俺がやれるべきことはやるしかねえよな。明日の事は明日の俺に任せるしかねえ」

明日の服、必需品などを準備しベットに横になる。

「希との・・・デート・・・何年振りかな…」

早めに寝ておこう。寝れなくて遅刻するのはごめんだ。

「はい・・・はい…。了解しました。私も今から準備します。では明日、私の家集合で……ボス(絵里さん)」

『大和＆希デート追跡任務(スニーキングミッション)…開始です!!』

＊＊＊

『１３時に駅前で集合!遅れたらわしわしの刑やで!』

朝に起きて準備をして駅に着いたのはいいものの、当の本人が全く来ない。そして集合時間を完ッ全に過ぎてしまっている。

現在時刻１３時４０分

「ねぇねぇ・・・あの男の人でかくない?」

「やばっ!超でかい!」

「巨人だ!巨人だー!」

頼む・・・希よ早く来てくれ。早く来てくれないと俺は注目の的となると同時に巨人として駆逐されてしまう。

この歳で死因がうなじをそぎ落とされるだなんて俺は嫌だぞ。

「っていうか本当にどうしたんだ…迷子・・・な訳ないか。あいつの方がこっちでの生活が長いはずだし」

一応連絡は入れてるが反応が無い。まさかまた・・・？いや、さすがにあり得ないハズだ。
これは希を迎えに行った方が良いのだろうか？だが家を知らない。絵里に連絡を入れて場所を教えてもらおうか。だが人の住所を勝手に聞くのもプライバシーとして・・・。

ツンツンッ

いや…だがあいつの友達として何もしないわけには…。もしもあいつが事故なんかに遭っていればもっての外だし…。

ツンツンッ

そうだな。俺はあいつの友達だ。もうあいつの薬んでいる姿は「大和くんっ」いでででで!?」

え？え？え？ほっぺ無茶苦茶痛いんですけど!?
「もう！先からツンツンしてるのになんで気づくんがおそいん!?ウチ怒ってまうで!?」
俺の頬を引っ張り自分の頬を膨らませてプンプンと怒っている少女をに目を移す。
そこには、ピンクに染められている服と黒色のスカート、そして黒のニーソに白のふわふわがくっついているブーツ。いつも通り髪をピンクのリボンで二つに結い、黒の帽子を被った少女、俺がここでずっと待っていた張本人、東條希が居た。
「希・・・」
「ごめんね遅れて。用意に時間かかってしまって…」
「いや、それは別にかまわない。俺も今いたところだから」
「本当に～？嘘ついてない？」
「ほ、本当だ」
「ふ～ん。ならそういう事にしておこっかな」

「ぬぐっ・・・」
おのれ小悪魔たぬきめ。分かってて言ってるんだろう。そうかそうか。貴様がそういうつもりなら俺もある手段を取らせてもらう。

「希」
「ん～？」
「似合ってるぞその服。可愛いぞ」
「お？大和君が褒めてくれるなんて！こりゃええことありそうやな～」
あ、あれ？照れない？昔はこういう事を言うと顔真っ赤にして照れるはずなのになぜだ!?作戦が失敗した!?

「ほら早速行くで。時間は有限！いざ行かん！」
「お、おい待て希！おいてくな」

（や、大和君がウチの事可愛いって言ってくれた!?う、嬉しいけど恥ずかしい方が勝ってるんやけど!?）

「ボス、あれをどうみますか？」
「耳をよく見なさい。赤くなってるわ」
「効果は抜群・・・という事でしょうか」
「十中八九その通りよ。あ、移動したわ。付けるわよ」
「了解」

約二名ほど、二人を追跡中。

・　・　・

「それで？今日はどう言った予定で？」
「んー・・・日用品と服かな？ウチ一人暮らしやから自分のものは自分で用意せなあかんし、あと新しい靴とかかな？この前エリチと来たときにええ靴があったんよ」
「ほう、靴か」
「ウチ足小さいねよな。２４センチ！」
「やっぱり女の子はそれぐらいかサイズは」
「大和君は？」
「俺の足のサイズ２９だな」
「やっぱり身長でかいとそれくらいやねんな」
「けどこれ意外と困るぞ？中々見つからないから」
「いつもどうやって靴買ってるん？」
「まず店に言って確認した後、あったらそこで買う。なかったら通販かな」
「足でかい人って不便やね」
「まず背がでかいこと自体不便だぞ？服のサイズ合わないときあるし、壁によく当たるし、ベットから体ははみ出るし」
「背が高い人ってかっこいいと思うねんけどな～」
「まあ、男は身長に憧れるものだしいいっちゃいいんだけど」
「それの対価がね」

「何回たんこぶつくったか」
「数は？」
「指じゃ足りない」
「たんこぶ大和君」
「やめんか恥ずかしい」
「エリチに教えとこっと♪」
「やめろコラァァァァ！」

「そうなの？」
「兄さんはよく頭をぶつけていたのは事実です」
「たんこぶ大和」
「ＬＩＮＥの名前それにしますか」
「今度学校で言ってあげようかしら」
「目玉カッ！て開くでしょうね」
「間違いない。あ、移動したわね」
「行きましょう」

．．．

駅から移動し俺たちは近くにあった大きめのショッピングモールに場所を移した。日用品から何から何まで。生活には欠かせない商品がずらりと並んでおり、家庭品から家電、などなど。後はファッション商品、メンズ商品、アウトドア商品、ゲーム。多種多様が集まっているショッピングモール。

「日用品は後でええから、先に靴見ても構わん？」
「いいぞ。荷物持ちも任せろ」
「流石力持ち」
「それしか役に立てんからな」

エスカレーターを使って４回のファッションエリアへ。ここは東がメンズ用品。西が女性用品になってるから分かりやすくて助かる。

「えぇっと・・・」
「お目当ての商品はあるか？」
「確かこの辺りにあったはずやねんけど…」
「全部似たような感じに見えるんだが」
「もう大和君。そういうのは思っててもロにしたらあかんねんで」
「す、すまん」
「そんなのじゃ女の子に嫌われるで？」
「ま・・・まじか」
（それは困る。色んな意味で）
「女の子は繊細で弱い生き物。そしておしゃれにすごい力を入れとるんやで」
「凄いな」
「女の子は実用性より可愛さとかそっちメインやねんで」
「む、難しいんだな」

「難しい、そしてとてもか弱いんや」
「か弱い…」
か弱い…。確かにそうかもしれない。希の言っているか弱いは多分物理的でもあるし精神的って意味でもあるんだろう…。そうだ。か弱くなければ希は今はこんなことにはなっていないのだろう。人間はとても・・・脆いのかもしれない。

「大和君」
「あ、おう」
「ごめん・・・変な話振ってもうた」
「いや、大丈夫だ・・・問題ない」
「確かにか弱い…けどウチはもう大丈夫やから」
「大丈夫？」

「だってウチには…柴垣大和っていう人が守ってくれるから！」

「っ……」

守る…か。

「ああ、そうだな。俺が守ってやる」
「へへっ。安心や！ほら、暗い話はこれでしまい！はよ探しにいこ！」
「おう」

「コーヒー飲みましょうか……」
「私も……」

・　・　・

「あった！」
「お？これか」
「うん！シンプルでええ感じなんよ」
　希が手に取ったのは足首からすねにかけてまでの大きさのあるブーツ。厚底で分厚いヒール。紐とベルトであしらわれたそれはまさに言う【今時の女性】が履きそうなブーツであった。

「このブーツ、値段もええしウチにあうサイズやったから買う決めてたんよ」
「確かにこれは希に似合いそうだな」
「ありがとう。一応履いて確認しよっかな」
「だな」
　近くにあった椅子を希の近くに持っていきそこに腰を下ろさせた。
「んっ・・・・ほっ・・・・と」
「一人で履けるか？」
「もう馬鹿にしすぎやで！」
「いや、履きにくそうだからつい…」

「もうっ」
プンプン怒る希も可愛い…じゃなくて。こんな長い靴履きにくそうだと思うのは俺だけだろうか…。

「ぬっ…ぬぐぐ・・・」
「案の定じゃねえか」
「ちゃ、ちゃんと履けるもん！」
「ったく、貸してみろ」
「え？」
「こういうのは…まず紐を上からじゃなくて下から解いて行って」
「ふむふむ…」
「スペースができるからここにゆっくり足を入れて・・・」
「んっ…」

自然に希の足を掴んでゆっくりと靴に入れていく。
（あ、あれ？俺なんでこんな自然に希の足掴んでるんだ？）
傍から見た俺たちの状況。俺が膝をついて希の足を右手で優しくつかんでブーツに入れている図。何もいかがわしくはないとしてもこれっていいのだろうか。完ぺきに女王様とそれに使える執事の絵じゃないのだろうか。

（い、いや気にしてはいけない！平常心だ平常心！）

「あ、入った！」
「よ、よし。けど一応確認としてかかとに人差し指を入れるんだ。それで少し隙間が空いていればＯＫ。入らなかったら少しきついかもしれないから別のサイズのブーツにしよう」
「わかった。えーっと・・・あ、結構入ったから大丈夫かな」
「じゃあそのサイズで決定だな」
「うん。会計してくる！ありがとうな大和君！ええ豆知識やわ！」
「おばあちゃんみたいに言うな」

（あー…びっくりした～…。大和君自然にウチの足掴むんやもん。いや、下心は無いのは分かってるけどやっぱり恋人同士じゃないから恥ずかしい・・・。というか、なんで大和君は平気なん・・・？ウチだけ恥ずかしがってるのが馬鹿みたいやん！）

「いらっしゃいませ」
「これお願いします」
「はい、お値段は６９８０円です」
「えっと・・・１万円からｄ「すいません。これで」え!?」
「あらあら♪はい、１万円お預かりしますね。おつりで３０２０円です。ありがとうございました！」

希が金を出そうとしたところを俺が横から代金を支払った。
ブーツの箱が入った紙袋を希に手渡す。

「え、や、大和君？なんで？」
「いや、これは俺からの贈り物だ。今日は久しぶりに希と遊べたからさ、今日はそのお礼ってことで」
「い、いいん？大和君だって自分のお金やのに」
「いいんだ。俺の気持ちを受け取ってくれ」

そう言うと希は紙袋をギュッと抱きしめ俺に満面の笑みを向けてくれた。

「ありがとう大和君！私…これ大切にするね！」
「あぁ」
「えへへ…男の人からのプレゼント・・・嬉しいなぁ」

にっこにこ。すごいにっこにこの希。なんだか周りに花が飛んでるように見えるのだが。

「大和君！」
「ん？」
「次日用品のところ行こ！日用品！」
「そうだな。行くか」
「そこでなんやけど…」
「お？」
左手に紙袋を持ち、右手を俺に差し出す。

「手・・・繋がへん？」
「手？」
「そ、その…あかん？」
「いや、いいぞ？」
「昔のウチもしてたはずやから」
「確かにな…。なにかのきっかけになるかもな」
「それに・・・今のウチが…繋ぎたい・・・。いい…？」
「お、おう」

そんな顔すんなよ顔真っ赤でよ。俺の方が照れるだろうが…。

「ほら」
「・・・えへへ」

希の右手を左手で握る。
うわ…。変わってない。昔と一緒でふにふにしてて柔らかい。超柔らかいな…。

「手・・・にぎにぎしすぎ・・・」
「悪い…」
「すけべ・・・エッチ・・・」
「うぐっ・・・・・・」
「罰として今日はずっと握ってて…」
「了解した・・・・・・」

なんだろうな…初めてじゃないのに…なんでこんなに胸がどきどきするんだろう…。

（大和君の手・・・ごつごつしてて男らしい…。かっこいいな……）

「い、行くか」
「や、やね…」

その後の俺たちの顔は終始ずっと真っ赤であった。

「甘い……」
「甘いわね…」

本日のブラックコーヒー、時よりミルクコーヒーとなることでしょう。